たると手に取る如く我には見ゆるぞかし。

（八）

民之助様の一所にならせられてより、御二方の御様子暴に著しく變れり。日々の事、萬般につけて別々なりしが、今は殆ど同一になりぬ。始めて我目を驚かせし不思議の御食事も同一になりて、御茶にも顔を合せられ、納涼にも一つの風を分けさせられ、御物語も尋常なり。恁くては御夫婦として異りたる所も無し。奥様の御容體の例ならず見えさせ給ふを、然も無しと固く仰せられしには、民之助様も御疑の存り給へるやうなりけれども、御間には當分御心も着れずして過ぎぬ。御心の着かれざるは、民之助様の迂闊にあらず、御二方の御謹慎の深きなり。實にも御謹慎の深きこと、從來を知れる我には、能くも恁くまでにと驚かるゝばかりなりけれども、有繋に奥様の御心弱く、御胸の内の盡く御顔に顯るゝを得慎みたまはざりけり。假旦那様の御心解けて昵うあそばさるゝにはあらざるも、昨日迄の御所爲に比べては、針の筵の板敷に變りたりとや謂ふべき此頃を、如何なれば喜ばせ給はぬ奥様の御顔の曇は例の如く、日を經るまゝに御様子は春雨の頃に復る。恁くてあらば、やがて民之助様の再び見尤めたまひて、秘めたまふ事の露顯も今の間ぞと、險しき崖を馬の

躍るばかりに氣遣はれたり。然れども我志を謂はゞ、此不思議は一日も早く民之助様の御目に留らむをこそ喜ぶべきなれ。我願を遂ぐべき心の切ならば、進みて此不思議を御耳にこそ入るべきなれ。我は其を知らざるにあらず、奥様は此不思議を蔽ひたまはむとて、憂きが上にも憂き思ひを爲させ給ふとまでも、知らざるにはあらねども、あれまで頑に情無く御側をは嫌はせたまひし旦那様の、さりとは打て變りて此頃のやうに遊ばさるゝを見るにつけて、此一大事民之助様には知らすまじき御用意の深きを想へば、さばかり裏ませたまふものを憚も無く打明て、御二方を苦め參せむは、我心の忍びざるのみならず、さては大なる罪をも犯すが如く、恐しく覺ければなり。

御不和の原因の如何なる事かを、分明に我の知るならば、彼御方に漏して可否の分別もあらむ。深く裏ませたまふ事なればとて、強ちに他言を慎むべきにもあらず、其事に由り、其人に由りては、御爲になか〳〵善きもあるべし。その分別のあらぬ我心は置所に迷ひぬ。

聞かせ參らせて善き事ならば、いかに我心の忍びずとも、よし大なる罪は犯すとも、御口を割りて苦き藥をも參らすべき覺悟はありながら、可否知らねば是非無し、敵のやうなりし御二方の同一になりて嚴秘したま

ふに心怯れて、唇の寒しとやら、唯知らぬ顔に過してぞ、姑く折を見合せたりし。

民之助様は閑なる餘御二階と奥様の御居間とを掛持に往來あそばして、いつもく〳〵冴々しう、御冗談の種盡くることなく、いつか我をば友達のやうにあそばさるゝにぞ、自から其氣にもなりて、旦那様よりは御心易立になりける。

今日も御出の頃と、奥様とも御噂して待てども音信無し。見て參れとありければ、まづ書院を御尋ね申せしに、在さゞりければ、御二階に伺ひけるに、此にも御姿見にずして、疾に下りしが、と旦那様は仰せらるゝ。何處へか行き給ひけむと、御家の内隈無く搜せど仍在さゞりけるを、先の程御庭へ出でさせ給ふを見し、とお增に誨へられて、椽に出でゝ眺せども、木の間に御浴衣の端も見えざりさ。さてはと裏庭を志して、築山を越れば、池の汀なる無花果の廣葉の茂れる陰に蹲りて、餘念無く水を睨みて在したりしが、我跫音に面を擧げて瞻き給ひければ、近寄りて見るに、釣して居給ふなりけり。好き所に來合せたり。鄕より吭の渦難堪けれども、頻に泛子の動くに立惜まれたりしに、折からの御出辱なし。早速ながら茶を一つ、次に菓盆。御報恩には、此鮒御身の物にせむと言ひ給ひければ、御側を見れども何も有らず。それは何處にと申せば

あれ見よ、今泛子の動くぞ、彼をば抵當にするなりと笑はせ給ふ。されば御用辨じて參るまでに、必ず彼をば釣置さたまへ。御入物も持ちて參らむと、御座敷に還りて、云々と申して、奥様にも御見物を遮め參らせけるに、否と仰せられければ、品々二度に運びて、我一人姑く御側にて見てありける間に、御約束の魚も釣れ、繒きて五尾まで懸りし面白さに、御莨の隙を窺ひて、其竿拜借して入れたれども、曳くばかりにて懸からざりければ、連に上げつ下しつ、竟には鉤を浮藻に縈めて、曳けば弗つと綸を切りぬ。爲なしたり、と悔れども所爲無く、段々御謝を申せしに、御戯なれども釋したまはず、謝罪にも種々あり。其謝罪にては濟し難しと、又例の諧らせ給ふ御意なるべし。思召さるゝまゝの御謝、如何やうにもと申しければ、さらば我訊ぬる事裏まず言ふか。さては例の事に御心の着かせたまひけるなれ。然れども申して可否の分別無きからは、何處までも知らぬにて通さばやとも思ひしが、既に御目に留りたる上は、我見し在體を申せばとて、仂なき告口にもあらじ。まして外ならぬ御方なれば、左も右も申上げて、共々に御爲を思はむかとも、思煩ひつゝ、頓には御答も申さゞりけるに、民之助様は重ねて、如何に裏まず言ふかと責め給へり。今は胸を据ゑて私の存じたるほどの事ならば。

固より其方の能く知る事なり。其方より外には知らぬ事なりと、我氣色をば見たまへり。さもあらば何をか裏み可申き。はや〳〵御聞かせあそばれよと申せば、民之助樣は片頬に笑を含みたまひて、我の毎に譫言をのみ云ふとて、此をも其數に入れたまふな、極めて眞面目なるぞと有りければ、例の御話にしては、此前文の少しく心得難く思ひしに、其方には夫のあるかとの御訊なり。

餘に思寄らず、暮々も御斷はありけれども、如何にしても御戯とよりは受取難く、聞違かとばかり怪しくて、問返し參せらけるに、はや定まりたる夫のあるか。かねてより聞きたりしぞと仰せらるゝ。我は忽ち顏の火の如く熱するを覺ゆると侔し、胸は切無きまでに轟けり。面を向くべきやうも無くて、口早にさるものは有らず、と申して立たむとせしを、袂執られて、先よりは身近に引据ゑられ、いよ〳〵羞しさに背向けて、やう〳〵控ふれば、遁ぐるとは何事ぞ。なほ訊ぬる事あるに、遁げむとならば、彼鉤今取りて返せ。返すか、遁げぬか、と袂を動かしたまふ。さりとは御無體なり。裏まず言へとの御約束ゆゑ裏まず申せしに、仍釋したまはずして、今更鉤を返せとは、我を紿きたまふなり。裏まず言へとは、其事一つにあらず、未だ外に數あるなり。其一々聞かるゝが否か、但は池に入りて彼鉤取りて返すが可か、と進退させたまはず。頓に御答

もなりかねて當惑するを、如何〳〵に急立てたまふにぞ、我は是非無く、鉤取ることは御釋しあるべしと申せば、さては順しく聞くとの事か、それは嬉し。まづ確に定まりたるものは無し。偖其次に、思染めたる御方などは如何、と益苦めたまひけり。

我今年廿歳にもなりぬれど、怎る目に遭ふは初度なり。男といふものゝ側も、いつぞや旦那樣に御酒を強ひられし折と今日と、二度より外に經驗無く、さりとは得も謂はれず氣の逼りて、唯消えも入りたく、捗々しうは語も出でずして、怖しきに稍似たる心地もしつ。左右は御答もせであるべきにあらねば、如何なれば然る事は訊ねさせたまふと申せしに、少しく御不興にて、煩しといはぬばかりなり。重ねては訊ねじ。速に彼鉤取りて返せと拗ねたまふ。

煩きにはあらず、羞くして申難ければ、今のやうには申せしなり。私の如きもの、貴方の御一目にて、どれほどのものと大方數の知れたるを、わざ〳〵御訊ねあそばさるゝこそ、畢竟苦めて見むとの御戯なれ。廿歳になりて奉公する程の意氣地無し、人並々の働だにあらぬ身とは知りたまはずやと申せば、其方は如何に意氣地無くとも、人の唯は措かじと思ひて訊ねしまでなり。定まりたるものも、戀人も無しと聞きて先は

安堵。必ず其辭に詐は無きか。今一應聽と聞かむと仰せられければ、些も詐無しと申しも敢へず、さらば主無き花ぞ。我に一枝ゆるせ、一生の觀好にして飽かじと、やをら差寄りて、直と俯きたる我顏を頸元より覗きたまへり。我面は再び燃えて割るゝ如く、渾身頰に顯きて、心地宛然醉へるに似たり。

良久ありても我答の無かりければ、我に恥搔かするか。恁る言云はるゝ身より、云ふ心にもなりて見よ。酒興の上にもあらねば、いつもの洒落にもあらず、羞しながら忍ぶに餘る民之助の思入りたる胸の中ぞ。今は男の意地なれば、返事聞かねば此場は起たせじ。必ず應と云へとにはあらず、否ならば否にても可し、唯所思を聞くまでなり。孰にしても、一言にて濟むことぞと、平素の民之助樣よりは執念く、意氣込みて逼りたまひぬ。

我は震ひたる小聲にて、御心の程も知られずと申せば、何故知られぬ、と愈手詰にしたまへり。我等如きものを左右仰せらるゝ貴方にはあらず。御羨しき御噂の數々は、奥樣より承はりて能く知れり。さる立派なる方々を差措きたまひて、よしなき一時の御戯より、後來の御迷惑は起るぞかしと申せば、設へば一時の戯にもせよ、後來の迷惑些も厭はぬ覺悟ならば、差支はあるまじきなり。後來の迷惑ずんと承知。いで〳〵此上

は、其方も一時の戯ずんと承知せでは、語が合はぬぞ、と我肩を拊ちたまふ。

御心だに偽無くばと、皆までは聞きたまはで、毛頭偽無し。我心には毛頭偽無し。其語忘るゝなと、獲物の桶を把りて起ちたまふ時、私よりは貴方こそと、茶道具莨盆取擧る間をイみたまひて、後に又釣せむと思ふが、其方も來るかとありければ、參りたけれども、奥樣の御一人にて淋しがらせたまふべく、又彼方を其方除にして氣儘に遊ぶやうなれば、と聞きたまひて、然らば我より斷りて其方を借るべし。それも何とやら異なものにて後譍ければ、折を見合せて參らむほどになど語ひつゝ、御座敷に還れば正午なり。

此日は我一生忘られぬ六月十五日、民之助樣の入らせられてより三週間餘になりぬる頃なりき。此日より、此時より頓に我心は異しく變りけるなり。謂はゞ新しき思の一つ增したるが、日毎に蔓りて、いつか心も全く其になりけるやうにこそ覺えしが。此事ありてより奥樣の所思憚られて、用有りて書院へ參りても、我と尤められて匆々にして出でぬ。可成くは避けて、有りしよりは遠々しく、三度參りしものも一度にと努めけるに、民之助樣の此方に入らせらるゝのみは毫も變らず。我に向ひての御所爲とても同じけれど、我は有繋に心弱くて、自から萬般退目に、拙々しからぬやうに想はれたり。恁くては奥樣の御目にも留らむと慮はしく、

彼方の見たる所を、陰に訊ねまゐらせしに、少く異な所も見ゆれど、然までならず。縦知られたりとて何か有らむ。其折は明白に我に惚れられたりと言ふべしなど、例の氣樂に笑ひて了はるれど、我身にしては申譯無し、面目無し。

然は思ひつゝ、胸の内には躍るばかりなる嬉しき念の絶えず在りて、今は奥様の御側もなか〳〵寂しからず、いとゞしく霽れたる我心は、餘所なる愁の雲も涙の雨も曇らし得ざるなりけり。

民之助様の歸來たまひなば、やがて此家も賑しうならむ、と頼ませたまひし奥様も、亦此御家も、在りけるまにて、思も寄らず、我身の獨り賑しうなりけるのみ。それをば喜ばぬにはあらねども、此御家と御間の仍變らず侘しきを、我は已みがたなく悲むなり。

我御奉公は實に其なるを、忘るゝとにはあらねども、一つ増したる新しき思に取紛れて、姑く懈れり。我は固より此家の人にあらず、又奥様の妹にもあらず、御合手にとて抱へられたる身の上なるに、其務は棄てゝ、人目を忍ぶ歡樂に浮れ、奥様の御苦勞を餘所に見て、我身ばかりを慰むこと、思へば〳〵淺ましからずや。民之助様に心通はす事の申譯無く、面目無からむよりは、之をこそなか〳〵に罪とも過とも、我は悔ゐも慙

ぢもすべきなりけれ。

心に咎むる事のあれば、其後は書院への出入も故と疎々しく、しみ〴〵御話の間も無くて、御間の不思議を申出さゞりしが、今は彼方とも恁くなりぬ。何をか裏むべきや、思ふまゝの一々申して、御了簡のほどをも聞かばやと思極めたり。

夕暮熱く、御庭には稍風ありて、薄黒む木の間に隱々と白地の浴衣は、民之助様の散歩をあそばさるゝと見る間に、我の椽に立てるを呼給ひて、納涼に出ぬか。姉様は如何在する。納涼には御出なきか。お伴れ申せと團扇を揚げて麾きたまひぬ。

日毎に一つ家に居て、今朝も、晝も、つい暫にも、見たりし人の御顔なれども、又更に珍しく、懐しく、直にも御側へ參らでは、何とやらむ心細さに、飛びても行きだけれど、奥様の手前もあれば、まづ我を差措きて、御意を伺ひしに、奥様は籠行燈の前に御姿の毎もながら力無げに、我は行かねば、其方行け、とは幾許か嬉しけれども、御氣の引立ちたまはざる御容體を見るにつけ、恁くあればこそ慰め參らすべき彼方を打遣りて、務を外なる氣儘の申譯無く、なほ彼方を附けたりにして、外出を添め參らせしも面目無くて、次且と

立ちかねたるを、我には管はず出よと仰せられけり。平生ならば直にも參るべきなり。今日ばかりは心に愧ぢて得立たざりけるを、何とて行かぬぞと尤めさせ給へり。奥様の御出無くば、私も參らじと申せば、入らざる義理を立つる人かな。今日に限りて、と御目を側めて、黠きに蹲まる我を見入りたまふにぞ、冷たき汗は遲に出でゝ、面は自から有らぬ方を向きたりし。御答申さゞりければ、重ねて、はや〳〵行くべし。民様の御待遠なるべきに、と聞くより忽ち赫となりて、さる事おほせられければ、我は猶こそ參るまじけれと、椽より御座敷を駈け拔けて、何處へと的はなけれど、足の行くまゝに、玄關の方へ遁れてけり。

此夕こそ好機會なりしが、有繋に疵有つ足の御側へ寄ることもならざりしに、彼方より御越はありけれども、奥様の在しければ、本意無く御別れ申して、次の日夜の白々と、未だ勝手にも音せぬ比なり、竊に起出でゝ、書院へ忍び行きぬ。

惡き事を働くにもあらねど、人目を偷むといふは、いと心の快からぬものなり。胸も騷ぎつ、足も頗ひつ、見尤められじとばかり四方に心を配りつゝ、やう〳〵辿着きて、靜に襖を啓くれば、飛惑ふ蚊の聲細く、有

明の燈火微に蚊帳を透きて、民之助様はすや〳〵と、御顔を此方にして寢入りたまへり。我は先暫入口に彳みたり。此日來最憐きことの數々おほせられて、我方よりも、世には彼方の外に人はあらぬやうに思ひ參らすれど、假初にも淫靡の契などありけるにあらざれば、濫に入るまじき御寢間に忍びたることの仂なくて、努々猥褻らしき意のありてにはあらざれど、御忖度のほども慙しく窘められて、頓には入りかねたるなり。されども室外の慮はしさに、左も右も身を入れて襖は閉てたれども、御側へは進み難く、なほ彳みて姑く思案せしが、潔き心の疚しからずば何をか恐るべき、と思直して御枕頭に近き、民之助様、民之助様と忍びやかに二聲呼びしに、御答は無くて、却りて遽に鼾をぱ立てさせたまひぬ。重ねて、民之助様と申せば、唯今此通り御寢中とおほせられて、前よりは鼾高く。

御戯の段にはあらず、去りがたき用事ありて參りたり。御話あれども御寢間にては後護し。はや夜も明けて蒸熱くもあれば、御庭へ出させたまへ。涼みながら申上たき事あり。森の如き畑の朝顔、見榮もあらぬ紅一種の花なれども、早咲の可憐をば御目覺に、と無躾ながら蚊帳を外して、衣桁なる御召物まで取りて參らせけるに、朝顔ならば此に見事なるありて、外には目を遣るべき花も無し。其所の戸一枚啓けて、露を帶びたる

風情を見せよ。勿體なけれど、寢ながら見るが勝手なりと、黄盆引寄せ、腹這になりたまひて、遠路の所を早々と切角の御出なれども、お茶一つ差上げもせず。御覽の通の餘夫暮、蛆こそ生かね、蚤蚊に責められ、獨り寢る夜も三十年、未だに誰來て世話して下さる御方も無し。世にも不便なる男一疋、御知己の中に不用なる女子衆も候はゞ、御取持のほど偏に賴入ると、容易に起ささせたまふ氣色もあらず。折角なれども私座安にはあらず、此家の下婢にて、御座敷の御掃除にとて參りたるなれば、はや〳〵起ささせたまへ。時移りて人目に懸からば、御話もなるまじ。わざ〳〵首尾して參りたる志に愛でゝ、お睡くとも是非に御庭までと申せば、唯今承はるに、御掃除に御出の由。掃除なれば塵を拂ひ、芥を掃出すとこそ覺えたるに、忝なくも御客樣をば、無體に庭へ引出すとは、怪しからぬ御掃除もあるもの哉。此大きなる芥、自分にては動かず。願くは御手に抱かれて何處へも參らむ、と搔卷引剝ぎ、大の字形になりて、庭へなりと、池へなりと、勝手の所へ捨てよかし。芥だ〳〵、芥之助でござる、と御床の上を轉げたまふ。

此心をも御存無く、我を任意好き御目醒に爲たまふを、やう〳〵申宵めて御庭に出づれば、夜は既明離れて、二人並ぶ姿も何とやら羞しきに、民之助樣は睡起の脚の萎えて歩み難ければ、手を牽けとて聽したまはず。

何所の雨戸も閉ぢて、見る目の憚もあるにはあらず、木々の露綠の色深く、猛吹く風の涼しき外には、鳥の音と淵月の殘れるばかりなれども、我と心の置かれつゝ、築山を回り、木間を辿り、池の汀に佇みなどして、かね〳〵胸に疊みたる事を、今日といふ今日ぞ始めて申出しける。

今まで勇しかりし民之助樣は御機嫌暴に變りて、太き息を吐きたまひ、其方も心着きたるかと、續く御辭も無くて、天打仰ぎて、思案に餘りたまへる御風情なり。

此頃心着きたるにはあらず、始めて參りし夕より、眉は顰みて今に開かざるなり。御入來のありてよりは、御二方の御謹慎ありてか、以前のやうにはあらねども、當座に比ぶれば、日增に御樣子の舊に復らせらるゝやうなり。

不束の身をも顧ず、差出がましき業なれど、奥樣の餘り御惻しさに、如何もして此御間を和げ參らせむと、陰ながら心を碎きつゝ、仔細はあるべしと目に見えたれど、我等風情に打明けさせ給はむやうもあらざれば、何と手を着けむ因も無くて、今日とはなりぬ。貴方には旦那樣は御兄樣、又憚多けれども、奥樣は此身をば妹と仰せられて、實にその樣に御情も深ければ、姉とも思ひ參らする御方なり。何卒力を協せて御爲を計

ひたく、此事疾より胸には在りたれども、出過ぎぬが善と思ひて差控へたり。されども此御斡旋貴方ならではと申せば、頻に頷かせたまふのみにて、姑し待てども御辭のあらざりければ、我は重ねて、貴方なれば仔細は御存じなるべし。親たりとも必ず漏すまじければ、概略を聞かせたまへ、と恐らくは誠も色に顯れけむ。民之助樣も容を正したまひて、さりとは優しき志、我身にしても嬉し。かねて怪しき樣子とは見たれど、我も仔細は全く知らざるなり。其故は、長年外國に在りて、歸りて後も神戸に住みて、一所に一月と暮すは、此度が初度なり。外國へ立ちしまでは、最睦しう、疊の上の鴛鴦と、我の屢離りし程の相愬なりけるに、來て見れば其裏の裏なる此頃の有樣、心の中にては驚きたり。あれほどの間の這樣になりたるには、容易ならざる事のありけるに疑無し。我兄は性來雅量にして、大方の事を咎めず。姉とても亦素直にて、憎惡など受くべき人物ならず、なほ互に悦合ひたる間なれば、天地覆りて、水の火ともなりなむ時こそ、此夫婦は媒介に二度の用もあらめと請合ひたりしに、天は仰げば高く、水は夏も冷たき今日、不思議なる哉、何事のありけむ、我考の及ばざる所なり。其方は我よりも長く此不思議の中に住める人なれば、左も右も思當れる節やあらむ。聞きだしとは此方より。

思當れる節と申して、別に無けれど、唯一つ異しきはと、寤に幻影に赤子の事、云々と二度までありし次第を語りけるに、民之助樣は聽澄したまひて、瓦久し御目を閉ぢて心に問はせたまへるやうなりしが、頓て、赤子々々と咳きたまひて、益五里霧中を行くが如し、もしや我留守中に子などを設けし事のありけるにや、と荐に頭を傾けたまひぬ。

然は先誰しも思ふ事なり、我もお增より聞きし、この澁谷に三年が間の異狀なかりし由を申して、亡くなられし御兄樣に二歳とかになられし男の御子樣の在せしと聞きしが、何とか其に關繫したるにはあらざるかと、推量のまゝを明し參らせけるに、如何にも惣領の兄には一人の男子ぞありし。それは實布的里亞に取れしが、我子にもあらぬものゝ、夫婦が間に然ばかり關繫することはあるまじきなり。其か非ぬか、雨の夜の寤は措きても、池の頭の手帕に驚きしは、尋常事にして看過し難き所もあり。好き事聞きたり。之を手繰りて或は不思議の紛亂解くるよしもあらむと、有繫に御心痛のほどは眉の邊に露れたり。

貴方の御氣性にて、其に御心の着かせたまひながら、今に御一言も、旦那樣へなり、奥樣へなり、御訊ねあそばさゞるは似合しからず。是は如何と申せば、それに如在のあるべきや。姉の氣色を尋常ならずと見て、

訊ねしことも幾度なりけむ。されども言はず。夫婦の様子は彌異しくて、兄にも折々言出せしに、彼此言を藉して、要領を得ず。姉の事言出せば、いつも機嫌を損ずるが氣毒さに、さてこそ事情あれとは、我も疾より見拔きたれど、當分は知らぬ顔、やがて一伍一什を搜得たる上にて、左も右も爲べし、と了簡せしなり。從來の志辱なし。更に今よりは他人ならぬ兄の爲、姉の爲、又我爲と隨分骨折りて、此詮議を爲遂げ、波風治めて、浮寢も睦しき鴛鴦に、此方も劣らぬ女蝶男蝶の銚子を取らせ、目出度々々を重ねむ日をば待ちたまへ、と語ひける間に全く夜明けて、はや射來る日影も熱く、朝顔の花の色も眩げなりけり。

遂に勝手の戸の開くに驚き、奥様も今頃は御目覺、知られては面目無し、はや御暇と申して立退むとせしに、戀は人目を忍ぶにて面白し。眞薑間相乘して、人に遭ひて二人が挨拶するやうにては、手品遣ふを背面から見るも同じ。我等も程無く其になるべし。取快は今の間ぞ。誰物としもなき島田をば、肚の裏にて圓髻と眺むる内が花と知らずや。命も長からぬ恁る首尾を、急くな、無情め、行くならば徐に行け。夜は明けたれど、此は人里遠き片田舍、定めて道の寂しかるべきに、單身歸すも心元なし。それまで送屆けむ、と仰せらるゝこそ可笑くも嬉しけれ。

道の遠ければ、急がずは日は暮れなむ。御志に詐無くば、駕籠に乘せて送らせたまはずやと申せしに、何とやらの里に馬はあれど、君を思へば徒跣と、昔の戀は理せめて律義なりしぞ。杉の柾の下駄ならば、云分はあるまじきに、乘りたくば之にて駕籠に乘りたまへと、左の藥指なる玉入の黄金の指環を拔取りて、我指に貫さむとしたまふに驚き、振切りて遁げむとするを、我言ふことは、何にてもあれ、差はじと誓ひしを忘れたるかと、袖に引入れたる我手をば、力窘に曳出したまはむとす。御辭は何にても背くまじけれど、君を思へば徒跣と聞きしからは、駕籠に乘りては、昔の人に志の劣るやうなれば、今はなか〳〵跣にても參らむずる心底の、金子には用無ければと斷りけるに、用無くば捨てよ。其方に遣りたるものなれば、思ふまゝぞ、と我袂に投入れたまひ、衝と離れて木間に入るよと見しに、はや築山の彼方に出でたまひ、我は書院の履脱の前に佇みて、互に見合す此時の顔。

心も心ならず、御座敷に還りて見れば、今朝は例ならず奥様の御鎭りあそばしたる仕合に、雨戸を繰て御夢を驚かせしが、やがて御手水の折、書院の戸の一枚開きたるを御覽じて、民之助様はゝや起させたまひしか、と御訊あり。如何か存ぜずと申せば、毎になく彼所の戸の開きたり。八時ならでは起きたまはぬ御方なるに、

と奥様は御不審に思召して、見に行けとありければ、何事も御存あらぬを、御氣毒やら、勿體なさやら、いと畏深く思ひけれども畏まりて書院へ參りけるに、亂次き寢床の狀は在りける儘にて、主は在さゞりけり。未だ御庭より御歸のあらざるならむと、立歸りて此由を申しけるに、また池にて釣したまふならむ。所在の無さに、近頃は釣に憂身を窶したまへり。賑しき地に住馴れたまひしを、俄に恁る田舍に引籠りたまひては、さぞや慰みたまはむやうも無く、退屈過ぎて氣の腐り、一日に一年つゞ齡取るやうなり、と仰せられしも有理と覺ゆる。然は仰せられつゝも御辛抱のなるは、其方といふ御合手のあればなり。如何ともして我身も愛相したけれど、知る通りの健れぬ體にて、思ふに任せざれば、御客樣の御接待萬般我身に代りて賴むとの御辭、一一犇と胸に徹へて、御存無しと想ひしに、今朝ほど拔出せし事も御承知にて、書院の雨戸より御氣の着かれたる體にして、我をば見に遣はされしも、其となく窘めむとの御意なりけるか。然までにしても知らぬ顏を、いと憎くや思召して、今又改まりて恁る言をば仰せらるゝなるべしと、やう〳〵心着けば、面も擧らず、申さむやうは更に無くて、唯慙入りてゐたりけるに、奥樣は微笑みたまひて、民之助樣の事言出せば、其方は毎も顏を赧めて、必ず語の滯むも異し。尋常事にはあらずと見たり。此姉には憚る事無し。打明けよ、と此

事露骨に言はるゝは今朝を初度なり。

我胸は、民之助樣に始めて微見されし時よりもいとゞしく雜增く轟きたり。世に忍びたる惡事の竟に露顯したるやうにぞ膽は冷したる。實に思へば、是も一樣の惡事なるべきや。然れども有體を申せばとて、叱らせたまふ奥樣にはあらざるを我は知れり。此緣は必ず結ばせたまひなむ奥樣の御意とも亦知れり。然りながら、昔氣質の律義なる親の子なる環は、死しても恁る事我口より人の耳へは得入るまじきなり。我は恁る密事を孤事の一種とは念へるなり。努々浮きたる心ならねば、末こそ契れ、今を窘み、神懸けて汚れたる事ありしにはあらざれど、親の知らざる男を我と見立てゝ、思を通はせ、心を許したるをぞ、我は疚しく思ふなりける。知られて身を殺すべき恥とにはあらねども、好みて語るべき功にもあらざらむ。

左にも右にも我は此有體を明すべき氣丈の魂あらざりければ、慙ひ秘さむは濟まぬことゝは思ひつゝ、彼方の事おほせらるゝ毎に私の羞かむにはあらで、奥樣の毎も言廻したまひて、私を羞しがらせたまふなり。譯などのあるやうに、貴方より仰せらるゝゆゑ、私も御噂の度に何やら羞しくてと申せば、さては我目邊なりけるか。夫嫌にせば言分あらぬ好一對なるべきにと、わざと口惜げに呟きたまへり。

程無く朝御飯となりけるに、民之助様の御出無かりければ、奥様の御吟味に由りて、我は御迎に出でたり。池の頭にも見えたまはざりければ、御庭の内残る方無く尋ねまゐらせしに、何處にも影無し。畑へ廻りて見るに、切戸開きて、はた〳〵と風に煽り、鉤匙の外れたるは、此より外へは出させたまひけむかし。然れども何處へかおはしけむ、つひに恁る例のあらざりしに、そこら散歩してゐたまふにやと、外方を見遣れども、崖には畑の一面に青々と、田圃に動く人影は、耕す男、畦にも畔にも倒臥にも、それらしき姿はあらざりけり。

還りて恁くと申しければ、散歩に出でたるならむ。捨措け、と旦那様は仰せらるれど、奥様は有繋に心元ながりたまひて、御時分時なるに歸らせたまはざるはなどぞ、異しき事に思召すめり。夜深にもあらず、朝風の涼しく、草葉の露の心快きに誘はれたまひて、そこら玲行たまふならむとは思へども、曾て有らざりし事なれば、また心にも繋かりて、御飯の濟みても歸らせたまはぬならば、見てや參らむ、捜索に出でよなど、奥様と語ひつゝ食事も果てぬ。箇抑什麼ぞや、未だ御歸はあらざりけるなり。

落着かせたまひたりし旦那様も今は稍御心惑ひて、渠は如何にか爲けむ、飯をも喫はで何地を吟行ふらむ。

七兵衛爺を呼びて見せに遣らむ、と卒にお增を隣へ走らせ、我も見て來む、とまで騒がせたまふ。此體に奥様はいと〴〵御胸を轟したまひ、さりとは心得難し。如何にあそばしけむと、御眼色も尋常ならず、變などのありけむやうに思做してぞ狼狽へたまふなりける。始のほどは心丈夫なる我なりしが、恁る有様に忽ち怯の出でゝ、遽に忌しき念も浮べば、在るにもあられず、私も見て參らむと、帶引緊め、履物取りに急ぎて、勝手口より出づれば、出合頭に隣の七兵衛、蹈取眼に打魂消て、御客様の御行衛知れざるよし。何とも以て大變の珍事出來と、不吉の挨拶益人の心を驚かす。

畑に出づれば、旦那様も御庭より廻りたまひて、其處より出でけるかと、お增が大事の茄子畑、我身秘藏の曼參、苦職の圃をも踏散して、切戸口に寄りたまふ。唯見れば、奥様も御庭下駄にて朝顔の籬の側に立ちて、此方を御覽じつゝ、環、氣を着けよ。旦那様は早う御歸あれ。お增は内に居よ。はや七兵衛は出掛たるかと、毎には聞かぬ高聲の甲走、四邊に響くばかりなり。

旦那様は戸口を出でゝ我を見返りたまひ、其方は出るな。却りて氣遣なり。人驚せの民之助め、と言捨てゝ行きたまふを見送りて在るべき此場ならねど、奥様も切に留めさせたまへば、身を悶へつゝ、旦那様の前途

を打蹟りたる後に、御歸々々、御客樣の御歸と、哭くが如くお增に喚かれて、驚くやら氣の弛むやら、思はず蹌きて振返れば、飄然と勝手の方より民之助樣、何事が起りたる、何をか珍しげに二人して御見物と、氣も無き御顏色。此時ばかりは如何に彼方にても有繋に憎かりけり。

見れば、旦那樣は未だ遠くは行かせられず。我は聲を揚げて呼び參らせしに、三聲目御耳に入りて顧たまひければ、兩手を抗げて麾きまゐらせり。

人々民之助樣を取圍みて、嬉しさと腹立たしさに詈噪ぎぬ。彼方は何故とも御存無くて、唯呆れてゐたまへるを、烟に卷きて御座敷に御伴れ申し、偖云々と聞かせ參らせけるに、民之助樣は肚の底より搖上げて笑はせたまへば、旦那樣も奥樣も、他たちの心を知らずやと打腹立ちて、左右より責めたまひけるにぞ、やうやう氣毒に思召して、始て御謝罪はありける。何所へ御出ありしぞ、と訊ねけるに、何心も無く切戸を排けしに、見亘したる朝景色の得も謂はれず、眺むる間に氣も漫になりて、足の向くまゝに立出しが、此より見ゆる大樹の蓊蔚、恰も毬のやうなるあらむ、彼所より岨を下りて、程遠からぬに、まだ茅葺も新しき一軒の家の見にたりければ、其邊までと、又行きしなり。

庭など廣く取廻して、數ある藥草の花珍しく、椽に朝鮮簾を掛亘して、軒端に二つ鳥籠を釣りたり。風致の何とやら幽しさに、何者の住居かとをかしく、なほ眴しけるに、座敷の簀戸の明放したる隙より、緋毛氈掛げたる桐の大机見えて、其邊に紙、書物堆く、何さま然るべき人の宿とは見たる、と姑く佇みたりしに、五十約の品好き男の鼠木綿の浴衣着たるが、裏の方より青紫蘇の葉を二三枚摘みて出來れり。

我は折から喉の渴きて難堪かりければ、庭の隅なる石の井筒に、吊釣瓶置きたるを涼しげに見着けて、水一つと無心せしに、主極めて愛相好く、まづ此方へとて、御飲料にならば、御茶を献ずべしと、點法も妄ならず目覺しき茶を煎れて、菓子も鹽餡の最中に都を味はせ、道具なども撚りて、いよ〳〵凡夫ならず。二つ三つ語ひしに、身も浮くばかり元氣の話し上手、此方も劣らぬ御饒舌なり、始の程は椽に腰掛けたりしが、いつか座敷に蹈込みて、先方も容易に放さねば、此方も滅多に歸るとは云はざりしが、勇士も腹の空きたるは忍難く飯ばかりは水のやうに無心もならねば、やがて一石と碁盤取出すを、やう〳〵預けて、後刻を契りて、今歸りたるなり。なほ委細の事も語りたけれど、無殘や下肚に據無くて、聲を出すべき氣力も竭きたり。助けたまへ人々と仰せらるゝ時お增は御膳を持出でたりけり。

忙しく箸取りたまひ敢へず、其人は何者ぞ、と旦那様は問はせ給ひぬ。其人こそ遠山霞叟とて、知られたる畸家なり。浮世繪師にはあらざれども、現に魁新聞の挿繪を畫きて、評判宜しく、其名は豫て我も知る人なり、此程より京橋の喧囂を避けて、隱家を彼所に求め、風月を友として氣樂に仕事し、家には婢一人、乳母一人、三歳になる男の子ありて、獨身にて暮せり。願の如く市塵を遯れて、閑居の朝夕心を養ふに足れりと雖も、語ふ友の全くあらぬ侘しさには、弱り果てたる折からの好敵手とて、以來は入魂ならむことを望まれ、此方よりも之を御緣にと、これよりは往來すべきに約束せり。兄様にも此人は紹介せ申すべし。竹を割りたる如き心意氣、さりとは否なる所些も無く、此家業にして此人あり。實に美術家なる哉。惟へば此田舍に過ぎたるもの二つあり。曰く、遠山霞叟、曰く、笠原の環。

曰く、笠原民之助と言はずや、と旦那様は笑はせたまひぬ、奥様の御氣勢は、打背けたる我顏を覗ひたまふやうなるに、我は身も縮みて、民之助様の又しても無用言仰せらるゝを心苦しく。

（九）

翌日更めて民之助様は此新しき相識の許に小半日も遊びて歸らせたまひしが、其次の日の二時頃頭痛するばかりの日盛を、怪しく大きなる網代笠に凌ぎて、白の木綿縮の單衣に、支那綸子の茶の兵兒帶して、塗骨の長やかなる扇を携へ、腦に白髮斑の毎生したる人訪れて、民之助様に御面會いたしと言入れたり。改めて名を問ふまでもなし。此風體こそ其人とは曉りしが、何方様と申せしに、霞叟と御傳へ下さるべしとなり。

午睡あそばしたる民之助様を起して、恁くと申せば、御出迎あそばして書院に通させたまひ、やがて御酒も出て、我は御酌を勤めたり。

御二方ともに深くは召上られねども、御談話おもしろく、互に其にのみ實の入りて、霞叟といふ御方の御齡にも似ず若々しく、聲などもいと高くて、四邊にも響くやうなり。昨日今日の御馴染とは見えぬまでに、打解けて御物語ありけり。

御銚子の替に立ちけるに、隣の御座敷の口に奥様は佇みて在せり。我を小手招きしたまひて、御客様は、民之助様の年寄られなば、と想はるゝ御様子の御方なり。頗なる笑聲に、如何に面白き御話のあるやらむ。且は畸家とは珍しく、如何なる御方かと、垣間見に來りたりと仰せられぬ。

はや御覽ありけるか。御人品の良き、元氣の御老人にて、民之助樣とは成程御合口と見えたり。さりとは御話上手にて、御側に居ても可笑さに、折々取外して笑ふと申せば、我家は弗と御來客のあらざるが、かゝる御客の折節はありて、御酒などの始りたるは、賑しくて最好さものなり。何も無けれど、届かむほどは御饗應參らせよ。風呂もやがて沸かば、申上げて見よとて、奥樣は彼方へ行かせたまひぬ。

我も御座敷に出でゝ、間も無く旦那樣は入らせたまひぬ。初對面の御挨拶ありて、又姑く御盃は回りつ。醉はせらるゝほど御客樣は勢加きて、御話益機めば、旦那樣も興に入りたまひて、四人の一度に笑ふ聲は、物の崩るゝやうに御座敷を撼かせり。

恁る暑き日中に、衿元も寛げられず、居住も頽さず、絶えず團扇の風を送りて、御給仕の役は難堪し。御座敷のおもしろく、氣の張らぬにしても箇許なれば、森殿き席にては苦惱も幾多ならむと思ひぬ。わけて今日の溽暑は、額に入染む汗如雨露の水を打ちたるごとく、帶のまはり蒸れて、火をも卷きたるかと覺ゆるまでなり。

日の力もやう〳〵薄れて、吹入る風の少し〳〵涼しうなりける比、御客樣は立たせたまひぬ。取散したる物匆

匆に片附けて、風呂に入りける心地は、女子には似氣なき語なれど、成佛せむとも謂ふべくや、肉も魂も爰に蕩るかと想はれたり。浴衣着更へて、生れかはりたる心になりて、恍惚と畑の隱に涼みたりしに、又人の訪るゝ聲せり。

勝手に單身忙しきお增は取次に出でけるにや、なほ訪ふ女の聲の聞えければ、急ぎて我は取次に出でけるに、乳母らしき年增の、三歳ばかりなる兒を抱きて、玄關の前に立ちたるが、我を見るより慇懃に會釋して、遠山より參りたるもの、唯今は主の御馳走に預り、食醉ひまして失禮もいたせしなるべし。是は御目に懸けまするほどの品にはあらねど、と小形の杉折莎繩に紮げて、鄙びたる熨斗添へたるを差出せり。何にかあらむ名物と見えたり。

男の兒とは聞けど、目鼻立の優柔、女兒とも見るべく、色は透くばかりに白く、漆の如き髮を河童に置きて長き奴も可愛く、淺黄の絲取りたる中形縮の袴に、有平縞の唐縮緬の兵兒帶して、右の手に稈笛を持ちたるが、少く人見識して、乳母の頰の陰に隱むとしつゝ、横目に我を見たる可憐の風情は、人形に魂魄や入りたるか。好き御兒かな。少し貸したまへ、と我を忘れて寄添ひ、差覗きて、怵しけるに、羞かみながらの

顔は、恐く御父様の筆も及ぶまじく、御名はと問へば、乳母の力夫と答へぬ。

此可愛獨見るは惜く、皆様の御目に懸けて稱めさせたく、我手に抱取りて、乳母を引添へ、奥様の御座敷へと急ぐ廊下にて、會ひまゐらせけるに、奥様の御顔色卒に變りて、吭着かれたる如く御足は礑と住り、凝眸になりて屹と御兒を打瞶りたまひしは、思ひも寄らず可恐きものを見たまひたる氣色なり。

さて我も忽ち心着きぬ。竹の音をも赤子の啼聲と駭き、淡紅の手帕をも産衣の寢姿と怖れたまひし奥様なりけり。されば今正眞の生ける稚子を見させたまひては、御驚駭も御恐怖も然ぞ。不調法をしたりけり、と悔ゐても晩く、後には乳母の見る目もあれば、折角此まで連れたる御兒に、御辭一つ懸させられざるに、素氣なく引反しもならねば、心苦しかりけれども、遠山様の坊様と申して、御傍へ寄せければ、奥様も卒に御氣を變へさせたまひけるか、御顔を和げたまひしも故とらしく、愛相したまふも、義理一遍のやうにて、假初にも御手は出したまはざりしなり。

然こそと推して、好程にして退きけるを、誰しも一足は追ふべきに、奥様は悄々と御座敷へ入らせたまひければ、乳母の手前も面目無くて、此まゝは戻し難く、幸ひ書院に連れて、民之助様に見せ參らせければ、我

に抱かせよと最愛がりたまひて、さまゞに愛したまへば、却りて恐れて、乳母の方を見つゝ泣顔になりけるを、賺して椽に出づる。實に好兒なり、玉の如し。如何に見ても面影の親御に肖ず、年齢も御孫にて可きようなるが、と民之助様の呟きたまひけるに、乳母答へける、御實子にはあらず。まことは弟御様の遺紀念なり。世には弟の子の生きたるもあれば、兄の子の死せしもあり、と我は不圖思ひぬ。我ならでは思はざる事ならむ、と復思ひぬ。

（十）

今日は民之助様の遠山へ行かるゝとありければ、くれゞも、力夫様を伴れらるゝやう、乳母への傳言を托みまゐらせて、何も玩具のあらざりければ、庭の花など彼此採集め、石菖盤に池の麥魚を抄入れ、干菓子の色々紙に盛りて、書院の次の間の涼しきに席を設けて待受けたり。

我は子煩惱といふほどにもあらねど、人並に稚兒は可愛く、抱きて尿など沃けらるゝも、強ちに厭はしとは思はざるなり。これまでに人の稚兒を抱きし數も知られず。其中には親の誇るほどにはあらぬもあり、抱くも愧しきほどなるもあり、衣服ばかり美きもあり、不器量にても愛らしきあれば、器量は美くても小憎き

あり。多かる中にても、此兒はと寢覺に思はるゝはあらざりしが、力夫樣ばかりは、片言も多くは聞かせず最愛らしさ態も無く、人懷しげにも見えざれど、得忘られず其面影の眼前に在りて、母の親無きを惻しく、乳母には足らぬ慈愛を、ならば我手に掛けてと、思へば入らぬ世話も、可愛き餘なりけり。

然れども奥樣は幼きものを嫌はせたまふなり。昨日の御所爲にて、必ず然ぞと知りたれば、御座敷へ伴れて參ることはならず。それの成らざるのみか、御内に入れて、此に一所に居ると知りたまはむだに、御心快くは在さゞるべし。また彼御兒を招ばむには、奥樣をば單身彼方に置きて、例の我身のみ任意に遊ぶになるべしなど、彼を思ひ、此を思はざりしにはあらねども、差當りての懷しさに堪へかねて、民之助樣に傳言は托み參らせしなり。

程無く乳母は御兒を負ひて來にけり。今日は整髪を散したる縮の筒袖に着更へて、昨日の姿よりは成せて見ゆるも猶好く、僅一日の見識越も、有繋に稚氣の打解け易く、始の程は唯花を歡び、魚を樂みたりしが、後には乳母に誨へられて、姉樣と舌忙く呼びて、懷きぬ。

お增も出來り、旦那樣も御越ありて、人形のやうなり、玉のやうなり、と口々に稱揚しけるも世辭にはあらず。此御兒は正しく人形とも玉とも謂ひつべく、世間に有觸れたる好き兒の儘にはあらざるなり。旦那樣は御思深く、何がな此御兒に進ずる物は無きかと仰せらるゝ。町ならば一走行きて玩具をも買ふべき便はあれども、と我も疑より其に當惑したりければ、種々思回しけれども、生憎にて、更に愛相とてもあらざりけれど、御兒は最快く、おとなしう遊びぬ。

折から風呂の立ちたれば、奥樣の御迹に伴れて入りて、戯れに化粧せしを、乳母は歡ぶこと限無く、歸りて父樣の御覽に入れむとて譟ぎけるに、いつか乳房に取付きたるまゝすや〳〵と睡りければ、革蒲團に臥して、小搔卷打着せ、乳母には物など食べさせ、お增を合手に置きて、我は奥樣の御機嫌伺ひに參りけるに、御兒はと訊ねさせたまへり。今方お寢りたりと申せば、其方は稚兒が好きかなと仰せられぬ。奥樣は御嫌にや。煩くや思召すと申せば、嫌ふとにはあらねど、好ましうもあらぬなり。餘の兒ならば、知らず。あの御兒ばかりは、御嫌にても好かせたまふべし。左も右も私の美しう化粧したるを、一目なりとも見させたまへと冀ひければ、已む無く笑ひたまひて、御自慢とあらば拜見もすべしとて、進まぬ氣色と見たりければ、強ち勸めまゐらせざりしが、果して御出のあらざる間に、御兒は目覺して、竟に歸りけり。

翌日も必ず來たまへと言ひければ、御兒よりは乳母の喜ぶ色なるもをかしかりき。

怎で力夫樣は我をば好き友とし、此家をば好き遊所にして、雨は降りても、風は吹きても、姉樣と慕ひて、訪ひ來ぬ日とてもあらざりければ、我可憐は增すのみにて、冒ふことと爲すことの一より十まで、力樣ならざるはなきとて、ある時は奧樣の御不興なりけるまでなり。親御の身にしては幾許か嬉かるらむ、遠山樣の我をば賴しきものに思ひたまふことは、實に大方ならず。更に民之助樣との御懇意は益深うなりぬ。

我は日毎に御兒の傅して、奧樣の御合手して、民之助樣の事も忘るべきにあらず。忙しくも一つの身を三つに働くを、我はなか〳〵に苦しとも覺えぬのみか、奧樣御一人を守りし舊時に較べては、却りて氣の冴々しう、此忌はしき寂しき田舍も、今は捨難き故鄕となりけり。實に故鄕なる哉。我介抱を需ちたまふ病身の姉樣は在りて、此身の思召厚く、夫と契りたる人在りて、毎に御側に添ふことの慨はぬ身ほど、寢覺の思深く、力樣といふ兒ありて、我無くては靜爾う遊ばず、我も之無くては、起臥の樂あらぬやうなり。此間にても有繋に例の御奉公は忘れず、竊に民之助樣と折々は諜せけるが、やう〳〵少しは考得たる節もあれど、今は語難しと聞さしのみにて、我には彼黑き影は仍黑く存れるなりけり。

八月も過ぎぬ。御兒の愛らしさは日增に捨難く、民之助樣と遠山樣との御交はいと〻親う、一家の如くにもなりけるに、旦那樣は如何なる御意にてか、此御客をば隔てさせたまふ。まして奧樣は、御顏を合せ給ふも折節にて、其席に出させたまふは、いと〳〵希なり。こは然もあるべきなれども、日頃無聊に苦みたまふ旦那樣の、如何なれば怎る友をば棄てむと爲たまふにや。交を結びたまはむほどの人物にはあらずとて、怎はあそばさるゝかとも想ひしが、遠山樣は必ず〳〵疎ませまふべき御方にはあらざるなり。又折々の御口氣も賛めさせまふやうなるに、爲され方を見れば、左右は此人に近かざらむと訪めさせたまふなり。

此事の訝しくて、或時民之助樣に訊ねまゐらせけるに、我にも然は見ゆる。それこそは餘りに親う立入られなば、例の不思議を見尤められむの虞あればなれ。兄なる人は性來客を好み、別けて遠山の如き人をば喜ぶなれば、努々渠を疎むずるにはあらねども、臘に疵もつゆゑならむかし。

臘に疵有つ故なり、と獨合點して頷きたまひ、やがて太息吐きたまへるは、御思に餘る事のあるなるべし。さては彼不思議を見露したまひけるにぞあらむ。定めて御一家の大事、御兄樣なり御姉樣なり、いづれかの御恥をや曝したまふべきなれば、有繋に漏しかねたまふも有理とは覺ゆれど、外ならぬ此環に、今更裏ませ

たまふは御怨なりと喞ちければ、其なれども、未だ見露したりといふにはあらず。但臆測に或是と、いさゝか思ふ所あるまでなれば、如何に其方なればとて輕々しうは打明し難し。今姑し待てとなり。待てとならば、御辭に背くべき我ならねど、唯我をば給きたまふが最恨しきと申せば、民之助樣は思懸けざる御顏にて、誰が其方を給きたる。我には覺無しとありければ、我には目あり。奥樣の思惱みたまへるも、旦那樣の憂きを忍び給へるも、能く見ゆる目あり。ましてや寢覺に忘れやらぬ御方の事、昨日は御手の爪を鋏みたまひ、今日は御脚の蚊に螫されたまひし痕までも、やはか見道さぬ我身にして、近頃左右に勝れたまはぬ御機嫌を心着かでやあるべき。幾日夜更くるまで御二階にて何やらむ御物語の長かりしが、其翌日より御心の煩擾稍御顏に見えて、人無き折々御思案の體も訝しう、なほ唯今の太息も、貴方には適しからず。彼此見るにつけて、旦那樣より御話のありしに疑無きを、然もあらぬやうに給きたまふが御怨なりと詰め參らせけるに、邪推なり。兄より何をか聞かむ。幾度か迫りしかど、竟に言はず。但向者に此家をば我に讓りて、やがて隱居の志とありしを、心得難く、推して問ひしに、近來切に世の中の樂からざれば、せめての慰藉に、諸國を旅して山水に游ばむとて、姉の事など諄々も賴まれし我驚愕は幾許なりけむ。その時も其後も、種々諫めけれど、執

心固く、爲む術のあらざるに苦むなり、と聞くに我は胸潰れて、こは如何に成行くことならむと淺ましく、何日を限に旦那樣は此御家をば捨てたまはむ思召かと訊ねけるに、我だに應といはば、隨分明日にも旅立つべき氣色なれば、世の中の樂からぬ因あるべし。それ聞かぬ内は何事も承引くまじく、然やうに思立ちたる仔細悉う聞きての上にて、如何にともならむと挨拶したりしに、兄も即答しかねて、談は今お其まゝになりたるなり。何事も其方に褒みたりしは、此返事聞きての後と控へしを、恨まれては迷惑。在樣は如斯。されども姉には洩ずまじきぞ。之に就けても、夫婦が間の秘密といふは容易ならざる事ならむと、いと怖れたまへる眼色にて、民之助樣は我顏を瞶らせたまひけるに、何とも知れず我も怖しく覺えて、幀に身内の寒くなりぬ。

御不足もあらぬ御身にてありながら、言効も無う不幸なる方々かな、と漫に哀催して、打萎れたる我の手をば執りて、環と呼びたまひければ仰ぎけるに、少し笑みたまひて、兄は我等の事を知りたるぞと仰せらるゝ。如何にしてかと驚けば、お饒舌の奴ありて皆告げたり。誰かと我は益驚けば、いと落着きて民之助樣は、我と我鼻を指したまひけり。其は信か。さりとては。

（十一）

殘暑を涼む夜も更けて、今や寢なむとする比、玄關側の出窓を打叩くは、誰かと民之助樣の見たまひけるに、遠山樣なり。もはや御寢なるべしとは想ひしが、明日を待たれぬ用事の出來したれば、心無く恁る夜深に罷越したり、と氣毒がらせたまへば、御遠慮には及ばず、宵張の不肖なり。まづ御入、と書院に御案内ありけるに、はや蚊張釣りて見苦しきに手を鳴して人を喚びたまひければ、我は走行きて御用を伺ひぬ。此を片附けよ、と仰せらるゝ側より、遠山樣の制めたまひて、それまでも莫し、御隣の間にて足る事なり。一口御話して直に歸るなれば、と切に辭りたまひければ、隣室に燈を入れて樣の戸を啓放ちたるに、月あかくと差昇りて、天は水の如く、薄寒き風ありて簾を動し、見亘したる庭の風情、得ならぬまで豔に寂びたり。

磨硝子の行燈の下に、髪長き人の菜の紙布織の單衣を着たると、納戸の瀧縞の浴衣に白縮緬の兵兒帶したる人の眉目好きが相對ひたるに、我は細き鳴海絞を着て、蔓盆を持出でたるを、此庭、此座敷、此人物、總べて此まゝ畫なり、畫なりとて遠山樣は團扇を拍ちたまへり。實に畫などにもあるやうに覺えたり。

不圖見れば、御膝の下に電報の封切りたるがあり。何か知らぬど、御念用とは是なるべしと合點せり。遠山樣は我に向ひて、貴方にも御迷惑願はでならぬ事出來てと仰せらるゝ時、民之助樣の茶をとありければ、そのまゝにして先立ちぬ。軈て持ちて參りける比には、御話半にて、仔細は能くも解らねど、俄に御旅立などの御樣子にて、御留守をば托ませ給ふらしく、民之助樣は一々御心易う引受け給ひければ、明日は早くと思へば、今夜の内に彼此支度もあり。心急かるれば之にて御暇。環樣には格別御世話御賴申せば、數々申上ぐべきなれども、取急げば失禮のみ。委細は民之助樣より御聞取下されたく、京橋まで泊掛にて參るなれば、御用もあらば何なりとも承はるべし。留守中は力夫めを偏に御願申すなり、と十二時の鳴るに驚き、やれ忙しや。さらば之にて御目に懸からず。皆樣へも宜しく。環樣白粉の御用は、と玄關に立ちて足は彼方を向きながら、なほ二つ三つ仇口吐きて、大胯にのさ〳〵と出行きたまひけり。

京橋へ御越とは、何御用にて、幾日ほどの御逗留にや、と迹にて御訊ね申せしに、新聞社より電報來り、紙面の改良に就きて相談ありとなり。熟議の上は挿畫の準備、體裁の指圖など、自身に參らでは成らざる用事あれば、如何しても五六日は費るべし。その留守中は萬端我を恃み、小兒の事は其方にと、近來の大役仰付

けられたるなり。

我此身上ならずば、御兒は乳母とともに引取るべき法もあれ。奉公人の口より然る事願出づべきにあらず。まして奥様の故ありて小兒を好かせたまはぬをや。民之助様とても、申さば食客の何に彼に御遠慮もあるべく、遠山様も此御家の御懇意といふにあらねば、何事も表立ちては爲悪し。さて如何はせむと案じつゝ其夜は過しぬ。

明くれば九時頃民之助様は御留守を見舞はむとて行きたまへり。遠山様はゝや七時ばかりに立たせたまひしなり。二時間程ありて歸らせたまひ、變る夜は無けれども、主無き宿は異なもの哉。侮りて鼠なども豈より暴廻り、座敷の内も侘しげに、總べて恃寡き心地すれば、入らざる世話ながら、泊込みて屹と留守を爲むとも思ふと仰せられぬ。

假初にも一軒の所帶をば、心知りたりとて奉公人の手に預くること、思へば恃寡さの限なり。彼方の御爲を思はゞ、それに勝したる事あらじと申せど、遠山はあの無頓着なれば、他の思ふやうにもあるまじけれど、我には忍び難きまでに心元無くて、如何にかなるらむと、今宵一夜も懸念せらるれば、六時頃より行き

て泊りて見むなど語りたまひき。

正午も過ぎ、二時にもなりぬ。毎も御兒の見ゆる頃なるに、沙汰無ければ案じられて、隣の七兵衛を遣はしけるに、御風邪の氣味にて御機嫌悪く、御熱もあれば、外出を慎みたりとて歸來れり。

我は不取敢書院に參りて、御兒は云々となり。孱弱なる身には假初の事も假初ならず。やがて御越ありて容體御覽じて、さるべくは醫者にも診せたまへ。何の心得も無き乳母などには暮々も打任せ難しと、少しく我の氣色ばみて見ねけるに、民之助様も動かされたまひけむ、さらば見て來むとて、直に出で給ひしが、程無く婢來りて、坊様の御加減然せるにもあらざれば、必ず御憂慮あそばされなとありけるに、やう〳〵胸を安むじ、御座敷に還りて程無く、御宅よりの御使なりとて、お増は一通の手紙を持來れり。

見るに疑似も無く叔父の手跡なれば、我胸は先騷げり。曾て恁る例のあらざりければ、何事や起りけむと、心も心ならず次の間に起ちて、披見れば、明白に用は書かで、至急に話したき事あれば、一日の御暇を願て、明日の午前に來れとの文の面なり。

誰か急病などにや、と然りとは心を痛めしに、まづは可けれども、奉公の身を呼寄せて話したきとは、抑如

何なる事ならむ。反覆も然る事のあるべきやうは無きにと、不審は霽れねども、此由申して奥様まで願ひけるに、御暇の出でければ、返事に認めて、使の者に渡しぬ。其男も近きに住める輕子にて、知る顔の老夫なりけり。

思返しても〳〵疑惑の解けざる餘、偽手紙などにはあらぬかとも思ひしが、取出して視るほど、正しく叔父の字なり。使までも我家の使なり。彼此叔父よりの便に計あらずとせば、其用談の不審を奈何にせむ。

小石川までは程もあれば、朝も早目にと、其仕度したるに、八時過ぎても民之助様は還りたまはず。今日にも限らねど、御朝寢なるべし。御目に懸りたく、御兒の事も聞きたく、姑待ちしに効無かりければ、途にはあらねど立寄らばやと、車に乘りて出でたり。

やがて其門に着きぬ。かねて案内知りたれば、直に庭口の枝折戸を排くれば、萩の花の今を盛と咲亂れて、露けき梢梟々に折重るを、やう〳〵推分けつゝ飛石を傳ひて、椽側より小壁に訪るれば、さらりと障子を開きて、睡むげなる顔差出したまふは民之助様。今御手水果てゝ御髪を梳したまふなり。我の參りたるだにいと異しと思召さるゝに、御召縮緬の單衣に、銀鼠の縮緬の羽織着て、些ほ顔さへ粧りたるを、呆れ顔に打瞶

めたまひて、何方の御孃様の戸惑させたまへると思ひしに、其方とは夢のやうなり。さりとは我等風情には勿體なきまでの御艶麗、あはれ自から頭も低る心地す。其所は端近、まづ〳〵此へ御通りあるべし。見る影も無き恁る茅屋に、何と思召してか能うこその御出、忝なし、有難しと、いつも御戯のみ。

人目もあらねば、此へと仰せらるゝ所に座りて、力様はと申せば、今し方乳母の伴れて其邊へ出たり。勝手には婢一人。必ず御心措無う、仰せられたき事もあらば仰せらるべし。此方より承はりたき事も數々あり。思も寄らぬ首尾は嬉しけれど、門に車の音せしやうなるは、何所へ行かむとてか。それ申上げたくて參りたるなれと、懸念は御兒の事。昨夜の様子は如何。熱は劇しう出でもせざるか。憤りたまはざるかなど問ひ參らせければ、夜中に啼騒ぎて、腹などの痛む氣色なりしが、丸薬飲ませ、介抱して、今朝は全く治りたり。されども稍元氣微く、平素のやうなる機嫌にはあらされど、恁る例は往々あり、と乳母の言へば、後刻出直して、仍も思はしからずば、其時醫者に診すべし。然までは案ずることならず。思へば小兒は可憐きものかな、明暮其方を慕ひて、姉様へ行かむと、只管強みて已まざりければ、伴れて出でしは其方の留守を尋ねけるか。實に此美しき姉様を、戀慕ふは小兒のみかは、此にも大人の、と我姿をば故とらしう眴したまひて、

今日の鮮さは格別なり。之を半時も手放して、獨行は油斷のならざるに、危いかな、危いかな。誰に見せむとて何處へは行くぞ。恁くいふ夫たる者に、一言の挨拶はあるべきなり。と例の仇口まじりに。

仰せまでも無し。彼文取出して御覽に入れて、明日は歸らむほどにと申せば、民之助樣は其文姑見入りたまひて、此用事といふに心當あるかと仰せらるゝ。露ほども無ければ、昨夜も其のみ心に在りしが、と聞きたまひて、無しとは我への遠慮ならむ。我には屹と心當ありと、文をそのまゝ投付けたまひ。さてこそ一方ならぬ御嬌飾と見たるも、今解めて、是矣なり。

わざ〳〵の御立寄は辱なけれど、その御吹聽と思へば寔も嬉しからず。さりながら其方の身にしては何よりの御目出度なり、と彼方向きて、人も無げに御髪を梳さたまふ。

御本心よりとも思はねど、捨置きかぬる御辭なり。何をば證據に、可有も無き言を、と膝推進むれば、見向きもし給はで、何よりの御目出度なりとて、憎うも取合ひ給はず。然らば如何にせば、御疑は霽らさせたまふぞ。文の面も唯用事とばかり記したるを、その御廻氣は過ならずや。もしも然る事ならむには、直と辭りて立歸るべきに、如何に我身の不束なればとて、所夫は一人といふほどの心得はあり。此外に誰かは、と彼

指環をば手のまゝ差出せば、實に白魚とや申すべき、玉とや申すべき、と排斥けたまふ。白魚にもあらず、玉にもあらず、黄金の指環と申すものなり、と誨へまゐらするをも聞きたまはで、左右は云へど絲談と思はば、少しは心嬉かるべし。それ〳〵胸の轟くが、此より衣越に能く見ゆるわと嘲りたまふ。衣越に他の胸をば見透したまふほどの御目に、嬉しきか、嬉しからぬかの見えたまはざることはあらじ、と申しも敢へず、いかにも嬉しきと見たりと仰せらるゝ。

嬉しければ心も急かれ、はや參るべし。と身仕度すれば、行くに嬉しき奴の然ぞかし愁き歸來のほどはと、一つは掛たねばならぬ物の仰せられやうなり。日の暮れぬ内にと、御暇申して起てば、民之助樣も樣に出でて見送らせたまひぬ。

唯一日にしても離別といふは侘しう、戸口まで來て見送りまゐらすれば、彼方も佇みて打瞶りてゐたまふに、行きかねて立戻り、ならば朝の間に歸らむと申せば、やう〳〵打笑みたまひて、何やら仰せられむとする時、門口に御兒の啼聲せり。折好く歸りたりとて、乳母を呼びたまひて、庭より此へとありければ、やがて入來りぬ。御兒は頁はれて啼入りたりしが、立寄りて顔見すれば、俄に歛めて紐着きぬ。姑と抱取りけるに、

離れぬは離し難く、時は移ると思ひつゝ、椽に腰懸けて、飽かずも愛づる可憐き容の、今日は衰へて、順しう我胸に頭を推當て、眼色も懈げに、毎よりは涎の夥しきを、乳母は事も無げに、風邪の氣味にて熱のあれば、と言へど、忽にはすまじき由を懇々も言置き、民之助様にも囑みて、啼きて肯かねをやう〳〵引放して出づれば、追ひかけて門口に御兒を抱きたる乳母の姿は、車の走るほどに路の折れたるに隱れたりしが、久しありて彼方と見遣りけるに、例の毬の如き樹の立てる丘の上に、いと小さく顯れたり。御兒はなほ啼いてか。乳母は此車をば指すなるべし。

（十二）

御兒の身の上、民之助様の事、さては叔父の用事など、巴に思回しつゝ、車は小石川なる我宿に着きぬ。晩かりしとて叔父叔母は爭ひて出迎へ、互に積る話の何より言ふべき方も無くて、唯珍しく、懷しき對面なりけり。

久々なれば二三日は優游と逗留したまへ。老者の鼻突合せ、何の思出も無く佗しう暮して、其方の來るを樂みたりと叔母は言ひぬ。叔父はは〳〵と喜びて、然まで辭には出さざれど、心の中は見ゆるやうなり。

彼方も無人にて、我ならでは用の足らざるもあるに、近來御親類の御客ありて、いとゞ忙しき間を、御文ゆゑに枉げて一日の御暇を願ひしなれば、此度は落着き難し。重ねて參る折も有るべく。御用といふが伺ひたきと言へば、奉公するからは然ほどの役に立たでは効無し。人の妻となりても、と叔父は獨頷きて、其方は下谷の菅の維清殿を知るならむ、と卒に訊ねらるゝも異し。菅といふは叔父が世盛の頃の懇意にて、其方は今も繁昌にて、維清とは其所の長男、白耳義とやらに留學して、三年前に歸りし人なり。親たちの一度は我に許せし其人なり。之を知るかとは、民之助様の御辭も憶出られて、彼方なれば知れりと答へしに、知る理なりと、叔父と叔母とは微笑みて、かの菅なり。是非に其方を與れよとて、此程より切に逼りけるを、一度破れし事もありければ、今更と好きやうに辭りしを、推返して人棧架くるは、何故にかと段々糺せしに、幾人の見合も皆氣に入らず、元の其方に越したるは無くて、懇望切なりと聞くが上に、親の頼も辭し難ければ、其方の意を聞かむとて、わざ〳〵今日は呼びたるなり。如何、格別異存はあるまじ、と叔父の心はは や其に定りたるも次手惡し。

折角なれども、今年中は御奉公申すべきを、奥様に御約束もいたし、來年は旦那様の弟御様に娶せむとて、

御二方の種々仰せられければ、叔父ども相談の上にて、と申上げて置きたる事もあるに、其も棄て難く、此方も取極め難ければ、歸りて此由申上げての事にせむ、と聞きたる叔父は想の外なる氣色にて、叔母も嬉しからざる面色なりしが、強ひては勸めも爲たまはで、本意無げに物思はるゝは、御心の中にて然てや此身の放縱を憎みたまふなるべし。御心盡も我爲なるを、勿體なくは思へども、此指環といふものあれば、今は如何にとも成難く、よし成らばとて彼方の棄てらるべきや。恁く御機嫌を損じては、何とやら居愁くて、歸去のほどを急ぎけるに、切に留められて、之をも背くは、重ね〳〵心苦しく、牽るゝまゝに翌日は皆連立ちて春木座を見物して、それより歸去もならねば、民之助樣も御兒を待つらむ、と夢にも見つゝも其夜は泊りぬ。

せめては午後にとありけるを、我ながら素氣無く辭りて、小石川を出でしは、三日目の朝八時頃なり。

土產の玩具取擴げて、御兒の喜ぶ顏も見たし。彼方には一日晩れたる辯疏も無くて、片時も早くと、心の急くほど車は緩く、疲るゝまでに身を揉みて、やう〳〵澁谷に來りけり。やがて御門に着きたる嬉しさ。足も空に勝手口より入れば、竈に獨火の燃えしきりて、皮剝きかけたる茄子の味噌漉打置り、鍋鉉に褪の引縈み、あらぬ所に庖丁投出して、お婢は見えず。御土產物の包をば部屋に差置きて、奧樣の御居間へ急げば、

民之助樣の聲高に爭ひたまふが聞えたり。

何事の起りたるかと、卒に忍足して覗ひ寄れば、奧樣ばを民之助樣の引據ゑたまひたる御側に、旦那樣は手を拱きておたまへり。いよ〳〵狀態の尋常ならぬに、進みかねたるを民之助樣の見付けたまひて、環、遲りたるか、好き所にと、御聲の調子迫りて、環か、と奧樣は伸上りたまひぬ。我身に係る事などの起りたるやうなり。御二方の騷げるに引替へて、旦那樣は深く思案に暮れたまへり。思懸けざる爲體に氣を奪はれて、內には入りたれど、辭も出でず、うろ〳〵と眴したりしに、力夫は疱瘡に罹りたるぞ、と民之助樣の仰せられぬ。誰かは信とすべき。我は唯呆れたり。都合ありて昨夜は此方に泊りたるまゝなれば、今婢の告來りしに因りて、我も始めて知れり。乳母めは傳染を怖れて、今朝疾く遁失せしとなり。電報打ちしが遠山の歸來らむには間もあり。醫者の許へは人を遣したれど、家には小兒の單身さぞや苦みつらむ、と民之助樣の御辭、聞さも敢へず、我は衝と起ちて走出でむとするを、飛蒐りて抱留めたまひ、何所へ行くぞ、と暴かに仰せらるゝ。力樣の唯一人にて、無殘や、不便や。放して行したまへ、と身を顫はせば、力夫が疱瘡は想ふに容易ならざる劇症にて、正しく近所に其患者のありけるより感染したるなり。其者は昨夜死せしと聞けり。可憐

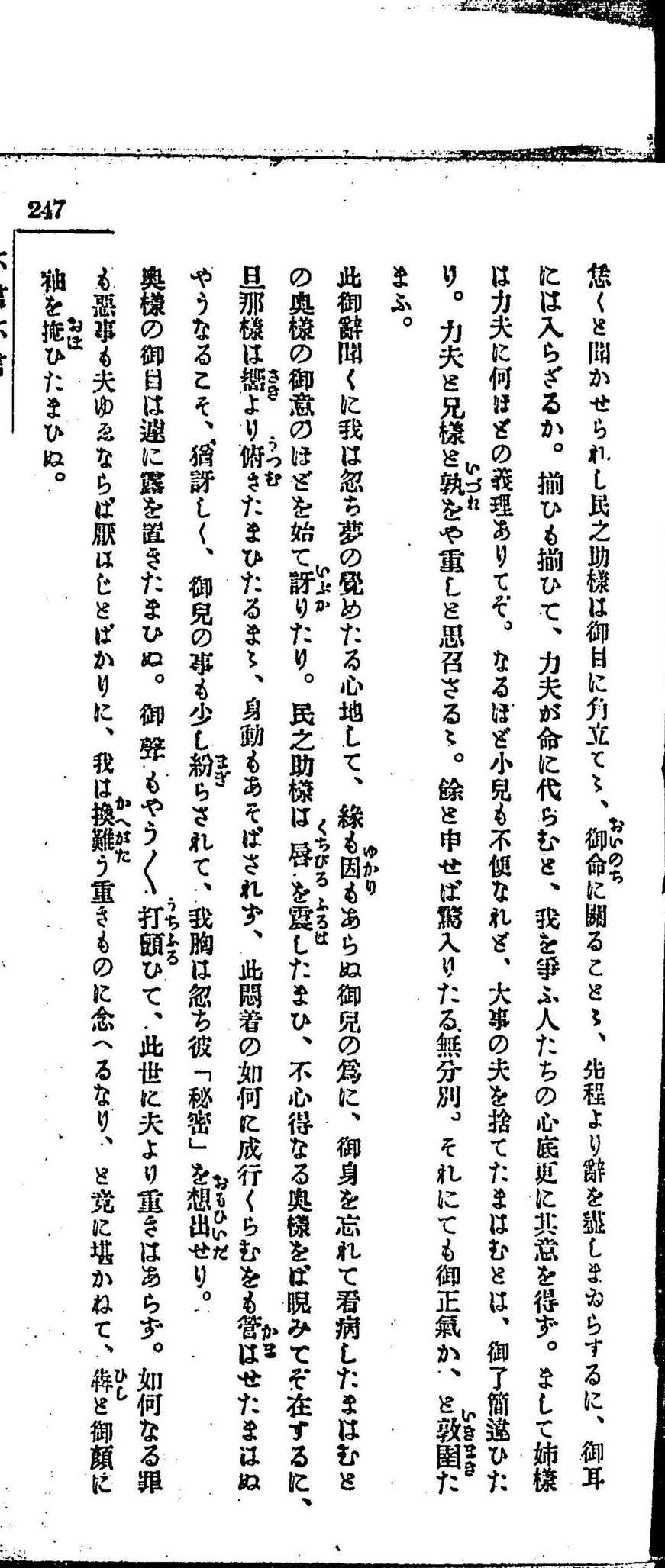
き兒の事なれば不便にも思ふべし。看病もしたかるべし。然れども恐るべき病毒の傳染を奈何にせむ。其方の命にも關るべきぞ、と民之助樣の諭したまへば、それも厭はじ、と我は泣出せり。御兒の劬るものも無くて、小さき枕に唯獨苦悶ふる狀の遽に胸に浮びたるなり。

力夫の爲に捨つべき其方の命かと、猶振拂はむとする我を抱緊めたまひ、耳の端に聲を潜めたまひて、我の命ならずや。我に任せたる身にはあらずや、と民之助樣は窘めたまへり。それは存じたれど、不便や、不便や、と我はいとゞしく泣さぬ。環とおほせらるゝ聲に、推當てたる袖の隙より見れば、奥樣の我傍に立たせたまふなり。奥樣、力樣は如何になりたまふらむ。哀と思ひたまへかし、と我は益涙に搦暮れたり。心遣すな。御兒の命は我ぞ助けむ。我身に換へて必ず助けむ、と常の弱々しきには似させたまはで、いと頼しげに奥樣は仰せられけり。我は餘りに頼しく、餘りに嬉しく、神などの告げたまへるやうに覺にて、思はず御袖に取縋りて、助けさせたまへ、御兒の命をと叫へば、奥樣は戦く我手を握緊めたまひて、憂世に住侘びたる此身の爲、二つには、長の月日の介抱受けたる其方の爲に、此看病は望む所ぞ。御兒の病の如何ばかり重くとも、我一念の力を以て、危殆はあらせじ、と思入りてぞ仰せられける。

恁くと聞かせられし民之助樣は御目に角立てゝ、御命に關ることゝ、先程より辭を盡しまゐらするに、御耳には入らざるか。揃ひも揃ひて、力夫が命に代らむと、我を爭ふ人たちの心底更に其意を得ず。まして姉樣は力夫に何ほどの義理ありてぞ。なるほど小兒も不便なれど、大事の夫を捨てたまはむとは、御了簡違ひたり。力夫と兄樣と孰をや重しと思召さるゝ。餘と申せば驚入りたる無分別。それにても御正氣か、と敦圉たまふ。

此御辭聞くに我は忽ち夢の覺めたる心地して、緣も因もあらぬ御兒の爲に、御身を忘れて看病したまはむとの奥樣の御意のほどを始て訝りたり。民之助樣は唇を震したまひ、不心得なる奥樣をば睨みてぞ在するに、旦那樣は襟より俯きたまひたるまゝ、身動もあそばされず、此悶着の如何に成行くらむをも管はせたまはぬやうなるこそ、猶訝しく、御兒の事も少し紛らされて、我胸は忽ち彼「秘密」を想出せり。

奥樣の御目は遽に露を置きたまひぬ。御聲もやう〳〵打顫ひて、此世に夫より重きはあらず。如何なる罪も惡事も夫ゆゑならば厭はじとばかりに、我は換難う重きものに念へるなり、と竟に堪かねて、袖を掩ひたまひぬ。



さばかりの夫を捨てゝ、力夫の爲に御身を危うせむとしたまふにあらずや。無分別なり、亂心なりと、民之助様は居長高になりたまへば、奥様の、さらば夫の許可を得む時は、と泣く〳〵訊ねさせたまひけるに、生死は夫の胸一つ。兄様の行けとならば何所へなりとも、と言放ちたまひければ、奥様は涙ながらに旦那様の御側へ居去寄りたまひて、様子は嚮より其にて聞かせたまへるならむ。願くは我身を遣したまへかし。生先長く、行末も頼しき幼兒を、今殺さむは餘に口惜しく、不便も一層なれば、我身をば兒の一命に換へさせたまへ。御兒の命に、かの御兒の命に此身を換へさせたまはずやと、御膝の邊に領伏して、潸々と泣きたまひぬ。旦那様はなほも御辭は無くて、俯きたまへる横顔は、いつのほどにか最凄く蒼みわたりて在せり。いと〻重なる不思議の有様に、民之助様も我身も自を失ひて、御側に寄集り、片唾を嚥みて、御二方の爲むやうを眺むるばかりなり。

御許あるべし。御許のあるべき理なり。かねての覺悟、嬉しくも今日こそはと、御顏を振擧げて彼方を視たまふ奥様の御目の赤く腫起りだるに、面影も稍變りて見えたまへり。

此時始めて旦那様の御顏も重げに擧りぬ。實に其色は樹の影の映ひたるが如く、御眼中は無量の悲と苦

とを湧して、見參らするだに恐しさの浸身に沁むやうにぞ覺えたりし。暫がほどは瞬もあそばされで、奥様の惱しげなるを打瞶らせたまひたりしが、忽ち御目を閉ぢたまひて、行け、と再び俯きたまへり。

膽を挫がれたる我等の二人は、實に爲む術を知らざりけり。好うぞ仰せられける、御名殘は盡きざれど、時後れなば効無からむ。民様にも環にも申置きたき事は山ほどなれど、今は娓々言ひてあるべき時ならず、何事も後よりとて、奥様は起ちたまひぬ。

御顏は滋き涙に汚れさせたまへど、今は〻や泣かせ給ふにあらず、御覺悟の氣色、常の萎れさせ給へるに替へて、さりとは屹と落着きて見えたまへり。されども我の悲しさは、力の限御手に縋りて、貴方の御越あるべき所にあらず、參るならば私こそ。いかに旦那様の御許はありけるとも、環が此は放し參らせじ。見す見す死にゝ行かせたまふなり、と身を悶へて賣り參らすれば、其志は忘れじ、と突放したまふを又取付きて、いよ〳〵思止らせ給はずば、私も御供にと、彼方を差措きて駈出せば、又民之助様に抱留められ、旦那様には呼止めらるゝ彼此僅の隙に、奥様は御座敷を擦脱けたまひぬ。其と見るより民之助様は我を打棄てゝ追ひかけ、引戻したまひけるを、捨置け、と旦那様の御意あるは、正しく殺せなりと、民之助様は呆惑ひて、石

の如く立ちたまへり。我は唯恐しくて、胸騒ぎ、身は顫ひつゝ、戦と奥様の御袖に縋りたり。

旦那様は苦々しげに、深き仔細のある事なり。止むるは渠の爲ならねば、捨置け、捨置け、と頭を掉りたまひぬ。如何なる仔細のあるか知らねど、怪しからぬ事ならずや。捨置きて姉様の御身に萬一の事などあらば、と民之助様は御息も迫りつゝ。

如何にともなれかし。我も人なり、渠も我妻なり。絶つは苦き恩愛の羈を切りて、行けと許し、止るなといふには、深き仔細のありぞと知るべし。其所放さぬか。はや行け、と旦那様は御目を瞑りて觀念したまへば、後れじと奥様は御庭へ走出でたまへり。

遣らじと我等の逐ひ參らする後より、駈着けたまへる旦那様は、民之助様を支へ給ひて、環も待てよ。言ふべき事あり。仔細知らずは驚愕は然もあらむ。遣るが慈悲ぞ、と御涙一滴。奥様は轉ぶが如く畠の方へ馳行きたまひしが、はや切戸口より出でさせたまへるなるべし。

我は胸迫りて條に僵れたり、民之助様は御聲も震ひて、慈悲か無慈悲か知らざれども、十に九までは命も危し。さては殺したまはむ御意かと詰寄せたまへば、不便なれども其意なり、と旦那様は涙を嚙みたまひぬ。

怪しとも、不思議とも、悲しとも、恐しとも、旦那様は奥様を殺したまはむ御意とは。さては奥様も御自害覺悟にて行かせたまひしか。行たまふ御方の氣強さも、遣りたまふ御方の殘忍も、作物語、狂言などには見し例を、今目前なる悲哀に、我は幾ど我身の在るをも覺えず。有繋に民之助様は縄に御心を鎭めたまひて、疾く〳〵其仔細聞かせたまへと責めたまへば、語るは易けれど、渠の生ける間は人には言はじ語らじと契ひたれば、今暫は明し難し。やがて渠の死なむ後にと、旦那様は卒に涙に咽ばせたまひぬ。

やがて渠が死なむ後にとは、聞くにも堪へず、聲を揚げて泣伏せば、民之助様も今は打萎れて、連りに鼻を啜りたまへり。寔や頓て、悲くも頓て、美しき御寢顔も冷に、呼び參らせても御答無く、動し參らせても効あらぬ御枕上に、我等は再び之にも勝らむ思して、歎き悲むべきを坐に想へば、然あらぬ間に如何ともして御命助け參らせたく、遥る心は物狂しう、我を忘れて彼方に取縋り、奥様に如何なる御過のありてかは知らざれども、御見殺とは過なり。とても亡きものに思召されて、御命は此身に賜れかし。深山の奥、荒野の末人も覗かぬ谷間の底へも御伴申して、此世には隱し參らせむ。せめては生し參らせて、佛の御傍にも棄てさせたまへ。是非に御命ばかりは——又何の世にか廻合ふべき便もあらぬ、假の身の刹那の御命ばかりは免さ

せたまへ、と泣いつ喚いつ嘆き參らせけるに、旦那様は彌増す御涙の隙より、渠が爲には千部の經より、覓に勝れる哀願なれども、渠は所詮存へて樂しからざる不幸の身なり。死ぬるぞ渠が所望にして、殺すはなかなか我情ぞ。我の命を免むとても、渠は自ら死すべきなり。恁くまでに渠が命を他の愛まむ如く、渠は只管其身の亡からむを急ぐなり。然れど渠は努々心の狂ひたるにあらず。又我とても鬼畜にあらねば、誰か生けるを喜び、死ぬるを悲まざらむ。我等の夫婦は人の喜を悲み、人の悲を喜ぶべき憂目に遭ひて、始めて滅すべき業因の深き身上なれば、今は奥が事を悲むな。渠の身を最憐しと思はゞ、片時も渠が最期の速ならむことを、神にも佛にも頼みてとらせよ。酒一盃欲し。此に何ぞ在るかと訊ねさせたまひぬ。奥様御飲殘のゴルモットと申せば、陰ながら別の盃、其持てと仰せらるゝも更に御涙なり。

目も眩れ、心も消えて起つも力無く、やう〳〵這寄りて茶棚を啓れば、夜毎に御手觸れし壜の其まゝなるにも泣かれて、是も御紀念となるべき猪口はなほ悲しく、涙ながらの御酌を泣く〳〵承けたまひて、引懸け引懸け凄じさばかりに飲みたまへり。壜には滴も殘らずなりけれども、御顔色は枯骨の如くなほも亂るゝ御胸を持餘したまひて、手枕に仆れたまひけるばかりは、醉ひたまへるにも似たりけり。

彼方の隅には旦那様の臥したまひ、此方には民之助様の投首してゐたまへり。我は途方に暮れつゝ、如何にせば可からむ。此間も奥様の御身上心許なしと騒げば、嬉しくも、御見舞に伴れむとて、民之助様は起ちたまひぬ。

御命半は取留めたる心地して、御後に跟さて玄關に出でたり。男の脚して急ぎたまへば、片息になりて隨ひ參らすれど、厭後れ勝なるが捂かしさに、立戻りて、我手を牽きて伴れたまふ。中にも釣らるゝ想にて、其苦艱は追ひまゐらするより覓に勝れり。されども魂も憧出づべく心の逸れば、緊と握りたまへる御手を便に、一念に急ぎたり。

途中にて民之助様の仰せられけるは、我等の日頃心に繫けたる不思議も、此四五日の内には顯然たるべし。さりながら我等の所願は竟に協ふまじきぞ。姉の命は亡きものに極りたり、と涙ぐみ給ひぬ。頼にしたりし彼方さへ今は恁る事言出し給ふに、悲しさ、悔しさ遣る方も無く、如何なれば貴方までが見殺にしたまふかと泣けば、情は我にもあれど、姉が自ら死なむの意止め難きまでに切なるを如何にせむ。我が力は及ばざるなり。佛の力、神の力、それとても得及ばじ。かくまでに思迫めたる姉の心の苦惱を思へば、我は我身を劍

になして、唯一擊に其命をば絶たむと願ふばかりぞ。それをこそ姉はなか〳〵に喜ぶべきなれ、と御聲も斷續なり。

我も奥様の御覺悟のほどは知れり。故ありて我から死なむと望みつゝ、恥ひに生かされてあらむは、いとゞ悲しかるべきを思はざるにあらねども、それは見ぬ人にこそ言ふべきなれ。辱なくも姉様と御馴染も尋常ならぬ奥様の、たとへば御最期の後にて恁くと聞知らむとも、其思は幾多なるべきに、目前御吭に刄を擬てさせたまふも同じき今はの際に、如何に惜しがらせたまはぬ御命なればとて、之を餘所見のなるべきや。昔より死ぬべきを思替へて、尼法師ともなりし例數あり。せめては其様にもと申せば、それは心の底に命の惜き人、或は死なむにも死なれぬ人の爲せし業なり。姉も命の惜しきならば、かうまでは有らせじ。助くる方は種々あり。兄をば我の言宥めて、女の命二つ三つは片手に乞ひ受けても見すべし。姉が覺悟の體を見ずや。大方の事にては、あれまでの觀念はなるまじきなり。兄も思慮無き人にあらねば、など箇許の大事を當座の分別に任せむや。今は是までの因緣と諦むる外は無し。天の爲せる背はと、涙御手に餘りて袂を沾し給へり。我は今更返さむ辭も無〳〵て、胸は彌亂れつゝ、やがて其門に着きにけり。民之助様も心強うは仰せられけれど、有繋に御身上は案じられけむ、無事の御一目や急がれて、枝折戸突啓けて庭に入りたまひぬ。風冷に萩の茂を度りて、花は未だ散りやらず。

はや奥様は御兒の側に打倒れて、呼吸も絶々になりて在すらむやうに、想はれたりしに、姉様、と外より民之助様の呼びたまひければ、御答あるに嬉しく障子を啓れば、枕屏風の端に恙も無くて在したり。御座敷へ入らむとするを、固く止めたまひて、恁る所には入りたふな。恁る所に長居はしたまふな。御心に繫けて好うこそ御見舞ありけるを、いかで素氣無う逐ひまゐらすにはあらねども、御身に不慮もあらばと、それの氣遣はしさにと、御語も明爽に、惡怯たまはぬ氣色は、なか〳〵平生にも勝りたり。

我等は様に推並びて、空しく御姿を眺めつゝ涙を催すのみなり。奥様は重ねて、環、旦那様は如何に在すると、仰せられし時ぞ、御聲は少しく蹙りし。御心の憂さに堪へかねさせたまひて、強ひて召上りし御酒も醉とならず、御居間に獨り悶臥したまふなりと申せば、御介抱を賴むぞよ。家の事も萬般我に代りて好くせよかし。民之助様も環をば我妹と思召して、末長う便となりて遣はし給へ、と之を御意には御遺言なるべし。旦那様の御介抱、又御家の事、私風情の一日も務るべきにあらねば、御兒の看病は其道の者を傭ひて爲すべ

ければ、奥様は彼方と御一所に此より御歸去あるべしと諫めけるに、これこそ我身の願にて、旦那様よりも御許はありけるなれ。さぞや御一人にて侘しう慰めかねて在すらむに、疾く還りて、我に代りて御介抱申上げよ。こゝに長居は危し。民之助様、はやく〳〵環を伴れ給へとありければ、彼方は力無げに大息吐きたまひて、今は何とも申さじ。唯このまゝに立歸るべく。御覺悟の動しがたきやうなり、と呟きつゝ起ちたまひぬ。御兒の容體も見たく、恁くと申せば、奥様は徐に屏風を排除けたまへり。氷嚢を頭にして、纔に交睫める面影は、其とも覺えず變り果てゝ、面を蔽へる發疹は花の蕾を散せる如し。彼方を見るにも、此方を見るにも、唯胸碎け、涙の出づるのみにて、我は幾と性體を失ひつ。民之助様に扶けられつゝ、道すがら涙の乾く隙も無く、泣疲れ、悲み過して、還ると齊しく、得堪へず竟に打僵れぬ。我身にしても箇許の物思なり。旦那様は奥様はと、腸も絞らるゝばかりなるさへあるに、御兒の寢顔の紅斑々なる幻影も、悲歎の數を添へて、夜に入る程に頭重く、渾身の疲勞いと〻勝りて、宵より部屋に臥したりしに、お增は繁々御座敷へ通ひぬ。旦那様は獨り御酒を召上りて在するとなり。民之助様は折々御見舞に來たまひけるが、其人とも見えず髣髴たまひて、多くは物も仰せられで、大息をのみ泄したまへり。枕紙も冷く、打濕りたる燈火の下に、此夜

はいと〻心細く更けたりさ。

（十三）

明くる朝も心地勝れず、頭の重きにも換難く、御安否の氣遣はれて、縮に拔出でゝ御見舞に參りぬ。旦那様も民之助様も未だ御目覺のあらぬ程なり。

落葉を送る風肌寒く、天漏蛩り、田面の景色寂增りて、其所此所に殘る蟲の音微に、露けき畔道の獨傳も心細く、自から無常の身に沁みて、人の死ぬべき日和とぞ覺えし。

かの枝折戸は鎖したれば、格子より入りぬ。御座敷には御兒の啼き悶ふる聲類りて、奥様の優しう賺したまひつゝ、介抱したまへるが聞ゆ。襖推啓けば、環か、と興覺め顔に見たまひて、好う來たと云ひたけれど、はや歸れかし。御兒の事は案ずるに及ばず。我身に換へても仔細はあらせじ、と御辭は辛けれども、昨日にも、變らせられず恙無體に、我は先づ胸を撫でたり。

その「我が身に換へても」が申さむやう無く氣遣はしさにと申せば、然までは此身を念ふかとの御意なり。おろかの御事や。陰ながらの愁歎のほどは尙ほ幾許と思召すらむ。このまゝ永き御別ともなりなむやうに悲

しくてと申せば、まことと此身を思ふとならば、共々に我願をば愜へさせよ。我一生の願を愜へさせずやとありければ、其とは知りたれど、御願とはと怪しめば、この御兒の命を助けむ事なり。我は人の命一つ助けずば、在るにもあられぬ身の上なれば、かく夏虫の火に入る如きをも、更に恐れず、悲まず。いつかは一度此身を爇くにあらざれば、我心の愁は消えざるなり。平生其方が種々の心盡も効無かりし例の憂思ぞ、やうやう今や露るべき時は來にける。

我は茲に御兒の疱瘡の膿を吮ひて、其毒に腸の壞れて苦まむは、旦那樣と花の陰に御盃献酬して、其方が琴の調に慰まむより、覓に心も長閑なるべきぞや。三年ばかり以來に、昨日今日のやうにぞ嬉しき日とてはあらざりし。さりとても知らで、氣遣はしとは何事ぞ。はた其涙は何の意ぞ。恁くまで事を分けて聞かせしからは、はや其方の疑團も釋けて、共々に嬉かるべし。さては何か秋毫の氣遣もあるまじきに、二つ無き身をわざと危うして、この恐しき病毒の邊に立寄らむこと、此後は屹と慎むべし。改めて染々と言ふべきことあれども、今は其時ならねば、やがて我より沙汰せむまでは、忘れても此の垣の外にも立つまじきぞ。はや歸れ、行かぬかと、我をば閾の外に推遣りて、はたと襖を立てたまひぬ。御兒の憤る聲の聞ゆるのみ。

我は暫其所に泣伏したりしが、さらば御旨に從ひ、御沙汰を待つべければ、貴方も御身を大切に、必ず輕課のこと遊ばされな。御看病したまふとも、御用意だに深からば、病毒の感染らむに限れるにしもあらざれば、旦那樣の御歎、又數ならねども環が悲みも思ひ給ひて、やがて力樣も恙無う、貴方の御無事は猶の事、その命をば助けさせたまへるに因りて、御胸の雲も晴亘り、何方も御機嫌好う、目出たう御祝の筵に、今日の涙を昔語に笑はせたまはむやう、それのみを環の御願なり。

我も御辭を守りて、御沙汰のあらむまでは懷しき御顏も見ずに忍ばむほどに、奥樣も我願をば可かせたまひて、反復も御身を輕々しうしたまうな。さらば環は今御暇を申すぞかし、と襖越に聞ゆれば、御答は無くて歔欷に泣きたまへり。心强くも立歸りて、具に恁くと御二方の御耳に入れけるに、いづれも涙に暮れ給ひて、頻繁懷しき顏を見せなば、奥が覺悟も亂れて、いとゞ苦しき思をやせむ。唯此上は寄らず觸らず、在るまゝに任せて、左右は渠よりの沙汰を待つべし。聞く程物思の種なり。此後は奥が事言出すなと、旦那樣は今日も盃を放したまはざるなり。

民之助樣も種々仰せられければ、御見舞の事は辛うじて思止りけれども、忘るゝ暇は無くて、今やくと御

沙汰は待たるゝも、其折は其なるべし、と思へば猶悲しく、かくある今も、とあらむ行末も實に頼無く、果敢なさの限なりけり。

此日は三度ばかりもお増して御用を聞かせぬ。其度歸るを待構へて御様子を訊ねるに、別條もあらで夜に入りけり。晝のほどだに御身の案じられて紛るゝよしもあらざりければ、いとゞ胸騒ぎて身の置所も無く、窓啓けて其方の空を眺めたりしに、宵闇の物凄く、疎なる星の林を風の誘ひて、眼前に光の飛びしも、折からの氣に繋り、お増を頼みて、御見舞に遣れば、効々しう提灯振照して出でぬ。なほも見遣りけるに、したゝかなる闇の中を燈影のほら〳〵と覺束なくも漂ひつゝ、幽になりゆく心細さ實に謂はむ方無し。星は亦一つ飛びぬ。身毛竪ちて獨此闇に面を向くべき心地もせず、やがて提灯の見えずなりけるを機に、窓鎖して、部屋に入りけり。良有りてお増は跫音も蒼皇からず歸來れり。我胸は稍安じたり。果して御變もあらざりしなり。

恐しき恐しき夢のみ種々見續けて、夜は明けたり。お増は御用の品々調へて參りしが、未だ御目覺はあらざりしとなり。午前又參りて、御無事なる御顔見たりとて、共々に喜合へり。暮方の御見舞には、嬉しき〳〵

音信を齎したり。御兒の命今は我物なり。はや氣遣はあらずと。我は手の舞ひ、足の所踏も覺えず、御居間へ走行きて、云々と御披露申せば、御二方は打驚きたまひて、御兒の命助りたりとや、と互に御目を見合せたまひぬ。

姉様の御看病思遣らるゝ、と民之助様はほろ〳〵と泣きたまへば、奥が様子は、と旦那様は息をも出したまはず。それは聞遣して、勝手に駈戻りて訊ぬれば、お増も御兒の事の餘に思寄らず嬉しかりしに、婢より其事聞くや否や飛還りし仕合とて、狼狽きつゝ又走行けり。

行着くらむと覺しき頃、氣立ましき跫音の玄關を駭かせり。我は忽ち胸潰れ、御二方の御顔色は頓に變りつ。我立出づる遑もあらせず、そこらを犇して御居間に躍込みたるは、待ちに待ちたりし遠山様なり。

申譯無し。大事起りたりと、絶々なる呼吸を勵して、力夫に代りて奥様の臥れたまへり。渠が病をや引受けたまひけむ、御熱氣劇甚しく、唯今立歸りて何事も存ぜねば、驚入るの外無し。はや〳〵誰か御人を、其間の御介抱はと、飛ぶが如くに駈出でたまひぬ。民之助様は驚破と起ちたまへば、我も帶引緊めて續きしが、彼方はゝや出でたまへり。在合ふ雪踏踏きて御迹を追ひかけたり。

入日の名殘も消え〳〵に、例の毬の木立の邊見分かぬ黄昏の空、頭の上を鴉のいと悲しげに亂啼く。

御兒の死ぬべかりし枕の迹に、今は奥樣の熱を病みて臥したまへり。我身に換へてと仰せられし言の空しからで、終に御命を讓りたまひけるかと、悲しさ涙は既盡せし我目より、更に御健氣に泣かるゝ涙の出づることと限無し。

時を移さず奥樣は御居宅に引取られたり。御看病は我手一つにて、いでや思ふまゝ御奉公のなることのせめては嬉しき我心の味氣無さよ。惟へば打萎れたまへる御前に、琴搔鳴し、或は御物語など勸め參らせても、慰みたまはざりし憂さも辛さも、恁くまでにはあらざりけり。如何ばかり物思ひたまはむとも、唯生きて在せかし。曇の全く霽れたる御笑顔を見むとも、そのまゝ長き御別は、何にか爲む。御兒の病に比べては、いと輕き此御症なり。我に彼方を思ふ誠だにあらば、など箇許の御症に御命捨てさせ參らすべきやなど思續けつゝ、痩細りたまへる蒼顔を眺めがちに御藥の用意してゐたり。

燈火はいと明く、半死にたる如き御顔を照せり。毎に御眉の邊に叢りし例の曇の痕も留めず、風の竹に驚きたまひし比の御俤よりは、御看病に羸れ、熱に惱まされたまへる今宵こそ、かへりて目易う穩和に見にたまふなれと、打目戍りたりけるに、御夢の中に微笑みたまひ、やがて二聲ばかり呻きて、ふと御目を開きたまひて、御兒は如何にや、と先訊ねさせたまひぬ。御蔭にてはや些しも憂危はあらずと申せば、快げに打笑みたまひ、良有りて、環と呼びたまへり。御枕に近く進めば、其方には長々苦勞懸けたるを、何のほどにか其報はせむと思ひしに、やう〳〵今や時到れり。民之助樣に添はせて、此笠原の家を讓らむほどに、末長う睦しう暮したまへ、我の此世に在らむも二三日の間ぞと、御聲も濕まざりけり。

果敢無き事を仰せられな。御兒の命を助けさせ給ひし上は、千萬年も存へさせたまふべき御身上となりけるにはあらずや。御病も輕ければ、十分に御療養あそばして、一日も早く御全快を急がせたまへ。御兒も無事に、奥樣も御健に、旦那樣の御機嫌も好う、我身も民之助樣に、と思はず言未して口を噤めば、何とかあるべきに奥樣の御辭も無し。竊に差覗けば、御寢息のすや〳〵と聞えたり。

さりとは御覺悟なりける哉。初度は固く醫者の診察をば拒みたまひしを、人々種々に口說きて、纔に承引たまひけれども、御藥とては露ほども嘗めさせたまはず。我は絶えず責めつ、歎きつ、勸め參らせけるに、左にも右にも背きたまはで、餘に申せば、果は打腹立ちたまひて、我心に悖らば此には置かじ、とまでなるに

困じて、御二方に訴へければ、其方の好きに計ひくれよと、はや亡きものに諦めさせたまへるなり。

恁くて御病は募るのみにて、益衰行きたまひぬ。實に御命は風前の燈火、火上の氷の今をも知れず見えさせたまへり。然れども御氣は明にて、折々悲しきことなど仰せられぬ。旦那樣も民之助樣も立替り入替りてぞ御見舞に入らせられける。いと靜に寢入らせたまへるをば、御息のはや絶えたるか、と心驚かせしも幾度なりけん。唯弱りに弱りたまひつゝ、今日は其日より三日になりぬ。

邪慳の旦那樣と、氣强き民之助樣と、効無き環とは、打寄りて奥樣をば御見殺に爲るなりけり。

（十四）

九月二十四日の夜なりき。御枕頭には旦那樣、民之助樣と我身とは御側に居並びて、御臨終の間近なるを危みつゝ、爲む術も無く御氣色を目戍りたり。

奥樣は息も忘げに旦那樣を呼びたまひて、淺ましき女子の心より慮はぬ過失を爲出し、御不興受くる身となりてより、憂き事悲しき事の數々胸に餘りて、三年が間片時も穩き思無く、さりとは死ぬるに增したる苦艱も、恨は人に在らず、皆天罰と、それは身に責めて堪へも忍びもしたりしが、唯一つ是のみの心苦しかりしは、

御不興の後よりはいとゞ最愛き、最愛き貴方と云ふものゝありながら、今はの際までも染々御顏を見ることも稀はず、宿無き犬猫の如く殪れて、然ぞや敢無からむ最期の口惜さに、効無き命を存しも、何日は罪を贖ひ御不興釋されて、御手づから藥の一匙、露ほどの御情をも受けて、せめては御別だに夫婦らしう、と唯管賴みし念達きて、恁くて御側にて往生すること、なかゝ御佛の導きたまはむよりも辱なく、今日のあらむばかりにこそ三年の憂愁は忍びしかと、辛くも御枕を擧げて、旦那樣の御姿を飽かずも眺入りたまひて、竟に涕と泣きたまひぬ。此時いづれに出づる聲も無くて、燈火のみぞ耿々と。

奥樣は直に疲臥したまひて、御憎惡の深かりし此身も、人の命を救ひて、今は此世を去るべきなり。かの過失も、かの罪も此に愛でゝ釋させたまへや。釋すと御口より唯一言、それ承はりて、はや死なむと、御手を差出して、彼方の御膝の邊を慢しげに搜らせたまへり。旦那樣は辭も塞りたまひ、飲めども嚥めども餘る涙は、時雨の如く御膝に灑ぐを、奥樣は見付けさせたまひて、辱なき御涙や。泣かせたまふは我ゆゑにか。然れども一言は釋すと聞かせたまへと希ひたまへば、釋す。心易う死ねと、泣く〳〵打出したまひぬ。此御一言

言よりは其御涙こそ、實に幾千萬の御敎なるべきなれ。

奥様は重ねて、彼方の御手を枕に死なむと望みたまひぬ。皆泣きつ。やをら背より抱へさせたまひければ、世にも嬉しげなる御顔を彼方の御胸に靠せたまひつゝ、環も歡べ、と打笑ませたまひぬ。目も當てられず我は涙に打俯して、やう〳〵面を擧げし時は、旦那様の御手に縋りつゝ、奥様は御目を塞ぎて在せり。

こは什麼にと進寄れば、はや息は絶にたり、と旦那様は御顔を背けさせたまひぬ。

奥様は殁りたまへり。奥様は殁りたまへり。旦那様に抱かれたまひ、靠れたまひて、離れじと御身を一體にして、されども殁りたまへるなりけり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

亡からむ後にてと、御遺言のありける例の秘密を、旦那様は渠が罪の滅せむ爲にもとて、御亡骸の枕邊にて、其夜我等に語らせたまへり。

餘人ならぬ奥様の御事、善き御噂ならねば、且具に泄すに忍びず。笠原家の鉅萬の富をば、旦那様に嬰せまほしき御心の迷より、御家督なりし兄様の御遺子をば陰に毒害し參らせしを、その乳母の獨知りて、病死の

際に旦那様に密告せしより然しも心ならぬ御不和は起りしなり。

三年の御憂目と、今は我子の力夫を助けたまひし御覺悟と、御臨終の御愴惻など憶ふにつけて、いよ〳〵御過失の始末胸にも浮べ難くなむ。此事胸に浮ぶれば、忽ち奥様の怨しげなる御顔の顯はるゝを奈何にせむ。

然れば爰に筆を止めつ。又重ねては此事胸にも浮べまじきなり、

明治……年……月……日

笠原環記

（終）

（一）

紅葉集

驚見柳之助は其妻を亡つてはや二七日になる。去る者は日に疎しであるが、彼は此十四日をば未だ昨日のやうに想つてゐる、時としては、今朝のやうに唯の今のやうにも想ふ。餘り思ひ窮めては、未だ生きてゐるやうにも想つてゐる。なるほど病の前爲に敢無くはなつた、氷のやうに冷えて、美しい目も固く瞑いだ、棺へも欲めたれ編ば、葬送も出した、谷中の土に埋めて、樒の位牌になつて了つて、現在此に在るからは、假でもなければ、夢でもなく、確に死ぬだに極つてゐる。如何にも其軀は葬られて、其形は滅したに疑ひは無いが、彼の胸の内には、その可愛い可愛い妻の類子は顯然と生きてゐるのである。

柳之助は多く人を好かぬ、代には又多く人に好かれぬ性で、男では朋友の葉山誠哉、女では妻の類子、此二人の外には世界に柳之助の好いたものは無い。彼は多くの人を好く代に、唯此二人を好いたのであるから、その情の篤いことは夥しいもので、實に見苦しいほど其妻には惚れてゐた。

一も妻、二も妻、三も四も五も類で無くては、柳之助の夜は明けなかつた。彼の同僚は「妻が」先生と仇名

を付けたほどで、妻は彼の命であつたものを、彼は今その妻に死なれたのである。

然までに可愛がられた、大事がられた彼の妻は、決して然までに夫を思はなかつた。謂はゞ通一遍であつたけれども、柳之助は少しも不足に思はぬのみか、それが女子の性と信じてゐたのである。

例の同僚は嗤つた、蔑見は全力を擧げて其妻に惚れてゐるのだと。其通り、「全力を擧げて」とは嘲弄でない、適評であつた、適評ではない、事實であつた。

彼は今其妻に死別れた。則ち彼は第二の生命を奪れたのである。一日生家へ行つて見えなくても、直に顏色を蹙くして鬱ぐほどの愛著は、一週間經てど、十日經てど、乃至は一月、一箇年、十年が百年經たうとも、到底二度とは其姿を見られぬに極つた失望を忍ぶには餘る。さては是非も前後も、分別も用捨も何も無く、一圖の悲歎に沈むで、泣くと悔むの外は殆ど世をも人をも身をも忘れた。我是ない子供のやうに、「お前は何故死んだ。死ぬことはならん。死ぬといふ法は無い。」と、死顏の被を取つては、棺の前に座つては、墓標を搖つては、位牌を眺めては、寫眞を取出しては、聲こそ立てぬが、心の中では悶へ〳〵て絶叫した。

悔むで復らぬ事、悲むで復らぬ事ぐらひは、柳之助も知つてゐる。復らぬ事を復さう爲に泣きも悔みもするのではないが、或點まで泣き且悔むだらば、隨分復る事との信仰を以て泣きも悔みもするのではあるまいか、と思はるゝほど柳之助は取亂したのである。

その狂哀も漸く失めて、今は眞摯に其死を悲む涙が催して來る。諦められぬ、諦められぬ、諦められぬが定命と諦めねばならぬ——諦めて見た。諦めては見たものゝ、一旦生死の手を分つたからは、類は二度と再び此世に歸らぬ人、これから長い〳〵一生涯もう逢はれぬ、となつて見ると、その心細さ、味氣無さは居ても起つても堪へられぬ。此二三日は全く生効の無い體になつて、唯二件の事を思窮めてばかりゐる。

一つは、可愛い可愛い妻の生前の事。二つには、此先何を樂に生きてゐやうと云ふ事、此の二件が渦になつて、間斷無しに柳之助の胸の內を回轉してゐる。甚麼に考へたところが、此先の樂は無い、ばかりか、現在今日生きてゐる空も無いのである、と云つて、豈死なれもせぬ、と云つて、悲ひ生殘つて物を思ふも悲い、思ふまいとしても、忘れやうとしても、寢れば夢を見る、起きてゐれば、唯其事が紛々と胸に集る。

「吁、酒でも飲まう！」

と柳之助は憤れたさうに目を瞑つて首を掉つたが、直に置火燵から身を伸して、床の間の喚鈴を鳴したまゝ、

内向に手枕をして了ふ。徐に階子を踏むで、物柔さうな四十恰好の婢が昇つて來る。

「御用でございますか。」

と座敷の紙門を啓けると、柳之助は俯いたまゝで、

「酒を一つ買つて來てくれ。」

その力無げに仆れてゐる體を老婢は怪んで、

「どうぞ爲さいましたか。」

と體を差入る。

「可いから早く買つて來て。」　と彼はなほ顔を擧げぬ。

「はい、はい。麦酒なら内にございますが、やつぱり御酒の方が宜しうございますか。」

「麦酒でも管はん、早く持つて來てくれ。」

老婢は慌忙しく下りて行く。その跫音と俱に一陣の風は颯と檜を鳴して、吹懸くる時雨に北窓の障子は氣立ましい音をして倏忽濱々濡になるのを、柳之助は纔に首を擧げて見たが、又俯いて了ふ。

空は一面に微晦くなつて、雨は一時劇しく降り出す。襟元から蕭々と惡寒くなるのに、炬燵の火さへ消へかゝるので、横になつてもゐられず、物臭さうに起上つて、急に黯くなつた家の内を、何と云ふ事は無しに惘然眄してゐる。爾時老婢は蠟色の圓盆に、鉢に鷄子を三つ容れて、醤油注に小皿、小蓋物に箸箱、コップ等を載せて、片手には櫻田麦酒の栓を拔いたものを提げて入つて來る。

「御火燵にお火はございますか。何だか又寒くなつて參りました。」

「あゝ、火を少し貰はうか。」

と其處に置いた盆を引寄せて、コップを把ると、恐多さうに老婢の酌をするのを、何と思つたか一寸と見て柳之助は直に横を向く。それを見付けると、老婢は忽ち點々と涙を零した。柳之助は又其を見るとコップを持つたまゝ俯いて、滴々と涙を落す。老婢は塩を下に置くと、袂から鼻紙を出して頻に泣き始めた。

柳之助はコップに半分ばかりを一息に喝了けて、

「元、寂しいな。」　と故と元氣好く言懸ければ、

「御尤でございます。」　と元は益々泣く。

此挨拶では不足らしく、

「あゝ、寂しいよ、寂しくて可かん。」

と重ねて訴へたが、急來る涙を防がう爲に、餘れる酒を又一息に呷と飲むで、

「もう一盃。」

此酌に就いて彼は考へたのである。お茶一つ上るのでも、奥様の御手からでなくは御承知の無かつた旦那様が、元のお酌で上るのみか、注げと有仰る。嗚呼御傷い。例ならば「類さん」を呼べと有仰るのであるけれど、その奥様は御在なさらない。お寂しいとは御尤だ、と老の涙はいと〻脆かつたが、やがて忙しく目を拭いて、洟を去むで、もう泣くまいと覺悟したやうに紙を袂に入れて了つて、

「それに今日は姻家の奥様も御歸になつたものですから、急に猶の事お寂うございます。」

と盆の物を安排して、鷄子を割つて其へ出しながら、

「何も御肴がございませんので。本當は御精進なのでございますけれど、姻家の奥様が其には及ぶまいと有仰つて、此間から旦那様だけには御魚や肉を差上げて居りますのですから、御鷄子も宜しうございませう。」

「あゝ、それぢや何か、姻家の御母様やお前は精進なのか。」

「はい。」　と老婢は又少し萎れる。

「然うか。」　と頭を搔いて、

「些とも氣が着かなんだ。」

「いゝえ、旦那様はお宜うございます。」

「いや、俺も其ぢや精進にしよう。」

「然やうでございますか。それはまあ何方かと申せば、御精進の方が。」

「佛の爲だな。」

「然やうでございますとも。」

と其可憐しさに老婢は又涙を誘はれる。

「唉、もう佛に成つて了つた！」

耐りかねて柳之助は水でも飲むやうに一盃の麥酒を盡して、ほうと息を吐く。老婢は起つて、火を持つて來

て見ると、柳之助は目を閉ぢて、壁に凭れて、少しは醉つたやうな、多くは物を思ふやうな態で、憮然としてゐる。

元は火燈の始末をして、盆などを片寄せて、起たうとすると、主は弗と目を開いて、

「何時かな。」

その倚つてゐる壁の時計の掛けてあるのを老婢は見て、

「四時七分前でございます。」

「これから一寸墓詣に行つて來やうかな。」

と柳之助は障子の硝子越に外面を眺める。元は有繋に驚いた。如何な事でも一日に二度も墓詣をするものがあらうか。今日は二七日であるから、朝の内に谷中まで詣つて來たばかりである。それも近い所では無し。まして雨は降る、日は暮れる、これから如何なさらうと云ふのか。と其氣色をば候つたが、隨分出掛もしさうな樣子。

柳之助の身になつたらば、懷しい〳〵遺骸の眠つてゐる所は、目に見えぬ魂魄の猶留る屋棟の下よりは、追

墓の渴を醫するに疑無い。彼の墓詣をせうと云ふのは、生きてゐる人を尋ねると同じ意で、戀しさに堪へかねたればこそである。

怎う考へたらば、別に不思議は無い。老婢も然うとは考へたのであるが、極めて不思議に思つた、或は變に思つた、些と氣が如何かしたのではあるまいかと思つた。然う思ふと、何と無く可恐やうな、心細いやうな、途方に暮れたが、左も右も留めるより外に法は無いと思案して、

「もう今日はお遲うございますから、明朝になさいまし。」

「遲くても可いさ。」

「それでも、今朝もう一度御詣をなすつたのぢやございませんか。那麼に一時に幾度も行らつしやらなくつても、日に一度づゝで繁々の方が、却つて佛樣は御喜でございますよ。」

「然うかな。」　と柳之助は稍　れる。

「これから御詣をなさいます代に、御佛前へいらしつて、御線香を多度お供げ遊ばしましな。」

子供が言聞かされたやうに、柳之助は悄々と頷いた。墓詣は思止つた樣子に、老婢は胸を安むじて、

「私も御同向を致しますから、いらつしやいまし。」

日暮に渉る空模様は雨の爲にいとゞ暗くなつて、製造場の汽笛が鳴つた聲で泣くやうに聞える。彼は曳入れられるやうに寂寥を感じて、噫今夜も此寒い、陰氣な二階に燈火と相對で居なければならぬか。居られるものではないと思ふと、柳之助は我知らず衝と起つた。

起つた所で何所へ行くのである？此が自分の住居であれば、何所へ行つたとて「類さん」は居ない。我家であれは、依然此に居るのだ、と座敷中を眺したが、如何しても居る氣が無い。起つて見ると、もう座る氣も出ぬ。

例ならばランプを持つて昇つて來る時分だ。晩飯の支度をするので、元と呼ぶ聲が聞える時分だ。ランプを持つて來ぬ、元と呼ぶ聲もせぬ、吁寂しい、寂しい、と柳之助は堪へかねて、二間の座敷を往來してゐたが、其でも堪へかねて、竟に階子を下りた。

「元、元！」

と呼びながら玄關の方へ出る。老婢は臺所から駈けて來ると、

「傘を出してくれ。」

と言つたばかりで、焦躁しながら考事をしてゐる眼色。元は前垂で濡手を拭き〳〵、

「何方へ行らつしやいます。」

と其擧動を見てゐる。

「一寸其所まで。」　と極めて胡亂に答へる。

「御出掛でございますか。唯今お線香を供げると有仰いましたのに。急に如何爲すつたのでございます。」

可恨さうに元に視られて、少し面目無かつたか、

「やつぱり一寸行つて來る、どうも氣が濟まんから。」

「御墓詣でございますか、」

柳之助は唯頷いて座敷の内を例の運動してゐる、心では此墓詣を異變なものと思ひながら、氣が濟まぬゆゑに行つても見たいのを、如何したものであらうと分別しかねてゐるらしく。

老婢は彌氣味惡く思つて、之は飽くまでも出しては好くないと、氣に障らぬやうに種々と留めた、留められて

見ると、有繋に其に理があるので、振拋つてまでも出やうとは爲ぬけれども、又滿足して思止ることも出來ぬので、益烈しく座敷中を往きつ還りつしてゐる。

（二）

此時格子の外に人力車が駐つたので、柳之助は慌てゝ玄關に駈出ると、美しい蠟塗の車は軒を支いて、氣凜と雨具に身を固めた車夫が背面になつて、前桐油を外してゐる。

車の音を聞いた時に、柳之助は不圖類さんが生家から歸つて來たのかと想つた。そこで駈出したのであるが、車を見ると、然で無いのを覺つた。見覺のある此車は友人の葉山誠哉。

あゝ、葉山が來てくれた、と嬉しいやうな、賴しいやうな、それにも胸が逼つて、又涙が出る。

「おや、葉山樣が入らつしやいました。好い所へまあ。」

と老婢は頻に喜ぶ。

葉山は霜降の厚羅紗の外套を着て、全然と頭巾を被つて、小豆色の爪革を掛けた新しい足駄で、細骨の蛇の目を翳げながら、

「あゝ酷い降だ。」　と急いで格子の内に入る。

「此御天氣に好くまあ。」

と老婢は急遽起ちかゝつて外套を脫がせる。柳之助は懵然した顏の、氣の無い聲で、

「さあ上りたまへ。」

客と主は連立つて二階へ通る。迹には老婢が車夫に向つて頻に愛相を言ふのが聞えた。

葉山は座敷へ入ると直に、

「おや、參酒かい、洒落てゐるぢやないか、豪氣だね、火燵は。」

と衝と入つた、

「あゝ寒い、寒い。」　と肩を搖る。

性來の無愛相が、愛に心を奪れてゐるのであるから、柳之助の樣子と云ふものは、無い！可厭な奴が來たと謂はぬばかりである。けれども心の中はなか〳〵嬉しいので、

「此方へ來たまへな。」

と壁際の自分の席を指すと、

「何有、此で可い、其代一盃戴かうか。今日は御見舞に來たのだ、然う〳〵、持つて來たものがあつた。」

葉山は手を鳴して、

「車の中の包を。」　と老婢に命じた。

元はやがて定紋付の朋黄絹の袱紗包と、重箱らしい包とを持つて來て、葉山の前に差置いて起たうとするのを、

「一寸待つて下さい。」　と袱紗の包を解いて、

「之を御佛前へ。」

西洋林檎を一籠と蒸菓子が一折、鳩居堂の線香を一箱添へて、蒔繪の盆に載せたまゝ其へ出す。

「おやまあ、御見事な、まあ。」

と元は急に手も出さずに眺めてゐたが、

「旦那樣、御覽遊ばしまし。」

と其方へ差向ければ、柳之助は頷いたばかり。物馴れた老婢は主人に成代つて百方禮を述べて、

「どれ、御覽に入れて參りませう。」

と起ちかければ、

「それから未だお重だ。これは御菜です。何か旨い物を持つて來やうと思つたけれど、此際の事だから遠慮をして、椎茸、干瓢の類さ。尤も代物は精進だけれど、少しは陰に如何樣がしてあるかも知れませんよ。」

と笑ひながら包ごと元の方へ推遣る。

「それは、まあ何から何まで、難有う存じます。お蔭樣で私も大助りでございます。旦那樣、又お重を戴きました。」

「それは難有う。」

と柳之助はやう〳〵禮を言ふ。

葉山は手焙を引寄せて、葉卷の細卷を吃しながら、柳之助の又思出してか、俯いてゐるのをじろり〳〵と視て、何と慰めたものであらうと思案をしてゐると、柳之助は左の袱紗から手巾を一握出した。而して隅の方へ

投遣ると、其が三つになつて轉がる、今度は右から又二つ引張出した。それをも投出して了つて、袖で目を擦る。

葉山は驚いて見てゐたが、

「何だあの手巾は？」

「どうも涙が出て困る。」

「那は悉皆濡れてゐるのかい。なるほど瞼が腫太くなつて、太く目が赤いと思つた。さあ之を貸さう。」

と綾絹の白の手巾を火燵の上に出せば、芬と香水が匂ふ。

「好い香がするね。妻が能く言つたつけ、君が來ると好い香がするつて。」

「否味だと言つたのだらう。」

「君も知つとるけれど、妻は決して悪口を言はんかつたよ。特に君に對しちや、何だ、非常に信用して居つたから。」

生前でさへ妻の事を説く柳之助である、まして今日では、其噂を始めたら底止はあるまい。其は可いが、餘

り思はせて泣かせるのは健康の爲に好くない、故に慰藉に來たのと思へば、葉山は故と話頭を轉じて、

「時に。」　と言出した。

柳之助の胸の内は、はや妻の事に就いて萬感が満ちてゐるので、何から話出して可いやら、それにのみ氣を奪られて、他の言は耳にも入らぬ。

「實に恁云ふ時に妻が居つたら御馳走をするのだけれど、居らん、妻は居らん。」

と好い香のする手巾を把つて、柳之助はさしぐむ涙を拭ふ。

「然しね。」　と葉山は又言出すと、

「然し、居らんやうな心地はせんよ、死んだとは思はれんよ。」

「それは尤だ。然し……。」

「何故死んだかと思ふと、妻は實際僕を愛して居らんかつたかと思ふよ。」

「那麼無理な事があるものか。」

「あゝ、それは無理かも知れぬ、無理だらう、無理だつた、全く無理だつた。」

彼は最愛の妻の氣に障つた事を不圖言つて、その不嫌機を見て、遽に執成すやうに、詫でもするやうに、頻に斷つた、固より無理などを言ふ意ではなかつた、思餘つて不知口走つたのであるが、無理と尤められて見れば、無理であると心着いたので。すると、「頼さん」の絶然とした面影が胸に浮むだのである。最愛の妻の面影は始終眼前には隱顯てゐるが、それが忽ち不興の眼色をして怨めしさうに視たのである。

柳之助は濟まぬと思つた、無理である、と頻に詫びた。けれども心が落着かぬ、即ち幻の面影は其色を釋かぬのである。耐りかねて柳之助は、

「妻はね、妻は……」

と言出したが、さて何と言つたものやら、有繋に惑つたのである。

「妻は君も能く言つたけれど、非常に客を喜んでね、僕とは違つて愛相が好かつた。」

とは言つたが、是では未だ其不興を釋くには足らぬと思つた。然し早速に言ふべき事が出なかつたので、姑く考へてゐたが、何を思出したか、又涙ぐむで了ふ。

「時に、君は學校の方は如何した？」

と葉山は持扱つてゐた「時に」をやう〳〵用立てる。

「學校？學校なんぞは管はん、もう否だ。」

苦い顔をして柳之助は頭を掉る。

驚見柳之助は大學の地質學專科を卒業して、今は東京物理學院の教授を勤めてゐるのであるが、謹勉であり、懇切であり、而も十分に實力のある所から、學院の氣承も生徒の信用も極めて好い、慾には試驗の點が少し辛いと云ふ噂の外に、此人に對する非難の聲は全く無い。學院では實に難有い大事の人になつてゐるのである。

「管はぬたつて、然は行かないぢやないか、自分の職業ぢやないか。餘り長く退いてゐたら、學校の方で差支べるだらう。」

「差支へても管はん。」

「那樣自棄を言つちや困るね。もう少し休むだら出る方が可いよ、獨で引籠つて居るよりは却つて氣が霽れるから。」

「嗟もう何を爲るのも否だ、何も出來は爲んよ。實際僕は生きとる樂が無いのだ、生きて居らうとは思はん

よ。」

葉山は手酌の麥酒を一口飲むで、

「困つたもんだ。」

と榻の上へどつさりと靠れる。

「僕は實に寂しくて可かん。君、それは實に寂しいものだよ。それに這麽雨の降る日などは、如何しやうかと思ふやうだ。何所へ行つても家中線香の氣がして、其が實に耐らんね。恁云ふ心地で一月も居つたら僕は屹と病氣をする、病氣をしても看病する者は無し、慰めてくれる者は無し、一日だつて僕は寢てゐられやせん設然うなつたら如何せうかと思ふと、實に心細い今でさへ這麽心地なのだから、あゝ否だ、否だ！」

惣毛竪つたやうに柳之助は身顫をする。

「那麽事まで考へた日には際限が無い。どうも今更爲方も無い、何も天命と思切るより外は無いのだ。」

「僕は到底思切れんよ。」

「思切れんつと云たつて……。」

「だつて、思切れんぢやないか、僕の身になつて見給へな。君は殘酷だ。」

「殘酷は過いね。君が何程思切れないと云つた所で、お類さんが生返るぢやなからう。」

「ぢや思切つたら生返るか。」

と柳之助は急立つた氣色。

「又那麽無理を言ふよ、君の心は十分察してゐるわね、けれども哀むで傷らずだよ。君は細君の爲に體を毀しても苦しくないのだね。」

返答に窮へてゐる間に葉山はコップの酒を飲乾して、更に一盃を注がうとすると、半分よりは無い。

「麥酒はもう無いかい。」

「無けりゃ買はう。」

と喚鈴を鳴して元に聞けば、幾許もあると、又一本口を拔いて來る。

「まあ一盃飲むで、もう那麽話は止さうよ。」

と葉山は一つ差した。

「他の話より此話が可いのだから、もつと爲てくれ給へ。」

「可けないよ。始終考へては蔚いでゐる所へ持つて來て、又其話をしたら愈泣かせるのだ。不吉な話は止さう。」

「不吉とは？君……。」

柳之助は口へ持つて行つたコップを控へて、屹となる。

「いや。悪かつた。私は今日は君が獨で寂しからうと思つて、見舞たのだ。然し一々言ふ事が君の感情を害すやうで、誠に濟まない。御迷惑だらうから私は是で御暇をする。」

身繕をして、葉山は起たうとする、其袖を柳之助は緊と捉へた。

「あゝ、悪かつた、僕が悪かつた。言過ぎたよ、免してくれ給へ。實際不吉に違無いのだ。」

苦に柳之助は詫びる。

「それぢや然云ふ話は止すかい。」

と未だ立膝をして羽織の紐を正してゐる。

「止す、止す。」

と片手に葉山の袂を捉へながら、慌てゝコップを空けて、

「さあ一盃、一盃飲むでくれたまへ。」　と突付ける。

此子供らしい所が葉山の柳之助に惚れてゐる所で、彼が他の思はくをも管はず、直に「妻が」と言ふのも、不吉と言はれて、今腹を立つたのも。皆此子供らしさからである。

「那際話は止すと云ふなら。」

と恩がましくコップを受けて葉山は又火燵に入る。

「まあ居てくれたまへ。君に往かれて了ふと僕は孤獨だ。」

盃を義して置きながら、酌をするのは忘れて、蒲團に顔を推付けて柳之助は又欝ぎ出す。

愁ひ合手になつてゐたら、彌思出させるばかりと、葉山は不如飜弄して了ふ氣で、

「おい御酌は？」

「や、忘れた。」

と慌忙しく壜を取つて注ぐと、たらりと一雫ほど。兩個は思はず顔を見合せる。

「何だな、壜が違つてゐるよ。」

柳之助は濟したもので壜を替へて酌をする。滾々と出る酒を見ながら葉山は少し〳〵笑を帶びて、

「有る酒ならば恁して出る、ねえ驚見。」

と泡を噴く酒と柳之助の顔とを等分に見較べる。妙な事を言ふと思つて、柳之助はおのれの手元を見い〳〵葉山の顔を眺める。

「ねえ、無い酒は出ない、君は酒の無い壜で酌をすることは出來ないと云ふ事を知つてゐるぢやないか。」

「それが……？」

と柳之助は怪訝な顔をする。

「それがさ、無い酒も、亡い人も同じ事だらう。だから、餘り然う快々思はないが可いと云ふのさ。」と一口附けて、

「肴をくれたまへな、その鷄子を。君が手づから割つてくれるのさ。」

一個取つて皿の縁へ抵てやうとして、柳之助は一寸控へた。

「何を考へてゐるのだ。」

「僕は今日から精進なんだからな。」

「君は精進でも、私が戴くのだから可からう。然し精進は解つたが。今日からは解せないね。今日からとは如何いふ理だ。」

「もう可いよ、可いよ。」

と一思に勢然と皿の縁へ打着ける。

「然うだ、然うだ。下地を注けて、あッ、那麼に注けて……如何するのだ。さあ〳〵此方へ貸した。鷄子をもう一個……辛さうだから塡めるのさ。それから盆を、後が箸だ。」

葉山は之を榾の上で好いやうに鹽梅するのを、凝然と視てゐたが、

「君は好いな、一寸那麼事も上手にやる。僕は全く出來んのだ。悉皆妻にしてもらつとつたのだ。その妻がもう居らんのだ。吁、困つたなあ。」

口頭に出したのは纔に如此耳であるが、胸の中には千萬無量の思が紛亂したので、彼は蒲團に顔を推付け、擦付けて悶へた。

葉山は餘りの樣子に手を着けかねて、姑默つて視てゐると、柳之助は急に顔を擧得なかつた。いつまでも視てゐれば、いつまでも擧げぬので、

「其話は止すと云つたぢやないか。」

それでも柳之助は仍顔を擧げぬ。

「さあ、もう好加減にしないかよ。」

と肩先を輕く拊けば、やう〳〵擧げた顔は、洗つたやうに涙に浸されてゐる。

「如何かならんかな。僕はもう耐らん、不愉快で。這麼不愉快な事は無い。如何しても慰められん不愉快だ。僕は今迄は甚麼不愉快な事があつても、妻の爲に慰められたのだ。僕は其妻を亡つて了つた。今朝墓詣をしたのだ。實に、君、夢だね、赤土の土饅頭に一本の墓標が立つとるばかりで、雨が寂しく降つとるのだ。君之を見てくれたまへ。」

例の絹の手帕で半面を掩へながら、柳之助は本箱の上にある雲州燒の小さな瓢形の一輪挿を指す。葉山は見た。染垂れた山茶花の半開が一輪横向になつて挿してある。

「君、是だよ。」

と柳之助は炬燵から這出て、横向になつてゐるのを正面に正さうとしたが、枝が曲つてゐるので、如何しても外方へ振つて了ふ。花入の方でやう〳〵鹽梅をして此方を向かせて、

「この山茶花だよ、好いだらう。」

何が好いのだか、葉山には少しも解らぬ。

「君、好いだらう、好いと言つてやつてくれ給へ。」

「又思出したのかい。」

困り果てた所爲事無しに葉山は麥酒を飲む。

「妻は一體賑かなのが好きだつたに、寂しい森の中で雨に降られて、唯一人埋まつとるぢやないか。僕は實に胸が一杯になつて如何することも出來んかつた。而すると、姻家の母がね、此花を見付けて僕に敎へたの

だ。垣の隅を見ると、此花が唯一朶咲いとるのだね、君、其木に唯一朶なのだよ。母が言ふには、是は類の魂だ。類の思が遺つて花になつて咲いたのだ。類の大好の長襦袢には山茶花の模様が着いとつたから、是は類の魂に違無い、と言つて泣くのだ。僕も見ると、丁度此方を向いて此花が咲いとるのだ。變な事を言ふやうだけれど、其時は此花が實際類の顔に見にたよ。風が來て動くのだ、類が藥を飲むのは否だと言つてね、首を掉つたやうだつた。僕は其時は妻が復活つたのかと想つた。考へて見れば妻は僕等の脚の下に埋まつとるのだ、是は山茶花なのだ。妻の母は紙を出して、泣きながら此花を拭いとるのだ。何を爲るのかと聞いたら、君、親子だね……。」

柳之助は咽返つて語が續かぬ。葉山は茫然酒を飲むでゐる。

「母親の言ふには、雨が灑つて冷たさうだから、少し拭いてやる、と君、自分の濡れるのも知らずに熱心に拭いてやつとるぢやないか。而して此花を全然鼻紙で裹むで了つた。那麼事をするものだから僕は猶悲しい、道麼所に獨で置くのは可哀さうだから、内へ持つて行かうて言うと、それぢや一所に連れて行つてくれつてね、折つて僕に渡したのだ。君、此花だよ、あゝ、君の方を向いとるよ。」

柳之助は壁に頭を推當てゝ泣出した。餘り愚痴とは思ひながら、沒々哀に搔口説かれて。葉山も誘はれ氣味の稍胸逼る。

「もう言はないが可い。いつまで言つたつて所爲が無い。」

と鼻聲になつて顏を撫廻す。

「言はしてくれたまへ。言はずに思つるとのはなほ不愉快だ。言つとれば多少氣が霽れるから。」

「それぢや此方が窮るよ。」

「君は窮つたつて、僕が窮つとるほど窮りはすまい。」

と柳之助は涙を拂つて問懸ける。

「然うどうも理窟を言はれぢや困るね。」

「然し、君は僕が道麼に思つとるのに、少しも僕を可哀だと思つてくれんのだ。君は平氣でをるのだ。妻は君を兄のやうに思つとつたのに、君は類が亡くなつても、悲しいとも何とも思つてくれんのだ。君は然云ふ不實な人物とは思はんだつた。類の爲に眞實泣くものは、類の母親と僕と二人限だ。君は類の死んだのを悲

しいと思つてくれんかね、僕は悲しい、這麼悲しいことは覺えない。」

柳之助は潸々と泣く。其體は如何にも可哀であるが、葉山は寧ろ首を傾けた。ちと逆上てゐるのではあるまいかと考へると、誘はれた涙は遏つて、葉山は慄然としたのである。

「それぢや如何すれば可いのさ。もう其話は止すと言つたから、私は歸るのを又居たのだ。然すりや又話を始めて、擧句の果は私を攻擊するのだ。惡いことは言はない、然う思徹めてばかり居ては體が耐らないから、努めて氣の紛れるやうに工夫をしたまへ。第一内にばかり引込むでゐるのが好くない、些と出掛けたまへ。」

「それが既に不實だ。死だものは爲方が無いから、忘れて了へ、思ふなと云ふのは、殘酷ぢやないか。僕は死だから思ふのだ。思つたから如何なる、泣いたから如何なると、那麼卑劣な、目的などを有つとる理のものぢやない。君は僕より年長だし、經驗にも富むどるし、世間にも通じとるから、僕の考へてゐる所は或は僻してをるだらう、君の社會的の目から見たら宛然子供だらう。君の言ふ所は世間の行ふ所なのだらう。君は世間を以て僕を責めるのだ。僕は世間は知らん、けれども幸ひに僕の心には世間と云ふものに蹂らせられん一片の誠がある、其誠がある爲に僕は忘れられんのだ。からして忘れられんのは、決して愧づべき事では

ないと思ふ。」

「誰も愧づる事だとも何とも言ひはしないよ。」

「言はんけれど君は愧づる方だらう。」

「えゝ、もう、何方でも宜きやうに願ひませう。」

と言つた限で、其後は柳之助が何と言はうが、見向もせずに、くびり〳〵と獨飲むでゐる。柳之助ははつと思つて、

「君、腹を立つたのか。」

葉山は昂然として、

「あゝ腹を立つたよ。」

「僕は言過ぎたかね。」

「あゝ言過ぎたよ。」

「免してくれ給へ、ねえ。」

彼は無雜作に例の子供のやうに過を悔ゆる。

「宜い、君は僕を不實だと言ひました。」

「だから言過ぎたと云つて謝るのだ、免してくれ給へ。」

「君は成程細君は可愛いけれど、朋友などの事は何とも思はないのだね。宜い、解つた。」

「那麼事があるものか、那麼事は無い。」

「それなら朋友の言ふ事も用ゐたが可いぢやないか。」

「無論用ゐるさ。」

「用ゐるね、屹度用ゐるね。」

餘り念を推れるので、如何なる事かと柳之助は覺束なく思ひながら、

「用ゐる、用ゐる。」

と言ひは言つたが、さて何を言はれるか、と氣遣はしげに葉山の顏を視てゐる。

「外の事でもないがね、内にばかり引込むでゐるのは好くないから、本當にちと出掛けたまへ。」

「何所へ？」

「まづ學校へ行くのは一番好いが……。」

「未だ腦が亂れとるから、それは可かんよ。」

「それでは、僕の家へ來たまへ、遊びに來るのだ。御馳走するよ。出掛けた方が氣が霽れて甚麼に好いか知れやしない。氣も進まなからうけれど、まあ瞞されたと思つて來て見給へよ。屹と來るかい、宜いかい、來るね。」

柳之助は熟と思案してゐる。

「如何したのさ。別に考へるほどの事は無からうぢやないか。内に引込むでゐるよりは氣が霽れるよ。明日は休日で、私も一日内に居るから、朝から來たまへ。何を那麼に考へてゐるのだらう。」

太く考へてゐるのが葉山には解らなかつた。尤も何事にも直に考へるのが此人の癖ではあるが、己の信ずる唯一人の葉山の言ふ事は、常に自分の了簡よりも信ずるほどであるから、葉山が右といへば右、左といへば左、つい應と言はぬことは無いのである。今日に限つて、何故か考へるにも當らぬ事を太く考へる。なるほ

と葉山には解らなかつた。

けれども、是は仔細も無い事で、例の細君の死を悲む餘、何を爲るのも氣が無いので、外へも出たくはないのであらう、と恁う判じたから、猶更勸めて否應無しに引出さうと考へたのである。

悄發の葉山も是ばかりは踏違へてゐた。なるほど柳之助は何を爲るのも憂いのである、外へ出る氣も無いのである。然し、彼はその最愛の妻を亡つた、女に於ける唯一人の所好を無くしたのであれば、此上は其心を慰むるには男に於ける唯一人の所好を恃まねばならぬ、その葉山が深切に言ふ事をば、如何にしても背かう道理が無い。葉山が強ひて言ふならば、隨分學校へも出るのである。掃憂とならば葉山と連立つて何所へでも行くのである。

然し、葉山の家へばかりは、柳之助の思案をする理がある。それは自分と地下の類との外に知るものは無い。さすがの葉山も之は知らぬ。知らぬのではない、知らせぬである。知らせぬのではない、知らせることが出來ぬのである。知られては一大事なのである。

我家へ來いと切に勸めらるゝのは、恰も此知られては一大事と衝突したので。何事にも直に考へる柳之助に

は、此際太く考へねばならぬのである。と云ふのは、柳之助は葉山の内眷が大の嫌で、彼は固より多數の人を中の好かぬその中でも最も好いてゐる人の妻を最も好かぬのである。

其好かぬと云ふに就ては、何等の原因も理由も無い、其所が所謂虫が好かぬので。自分の兄とも頼む人の内眷、其を好かぬではならぬ、と柳之助は常に考へる。それで、先方から己を疎みでもするのかと云へば、氣も無い、葉山同樣に實を盡してくれる。其人をば何故に自分は嫌ふのか、と柳之助は始終心に訊ねて見るが、一向理窟は無い。

葉山の内眷と云ふのは、美人ではないが、目鼻立の揃つた、色白の身材の纖削とした、閑雅な、奥樣らしい樣子の人物。若し其短所を擧げたらば、少し寂しくて、無人相で、何を爲るにも極めて不熱心のやうに見える。然かと云つて、萬更義務でしてゐるとも見えぬが、進むで爲てゐるとは猶のこと見えぬ。萬事が機械的で、韵致といふものが無い。恰も其容貌の整つてゐながら何の趣も無いのと、能く一致してゐる。

那云ふ女と能く添つて居られたものだ。と柳之助は常に思ふ。別して、「むづかしや」の葉山が能く彼で滿足をしてゐると、其も亦一件の不審にしてゐる。

凡そ女子と云ふものは、柔に溫であるべきものである。「類さん」は十分柔に溫であつた、と彼は信じてゐる。然るに葉山のお種樣は蠟石細工のやうに、硬くて冷たい。自分の最も好いてゐる者と正反對である爲に、虫が好かぬのであるか、と柳之助は考へもした。

葉山には所謂焦れてゐるほどであるから、毎日でも逢ひたいのである。お種樣を見なければならぬのが否さに、控へに控へて、三度行く所も一度にしてゐる。それでも一週に二度は缺かさず尋ねて行く。其通り隨分足が近いから、氣の着く葉山でも此内秘ばかりは知らずにゐる。

妻には限らず兩箇の居る所に他が來ると、氣先を折られたやうな調子で、柳之助は必ず愼るので、自分と「類さん」との外には打解けたことの無い男であるから、自分の外は内眷にも氣を置くものと葉山は考へて、可成妻をも近けぬやうにしてゐる。

折々お種が少し親しくしかけると愼る。嫌であるから愼るのであるが、葉山は然うとは知らぬから、此男の癖で、我妻も此人には他人であると諦めて、格別尤めもせぬのであるが、奚ぞ知らむ、多くの他人よりも此お種樣を彼は一倍好かぬのである。

常ならば柳之助も言はるゝまゝに出掛るのである。今は此悲哀愁歎の心を拄げて、虫の好かぬ人の所へ行かうとは思はなかつた。けれども葉山は常より熱心に誘ふ。因で柳之助は思案に晦れたのである。

段々責められて見ると、如何あつても否むべき理が無いので、進まぬながらも柳之助は承知をした。其を機に葉山は起たうとする、柳之助は如何しても還さぬ。切つて還ると言へば、泣き出しさうな顏をして寂しがる。其をば捨てゝ還るも氣毒さに、出た火燵へ又入る。又有間して、又還ると言へば又引留める。葉山は悖ぢに二度まで引留められる。三度四度と大概三十分毎に還らうとすれば、斟酌無しに柳之助は左右放さうとせぬ。到頭九時になる。此分では十時が十一時になつても放すまいと察たので、葉山は、酒がもつと欲しいと言出した。柳之助は早速註文通り日本酒を取寄せて出すと、葉山は飲むでは差し、飲むでは差し、無性に差した。

「僕は然うは飲めんよ、迷惑するよ。到底君の敵手は出來んのだから……。」

と後には柳之助も猪口を取らぬやうにすると、

「敵手が無くちや旨くないね。君も獨は寂しいと云つて、僕を引留めたらう。寂しいのは、君ばかりぢやな

い、獨酌も寂しい。君が敵手をしてくれなければもう御暇だ。」

葉山は直に起ちかけるので、然うは飲めぬながら、還られるのが否さに、受ける。知らず識らず酔が廻れば、體が怠くなつて、柳之助は其所に横仆になると、忽ち積日の疲勞が發して、前後不覺の高鼾で、ぐつすりと寢入つて了ふ。

葉山も麥酒の下地に二合未滿も入れたから、大分酩酊の狀で、柳之助の寢入るのを呼びもせずに見ておたが、竟に鼾を搔始めたのを聞いて、面白さうに笑つた。

「やあ、到頭盛潰して遣つた。あゝ、能く寢た。寢るが好い。恁云ふ時は十分に寢て腦を休めるが何よりだ。」

葉山は火燵蒲團を剝いで、柳之助に被けて、

「俺ぢや不足だらう。醉の假寢に何か被けて遣ると云ふのは、朋友の所作ぢやない、俺の爲る事ぢやないが、俺が爲なけりや外に爲るものは無い、喃、鶯見。

いや、成程痩せた！頰が減けて、目も窪むだ。思へば可哀さうなものだ。くの字狀になつて手枕をして、座敷の隅に轉つてゐる具合は、如何しても獨身者だ。細君が亡なつたら何と無く急に不潔なつたよ。可哀さうに、憂身を變してゐる。」

這麼事を考へながら、葉山は悄然と炬燵櫓に倚懸つてゐた。時雨は蕭々と、黑い風の隙漏るにつれて、身顫の出るほど寥寂は外から逼つて來る。其中で老婢が沈むだ〳〵聲して方便品を讀む。

「元は感心に回向をしてゐる。あゝ哀だ。旦那樣は高鼾で寢てござる。實に老少不定だなあ！恁う酒などが出てゐると、細君が居ないとは想はれない。俺でさへ然う思ふのだから、鶯見が寂しがるのも無理は無いか。細君巧くもないのに料理自慢だつけ。俺の顏さへ見りや、飯を食つて行け、飯を食つて行けが病だつた。一度御世辭に茄子の鳴燒を賞めたら、それから毎歲茄子が出ると、鳴燒の御招待だつけ。旦那殿が蹈躪御使者に立つて、今日は君種々御馳走が出來るよ、も罪が無くて可笑かつた。もう來年から彼鳴燒も食へないと思ふと、好い心地はしないものだ。いや未だ有つた、細君得意の早吸物魚煎餅に蒲汁昆布と云ふので、毎々窘らせたよ。當面今晩あたりは、何もございませんでと云ふので、例の金の網の、青漆の椀が出る所だ。あゝ又かと思ふやうだつたが、其人が居なくなつて見れば、不味い物も懷しい。果然、いや、果然、氣が着かなかつたが、今日は俺の「所好な」猪口が出てゐない。貴方は奇つてゐらつしやるからと云つて、變に歪むだ、踏

潰したやうな、赤樂の氣障さ加減の耐らない猪口を出してくれたつけ。是は貴方のだと云つて弄謔半分に始終出した、彼奴が出てゐない。何だか勝手が違ふと思つた。一寸した事が既に恁うだ、驚見の寂しがるのは無理も無い。俺でさへ憶出すと好い心地はしない。」

葉山はほたりと膝に涙を零した。

「懇意にしたものゝ居なくなるのは心細いものだ。俺も來ちや内のやうに我儘を言つたつけ。昨日まで赤い手絡を掛けて大きな圓髷に結つて嬉しがつてゐた人は、もう佛樣になつて了つたのかい。」

彼は目を連瞬いて、洟を啜つた。

「どれ線香でも供げて、御暇としやうか。」

葉山は枕頭に近くあつたランプを遠く離して、

「あゝ、能く寢てゐる。此贏れた顏を見ると不便でならない。今に目を覺したら、又泣くのだ。ぢや、もう歸るよ、明朝待つてゐるよ。」

立起らうとすれば、本箱の上の山茶花に目が着く、葉山は悚然として寒くなつた。燈影の微昏い所に赤い花

の此方を向いた狀は、心ありげに首を延して覗いてゐるやうに見ゆる。葉山は突立つたまゝ其花を眺と視てゐたが、白縮緬の紙卷の端を引出して、窃と目を拭いて、其花入を柳之助の枕頭に直して、

「膝枕だ、膝枕だ。それぢや、然やうなら。」

と言つたが、不思議にも其は彼が常にお類に挨拶をする調子であつた。

（三）の一

夜霽の空は殊更朗に、澄徹るばかりで、習々との風も無ければ、暖さも暖い。肘掛窓の障子越に一面の日影を背負つて、葉山は今朝飯が濟むだと云ふ體で、小楊枝を用ひながら新聞を讀むでゐる。傍には昔噺の赤本やら、鐵葉の喇叭やら、首の無い木馬やら、糝粉細工の鼠が轉げて、ビスクットの食餘が放散飛して、はや男の子が一遊したと見ゆる光景。

徐に襖を啓けて入つて來るものがあるので、葉山は俯いたまゝ、

「おい面白い事があるぜ。難有い、難有い。」

と獨り悦に入つて頷を拊くと、

「何だな。」

と皺嗄聲して、寄つて來て覗く所を、顔を擧げれば、細君と思ひきや、大違の親人。

「おや、御父樣！」　と少しく狼狽る。

「何が那麽に難有い事があるえ。」

と親人は益々新聞を覗き込む。

「何有、難有いと思つたら、何でもなかつたのでした。」

「然か、大層おもしろさうだつたから。」

と其なりにして、親人は何を取りに來たのか、持つて行くものを持つて、出て行く。迹に葉山は吃々笑ひながら。

「昨夜は愁歎で、今朝はお茶番だ。今度お父樣！と言ふと、嘲左衛門が顯れるのだらう。」

「何を笑つて御在なさる。」

果してお種が入つて來る。

「それ御覽じろ。」

「何でございます。」　が眞面目で長火鉢の前に坐る。

是が柳之助の虫の好かぬと云ふ人で。年紀は二十五六、髮毛の勝れて濃い、頸の長い、細面の、色白の、人形的の優しげな顔をしてゐる。秩父銘撰の藍ぽい羽織を着て、下は瓦斯糸らしい。今髮結を返したと云ふ、潤澤と水の垂れさうな圓髷の首を据ゑて、火鉢の火をば見に來たのであるが、獨り笑つてゐるのが訝しさに、目も放さず夫の樣子を視てゐる。葉山は新聞を投出して、

「種々なものだ、離緣するとつて騷ぐ奴もあれば、驚見のやうに可愛くて禁らないのもあるし、又乃公のやうに方々で「やいの〳〵」言はれて困るのもあるしよ。茶を一つ淹れてくれ。」

お種は又行らぬことを云ふ顔をして、茶盆を取出す。葉山は因で拍子拔がして、

「好い天氣になつた。」　と障子の日影を見る。

「夜霽ですよ。」　と急須を取る。

「存じてをります。」　と一番醜弄す。

それでもう細君の方から後は出ぬのである。葉山は自分の肚の中で其後を續けて、獨で可笑がつてゐる。お種は精々と支度をして、やう〳〵湯を注す段になつた。

「御父様の湯呑は？」　と夫が心着けると、

「今し方髭を剃りに。」

「朝ばらからお艶飾だな。」

お種は例のもう後は出ずに、濟して茶を注ぐ。葉山は寢轉びながら其湯呑を受取つて、熟と考へてゐる體であつたが、

「然し、可哀さうな事をしたい。」

と儚さうに太息を吐く。

「何がです？」　とお種は有繋に訊ねる。

「お類さんよ。驚見が可哀さうだ、目も當られない。」

「驚見さんぢや然でせう。珍しい實のある方ですねえ。」

と益昨夜を思出す。

「お類様の事を言出しちや泣くのだらう、氣でも違はなけりや可いと思ふやうさ。那も戀しいものかな。」

「それが本當の夫婦の情合なのでせう。」

此語を聞くと齊しく葉山は趨然と首を擧げた。

「而すると假の夫婦の情合と云ふものがあると見えるな。」

「まあ、有りませう。」

「まあ、有る？」　と葉山は細君の顏を見て、

「公乃なんぞは何方だ。本當の口か、「まあ」の口かな。」

道際贅辯を吐くのは、細君は煩くてならぬのである。何故に己の夫は堂々たる男子であり、一家の主人であり、保の父でありながら、恁云ふ愚にも付かぬ事を言つて喜むでゐるのか、と其が始終氣に濟まぬ。

男子はおのれの父親のやうに、飽くまで眞面目に、何十年にも足を一つ投出した事は無く、可恐い顏をして、威嚴を保つべき者と信じてゐる。既に父親が然である、殁くなつた兄も然であつた、來る客も知る人も皆其通であつた。傍へ寄りでもしたら睨まれはせぬかと想はるゝやうなのが男子、と心に極めてゐたのである。

然るに己の夫は這麼であるのを、常は回慨しく思つてはゐるものゝ、口に出して意見がましい事は出來なかつた。能はざるにあらず爲ざるなりで、自分は母親の父親に對して神に仕へるやうに恭順であるのを見てゐた。人の妻たるものは恁くあれよ、と兩親の語聞かせる所は、恰も母親の行ひに符合してゐた。其をお種は飽くまで手本にしてゐるから、夫は夫たらずとも、妻は妻たる本分を守らねばならぬ、と了簡してゐるので。然かと云つて、微塵も夫を嫌つてゐるのではない、寧ろ自分の方が遙に惚勝つてゐるので、唯此贅辯と眞面目でないの二件は、牛肉は所好であるが膏肉は所惡であると云ふぐらゐの所である。故にお種は務めて此膏肉を避けてゐる。避ける爲に自分は益眞面目になるので、餘り眞面目ゆゑ、夫は些と揉んでやらうで、彌氣輕にする。因で相去ることは益遠くなる。

又出たと思ふと、細君は始の内は好加減に遇つてゐて、それでも止まぬ時には默つて了ふ。すると葉山も張合が無さに、遂には店を仕舞ふと云ふので、毎も落着する。

もはや奥の手の無挨拶を始めても可いのであるが、如何にも聞きたいのは柳之助の事。彼の平生細君を大事にするのは親しく見聞する所であつた。その人がその人を裏つたのであるから、甚麼に哀悼をしてゐるであ

らうとは女の身にしては最も聞きたい所。

「それよりは、驚見樣は甚麼樣子でした。本當に那麼に泣いて御在でしたか。」

「まあ今に來るから見な、可哀さうに痩殺けて了つた。」

「お痩せなすつて？」　とお種は眉を顰める。

「生きてゐる効が無いなんぞと言つてゐるのだ。あゝでも弱つて了ふ。」

「生きてゐる効が無い？」　と彌眉を顰める。

お種は例に無く進むで種々の事を訊ねるので、葉山も諄々昨夜の樣子を話して聞かせた。

有繋に親友の哀な物語をするのであるから、洒落も貧辯も餘り出なかつた。或條は涙をさへ帶びて語つたから、お種も身に浸みて聽いたのである。一々聞いて見れば、なるほど氣でも遂はねば可いが、と氣遣はしいほどであるけれども其は話で、例の夫の話であつて、實際然したる事ではあるまいと疑つた。疑つたではない、實際那麼事があるものではないと思つたから、

「あなた又妄でせう。」

と唐突に抵つて見ると、不意を撃たれて葉山は唯目を瞬つた。

「眞面目の話に妄なんぞを有仰るものぢやございませんよ。」

「何が妄の事があるものか。」

慍つた程に葉山も眞顔になる。それでもお種は未だ疑が釋ぬか、考へてゐる。

「驚見はお前不斷から那麼に妻が〳〵と大騒を遣つてゐたのぢやないか。その妻が死んだのだもの、今の話くらゐな事は當然さ。お前が死んぞつて、乃公なんぞは一滴だつて涙は零しはしない。其處へ行つちや自慢ぢやないが、強いものよ。」

洒落とは思ひながら、洒落にしても情かつたか、お種は不愉な色をして暫と夫を見ると、

「その代心で泣いてやる。」

と直に言つて除けて、獨り面白さうに笑ふ。

「泣かない方が本當です。」　とお種は極めて熱心に言ふ。

「然うか。」　と葉山は些と案外であつた。

「泣くなんて……。」　と益熱心に細君は眩く。

是は變だ、と葉山は容喙さずにゐると、

「本當に那麼樣子なのですか。」

心あり氣にお種は念を推した。

「(本當)の好な人だな。本當なら如何するのだ。

細君は俯いて熟と考へる。

「本當なら考へるのか。」

思案の顔を擧げながら、

「那麼事があるものでせうか。」

と力を入れて訊ねる。

「現在有るぢやないか。」

と言はれて見れば、如何にも現在有るのだが、その現在有るのが不思議でならぬ、と云はぬばかりにお種は

考込むでゐたが。

「餘りのやうですねえ。」　と言出した。

恁云ふ事は希しいので、此細君が話に身を入れると云ふのは、例が少いのであるのに、今日ばかりは極めて熱心であるのを、葉山は如何にも希有に思つた。何と思つてゐるのか、一番試して見やうと云ふ氣で、漸次水を向ける。

「餘りと云ふのは？　驚見が細君を戀しがり過ぎると云ふのか。」

「まあ、然でございます。」

「可ぢやないか、結構な事ぢやないか。「女房に惚れて家内安全」と云ふ言がある。」

例の口吻は又贅辯を始めると見て、

「いゝえ、其事ぢやありません、お類さんのお物故なすつたのを、餘り大騒をなさり過ぎるやうぢやございませんか、私は然う思ひます。男子と云ふものは那麼に女々しいものぢやありますまい。」

「女々しいと云へば女々しいけれど、情合が深いのぢやないか。お類さんの身になつたら甚麼に嬉しか知れ

やしない。」

「嬉くはありません、否な事です。」

と横を向いて、鐵瓶の蓋の埃を吹く。

「これは可笑いね、お前が否だつて、お類さんは如何だか解るものか。」

細君は此方を向いて、

「お類さんも始終然言つて御在でしたよ。」

「何と言つてゐた。」　と葉山は起直る。

言はなければ可かつた、と心を叱つてゞもゐるやうに、細君は愼重なつて火鉢の縁を拭いてゐる。答が無いので、葉山は又訊ねたが、猶且答は無い。

「お前なんぞは寄ると亭主の讒訴だらう。」

巾布を投げてお種は屹となる。

「那麼事を、あなた。」

「然だよ。お類さんなんぞも大方、内のは煩いとか、那麼にやい〳〵言はれるのも迷惑だとか、傍にばかり居られるので鬱々するとか、……」

「那麼事を、あなた。」

「好きな事を言つてゐたのだらう。だから女は罪が深いと云ふのだ。男があれほどに思ふのは大抵の事ぢやありはしないよ。七人の子を成すども女に心を許すなさ。直に増長る奴だから始末に可けない。白い齒は見せられません。」

「それは女ばかりが惡いのぢやありません。」

「それぢや男が可愛がるのが惡いのか。」

「其も可うございます。可うございますけれど、程度があります。男は何所までも男らしく、失禮な事を言ふやうですが、驚見さんのやうぢや……。」

後は有繋に言ふを憚つたのである。

葉山は冷笑をして、

「お前は昔氣質だから那麼事を言つてゐるのだ。此頃は夫婦の情合の深いのと、綾羅紗の合羽が行るのだから爲方が無いよ。」

「昔氣質ですから、私は流行物は嫌ひ。」

「では致方が無い。實は一昨日綾羅紗の變で好いのを見たから、那で合羽を拵らへてやらうと思つたが、然かい、お嫌かい、あゝ殘念な！」

餘り空々しさにお種は苦笑をしたばかりで、更に對手にならぬ。葉山はごろりと轉側をして、天井を仰ぎながら、

「情合が深ければ、深いで增長るし、薄情なら恨むだらうし、浮氣だつたら燒くだらう、亭主となるのも難しいのよ。」

言終つて悵然たりしが、後は煙となる。

お種は所謂しんねりむつゝりであるから、何日にも卻含むことは無い、かはりに、飽倦むだ樣子の見えることも絶へて無い。端然と坐つて、煙草は嫌ひ、茶は嚥まずで、唯閑雅に芝居の御臺所のやうに構へてゐる。

言の寡い性であるから、思ふ事は半分も言はぬ、まして之は他の陰言であれば、飽までも慎むでゐるのであるが、心の中では、鷲見の女々しさを反復々々非難して、見下げ果てた人物だと迄に愛相を盡してゐる。

自分が葉山ならば、叱咤けてやるのにと思つた。又其平生から考へたら、叱咤けさうなものを、何故叱りもせぬのであらう。一所になつて、可哀だ、不便だと言ふのは、例の夫には似合はぬ事と思つた。男子たるものが、如何に悲しいと云つて、十日も十五日も經つのに、今でも殁なつたやうに、それも獨隱れてゞも泣くことか、他を捉へて復らぬ事を繰返して泣立てるとは、それでも男子か、意氣地の無い事だ、恥を知らないと謂ふものだ、とお種は徹頭徹尾不承知である。其に亞いでは、夫も同し意なのが、如何にしても解らなかつた。

内の人は不斷お類さんの事と云ふと譽過つてゐた。自分に對して假意かも知れぬが、左も右も何の彼のと譽めてゐた。お類樣も亦會ふと、自分に向つて、羨ましさうな口吻で内の人を賞揚してゐた。それでお類樣の殁くなつたのを内の人も他人のやうには思はぬであらう、鷲見樣が戀しがつて泣くのを、それほどに言はぬのは、身贔負があるからであらう、と氣を廻して見た。多くの細君は肚に無くても、坐興に一寸口頭で妬く

ことがある。お種は這麼仂な事を曾て口に出さぬ。ではあるまいかと、唯自分で想ふだけの事であつた。此「想ふだけ」の容を葉山は默つて見てゐたが、少し寂しくなつたので、

「太く考へ込むでゐるぢやないか。」

挨拶の毎も緩慢としてゐるお種は、言を練つてゞも出すやうに、口を開かうとする時、婢がばたばたと駈けて來て、餘り機むで、丁と一つ紙門に抵つて、それに懲りたか、惡く徐に啓けると、旦那に譴責を戴いて、はつと思うと、駈付けて來たほどの用事を忘れて、顏を發赭にして、やう〳〵「あの……。」と言出す途端に、「葉山、葉山」と二階で聲がする。

「あの鷲見さんが御出になりました。」

と面目を失つた婢は倉皇に逃げて行く。

「あゝ、鷲見が來たか。でも能く來たな。」

（三）の二

鷲見は二間ある二階の奥の主の居間に、蠟塗の臺子火鉢の火の無いのゝ前に、壓潰れたやうに壁に靠れて、

窄袴の衣兜に兩手を入れて、毎見ても讀めぬ千隆の萬葉假名の額を、別に讀まうでもなく惘然として見てゐると、葉山は昇つて來て、

「如何したい、昨夜は。好く眠られたらう。」

「大きに失敬した。」

と氣の重い顏をして、猶且潰れたまゝの居住でゐる、黑綾モーニングに藍氣鼠の綾の窄袴、紺遍縷の外套の下と釣合はぬほど新しいのを着て、埃だらけの黑の帽子を稍後低に冠つたまゝ。

「何だ、學校へ出る裝束ぢやないか。」

「あゝ今朝墓詣に行つて來た。」

「その歸路かね。」

柳之助は頷く。葉山は背後の茶棚から夕顏の烏府を出して、火鉢の灰を平してゐると、婢が臺十能に火を持つて來る。柳之助は外套の衣兜からピンヘツトを出したが、まづ例の中繪を引抽いて、自分に一寸と見て、

「君、之を見たまへ。」

「何だい？是が如何したのだ。」

「まあ能く見てくれたまへ。」と推付に手渡す。頼まれ通り葉山は手に取つて能く見たが、別條は無い！

其繪はヒンドスタンの婦女が餅のやうな物を入れた盂を抱へて、其一枚を片手に捧げてゐる立姿である。

「能く見て、如何するのさ。」

「解らんかな、能く見たまへな。」

と其繪を覗込むで、後は葉山の顏を眺める。未だ解らぬか、葉山は繪探でも見るやうに、左さま右さま視てゐるのを、柳之助は堪へかねて、

「肯とるぢやないか。」

「誰に？」

「解らんかな、妻にさ、死んだ類にさ。」

と引手繰つて、眤と視る。

「肯てゐるものか。」

と慣れた事とて葉山は呆れもせず、

「氣の迷だよ。」　と言つて聞かせる。

柳之助は頻に首を掉つて、

「いや、肖とるよ。肖とるとも、あゝ肖とる。餘程肖とるぢやないか。」

熟と視てゐながら次第に其繪の中へ曳込まれさうな樣子。

「何が肖てゐるものか。日本人とヒンドスタニィほど差ふよ。」

「肖てをらぬ：善。」　と言ふと、上衣の内衣兜に手を差入れた。何を出すかと思へば、紙に包んだ角な物を、披けば中は細君の寫眞！島田のは見合の時の、束髪と銀杏返と圓髷とので都合四枚。

「見たまへ、肖とるから。」

と其所に並べたのである。

之には葉山も少し驚かされた。何を言ふにも此爲體であるから、悖はぬが可からうと、故と眞摯に繪と比較べて、

「然云へば肖てゐる。一所にして置きたまへ。」

と寫眞と與に紙に包むで、

「肖てゐる、肖てゐる。」

と匆々に還せば、それなり仕舞ふかと思ふと、

「肖とるね、不思議だ。」

と又披いて有間見較べてゐたが、

「此莨は墓詣に行く途で買つたのだ。」

「然かい。」　と葉山は氣の無い挨拶をする。

「然すると之が入つてをつたのだ。僕はゝつと思つたね、路上で出會つたやうな心地がして。それから其莨屋へ、五錢の白銅を出して、剩錢は與れて來た。

それから歸途さ、池の端の仲町を來ると、前面から婚禮の荷が來るのだね。那は皆青い風呂敷を被けるだらう。」

「風呂敷ぢやない、油團と云ふのだ。」

「然し、僕の所ぢや風呂敷に用つとるよ。」

葉山は思はず笑出した。

「そりや襤褸布でも西洋紙になるさ。」

「然か、油團と云ふものかね。那には紋が付いとるだらう。その紋が、妻の紋さ。」

「妻君の紋は何だつけね。」

「それ、圓に枇杷の葉が三枚、妻が能く着とつた鼠色の羽織に。」

「枇杷の葉は異しいね。紋には葉も色々あるが、枇杷と云ふのは無い。まあ何でも可い、妻君と同じ紋か。」

「其時は實に僕は悚然としたよ。今憶出しても、あゝ寒くなる。」

柳之助は身顫をして、徐に俯いた。葉山は其氣色を見て、

「もう這樣話は止さうよ。陰氣で可いけない、陰氣で。」

柳之助は猶凝然と俯いてゐる。

「これさ、又始めたよ。驚見、何だな。」

火鉢に張つてゐる臂を葉山は二三度慴せば、漸く顏を擧げたが、はや兩眼の涙は溢るゝばかり。

「困つた人だねえ。」

と葉山はその肩を丁と搏つて、

「おゝ僕の手巾を未だ用つてゐるのかい。否だぜ、否だぜ。」

と話頭を轉しにかゝる、驚見は其手巾で涙を拭いて、

「少し貸して置いてくれたまへ。僕は手巾が無いのだ。汚れたのは幾多もあるけれど、奇麗にして置いてくれるものは無いのだから。」

何を言つても、其方へ話を引付けて了ふので、葉山は弱り果てゝゐる。

「餘り慳しかつたから、僕は引還して其尾に追いて行つたさ。淺草の方へ行くのだらう、停車場の側を通つて、鐵道馬車の線路の通を何處までも眞直に行つたよ。あゝ氣の毒な、あの人も今に死ぬだらう。彼荷物は何日までも遺つて、其主は直に在なくなつて了ふのだ。考へて見ると、人の命と云ふものは、實は儚い。

昨日まで話をして、笑つたり、慍つたりしてゐたものが、今日は忽ちなくなる。儚いね、吁、儚い！昨日まで睦じくしてゐたものが、もう土になつて了ふのだ。土になつて了ふのだからね、考へて見給へ、假のやうだ！妻などを有つものぢやないね、係累を増すのは一つの悲を増すのだ、僕も妻を有たなかつたら這麼思をせずに濟むだのだ。向者のなども僕のやうな悲のあることを知らんで、結婚をするのだらう。氣の毒な！彼も今に死ぬのさ。」

葉山は思はず八の字を寄せて、

「可哀さうに這樣不祥を付けるものぢやないよ、これからお目度と云ふのに。」

「目出度事は無い、僕が好い例ぢやないか。」

折から次の間に人音のするのを、柳之助は心も着ず、

「實際然だから爲方が無い。人生朝露の如しだよ、僕だつて恁して君と話をしとるけれど、これで何時死ぬか知れやせんものね。」

と言ふ時紙門が啓く。不圖見向けば、婢とばかり思ひしに、内君であるから、慌てた。

彼は此時も机の横に葬れて、片手を火に翳し、片手は窄袴の衣兜に入れて、窮屈に立膝をしてゐたのであるから、お種が顯れると與に閾越に手を支へて、辭儀をするのが唐突であつた。不意を吃ひながらも、呼吸を合せなければならぬので、柳之助は周章狼狽して、膝を正すやら、机の角に背を打付けるやら、兩手を支くやら、頭を低げるやら、其邊を犇かして、辛くも挨拶をした。お種は何處までも沈着いて、

「然ぞお寂くてゐらつしやいませう。」

と兩手を膝に端然と其處に坐る。

「はあ。」　と柳之助も割膝に跽つて、屹と相對ふ。

「先日一寸上りました節は、種々御混雜の中で染々御目に掛りませんで、甚だ失禮を致しました。」

とお種が辭儀をすれば、柳之助も同じやうに頭を低げて、

「はあ。」

「昨晩は又遲くまで御厄介になりまして。」

「はあ。」

「何が御厄介になるものか。」
と葉山は兩箇の照隱に容喙す。
「今日は好く入らつしやいました。」
「はあ、」
酷く柳之助の迷惑してゐるのを、葉山は見るに見かねて、
「あゝ、もう這樣固くるしい挨拶は可止さ。今日は御馳走をする約束なのだから、何か旨い物を。」
と細君の顏を見ると、心得て頷く。柳之助を見ると、下を向いて、窮屈さうに、手持無沙汰さうに、異見でも聽いてゐるやうな、氣の毒な恰好をして跼つてゐる。
「おい、這樣に改まつて居なくても可いぢやないか。膝を崩さないかい、大事な窄袴が傷むよ。」
「驚見樣、どうぞお樂に。」
「はあ。」
「遠慮をする事は無いぢやないか。よう、胡坐を掻き給へ。女房の可恐のは、月の末と、內を空けた朝ばか

りさ。」
「貴方、どうぞお樂に在しつて下さいまし。」
「はあ。」
と上眼でお種を見て、猶且跼つてゐる。
「それぢやお客樣は私が引承けるから、お前樣は御馳走の方の周旋を、此は宜しい、御隨意に御引取なさい、」
細君は一禮して起つて了ふ。柳之助は跡を見送つて、吻と一息吐いたと云ふ體で、主の方に向直ると吃未了の莨を把つて、一口燻らして、墨々と葉山の顏を覗てゐる。
「何を惘然してゐるのだ。」
「君の所には細君が居る。」
「何を行らない事を……。」
と言罷して急に笑ひながら、
「彼も何せ今に死ぬのさ！」

柳之助は忽ち座敷を眺して、

「君の家は明くて可いな。」

「這麼結構な御住居を譽めるのに、明くて可いとばかりは何事だらう。」

「だつて、明いぢやないか。明いから陽氣だ。僕の所は妻の居つた時分は明かつたけれど、此頃は非常に暗くなつたよ。始終薄暗くてね。」

「お類樣が御天道樣ぢやあるまいし、那樣理窟も無いけれど、陰氣にはなつたらう。陰氣になつた所へ君が轉ぎ込むてゐるから、いよ〳〵濕勝なのよ。」

「然だ、全く然だ。」

と柳之助は太く思當つたやうに合點する。

「それだから、僕は此頃は内に居るのは否だよ。内が否になつて了つた。恁やつて餘所に來とるね、然すると他と話をしとる間も、始終内へ歸るといふ樂があつたのだけれども、もう那樣氣は無いな。寧ろ内を忘れて了つとる。些も歸りたくないよ。」

「まあ御寛縱なさいまし。」

と葉山が笑へば、柳之助は太息を吐いて、

「還るに家無しだ？滿らんなあ。」

どつかりと火鉢の角へ頰杖を支くと、直に火箸を把つて、灰を平し〳〵、結晶の圖を散してゐる。お種は又昇つて來て、緣高に菓子を容れたのを、其處に置きながら夫に見せて、

「何か買はせませうか。」

「何だい、有りますものは。粗粉落雁に翁飴、松風が少し、拾聚ものだな。驚見には這麼物は可けない、餅菓子が可からう。」

「餅菓子は否だ。」　と火箸を捨てゝ身を起す。

「それぢや羊羹！然う、那は丸　噬に限ると云ふ君の所好だつけ。羊羹を二棹切らずに持つて來な。」

「妄だ、妄だ。もう彼は行りはせんよ。」

お種の手前少く極の惡い狀で、柳之助は連りに頭を掉る。

お種は、是がお類様を懇しがつて、女々しくも二七日過ぎた今日までも諦めかねて泣く人か、と其様子をば見ぬ風で、なかなか注目してゐる。

果然羸れてゐる、色も蒼白めてゐる、延過ぎた髪は亂れて、髭深い顔は汚れ果てゝ、宛然病後の貌。能く覗ると、内皆に眵が着いて、外套の襟は雲脂が被つて、耳の根から薄墨を塗つたやうな襟垢、もう蛆が生いてゐるのかとお種は氣の毒になつて、傍を向いて了ふ。

「ぢや羊羹でもないのか。」

「うむ、何も要らんよ。」

「それぢや是で辛抱するかい。」

と在合ふ菓子を見せれば、

「それも要らんよ。」

と氣の重さうに机に倚掛つて、又頬杖を支く。

「太く振られたね。」

と葉山は松風を撮むで、吃斷さながら、

「ぢや菓子は可いから、御馳走の支度だ。」

其を聞くとお種は起つて、出際に又一目柳之助を見て行く。迹は對座で、茶を出すと、柳之助は火鉢の彼方に在る菓子を覗いて、

「僕に一箇與れたまへ。」

「おや！」

「一箇！」

「何だ、食べるのかい。」

「食べたくなつた。」

と翁飴を口に入れて、不味さうに咀嚼始める。

（三）の三

春日のやうに照々と暖いのに、火鉢は在る、日照は好し、頭痛がするので、葉山は西窓の障子を啓けた。

澄徹る空は藍でも滴れさうに、何處に一點の雲も無い、唯皚然と富士の白妙は四邊を拂つて、其裾には、此名山の細工屑を捨てたやうに、鹿子斑の山が起伏と續く。何處とも無く長閑に人聲がして、此處彼處に鳥が囀る。折々動く風は日影の熱を冷すほどに輕々と面に當る。

「好い景色だ！」

と柳之助は瞬もせず富士の雪に見惚れて、脊を伸しながら、

「富士は名山だね。好い景色だ。」

「眺めてばかり居ずと、お茱代でも置いたら如何だ。」

「始終恁して富士を見とつたら好いだらうな。」

「終極には風を引くわね。」

「好い！君の家は好いな、僕の家は可かん。恁云ふ所に居たい。」

「居たければ、如何だい、當分來てゐては。」

「此にか！」　と柳之助は目を瞪る。

富士の雪は好い、座敷は奇麗で、陽氣で好いが、唯だ一つ好くないのは、細君が居る！その蟲の好かぬお種さんと同じ家に居られやうか、と柳之助は其で目を瞪つたのである。とは知らぬから、葉山は定めて二つ返事の意で、

「然うさ。」　と輕く頷く。

今更否とも言はれず、何と挨拶をしたものか、と柳之助は窮つて忸怩してゐる。

「單身で爛つてゐるよりは可いよ。見たければ富士を見てゐるさ。當分來てゐたら如何だ、それが可いぢやないか。」

柳之助は益窮る。

「元を敵手に所帶を持つてゐた所が、一向冴えない話だ。然かと云つて、今の所ぢや、今後何爲やうと云ふ計畫も未だ無からうけれど急に後……。」

と言未了て、少し塞つたのは、後を娶ふ事情にもゆくまい、と言はむとしたのであるが、其話をしたらば又氣を惡くせうかと、

「急に後が寂しからうから、賑なことは私の家だ。賑な方が紛れて可いよ。君の家の暗いと言ふのも、畢竟老者を敵手に、上と下とで一人法師だからさ。まあ洒落に一月でも二月でも來て見たら如何だね。」

實意で說かれるほど柳之助は困却を極めるのである。此場に臨むで無下に斷りもならぬ、然て何と言つて遁たものであらうか、と度を失したが、一言でも早く、斷るものなら斷つて了はねば、義理に遁つて出入のならぬ境になると考へたから、妄に急込んで、

「そりや可いけれど、面倒臭いから。」

と不間なことを言出し。

「何爲、面倒臭いと云ふのは此方の挨拶だ。君の方に面倒はありはしない。」

之には柳之助の無會釋も返す辭は無い。多少か間の惡さうな顏をして、

「そりや然うだ。然うだけれど、他の家は矢張窮屈だから。」

「餘り窮屈だと云ふ格でも無い癖に。」

理の解らな過るのを傍痛さうに葉山は苦笑をする。柳之助の心の中は隨分切ない。

「君一人限だと可いけれどな。」

「私が一人限なら、早速驚見樣と夫婦になるよ。」

「實に然うだね、君が女だと可いのだ。」

洒落でも何でも無く、柳之助は眞面目で言つたのである。葉山は手を拍つて、反身になつて笑ふ。

「此奴が雌だつた日には御荷物だ。床の中から指圖をして、亭主に飯を炊かせる玉さ。夕涼よくぞ男に生れたるで、自他の仕合なのだらうよ。」

百方と說いたが、生返事ばかりで、柳之助は決然諾とは言はなかつた。彼此する間に約束の御馳走が列ぶので、葉山も好加減に其話は切擧げて、

「熱い所を一盃。」　と氣を變へる。

有繋御馳走をと云ふだけに、三種も肴核が附いて、中には料理屋から取寄せた物もあつて、未だ後から細君の手料理も出るとは、嬉しかつたが、內君が銚子を控へて待つてゐるのには、柳之助の迷惑は謂ふに謂はれぬ。在なくなつてくれゝば可いに、と其ばかりを念じてゐたけれども、出てゐる方は愛相に出てゐるのであるか

ら、身動もすることではない。餘り言はれるので、前のやうに危坐こそせぬが、胡坐は掻いても、體を硬くしてゐるので、肩は凝つて來る、氣切なくはある、酒も肴も餘所になつて、唯此人が早く起つてくれゝば、其が何よりの饗應に考へてゐた。銚子の替目には起つであらうから、其迄と、柳之助は目を瞑つて辛抱する覺悟で居ると、平生から調子の冴えぬのが益冴えなくなつて、酒を飲むでゐるのだが、金を借りに來たのだか、判らぬやうに憤返つてゐるので、葉山は全然面白くない。

「又異に鎭つて了つたぢやないか。」

と言はれても、柳之助は佛然として返事もせずに、鉢の物を撈つてゐる。素氣の無い、變な人物だと云ふ態で、お種も横から昵と視てゐる。柳之助は姑く忸怩ついてゐたが、矢庭に盃を空けて、決する所あるが如く、

「一盃あげます」　とお種に差した。

お種は驚いて、急に手は出なかつた。餘り唐突で、葉山にも此盃は何だか些とも解らなかつたが、柳之助の酌を爲るのを見ながら笑ひかけて、

「此人は誠に變人でね、どうも所惡が多くて可けないのだ。」

お種は盃を受けたまゝで、

「ぢや其御肴なんぞは……。」

「えゝ、食物の談ぢやない、人間が嫌なのだ。」

柳之助は聞辛い顏をして控へてゐる。細君はなほ此應答には窮つた體で、其人の方を見ぬやうにして、爲う事無しに聞いてゐると、

「甚麼好い女でも、甚麼金持が來ても、取合ない人なのだ、有難い事には私は大相好かれてゐるのさ。お前なんぞは不可方なのだよ。」

是はお種も柳之助も御互に氣の毒で、兩弱に弱つたが、有繋に柳之助は默つてもゐかねて、

「那麼事があるものか、妄です、妄です。」

とお種に向つて慌忙しげに辯る。葉山は圖に乘つて、

「然し、恁やつて兄弟のやうにしてゐるものが、細君に隔てるやうでは面白くない。」

「隔てやせんよ、僕は。」

と柳之助は惱々してゐる。

「だから、以後は手前同様御懇意に願ふやうに……。」

柳之助は困じ果てゝ、ぼり〳〵頭を掻くと、紛々雲脂の飛ぶのが、日向で能く見える。お種は其を見付けて、可笑いにも笑はれず、横向に俯いて口を掩へてゐる。

（三）の四

「其を清く頂戴して、御返盃をするが可いね。何を探すのだ、盃洗？盃洗などは水臭い、それで宜しい。肺病さへ無けりや遠慮には及ばない。」

と夫に急付かれて、

「それでは失禮ですが……雖有うございました。」

と返盃すれば、柳之助は肩を聳して、

「はあ。」　と受ける、葉山が注ぐ、お種が手を鳴す、婢が銚子を持つて來る。柳之助は失望して、いよいよ此内君が動かぬと極つたならば、此方から退くより外は無いから、何とか詭へて、早く還らう、と覺悟を

爲變へた。

旋がて後の君核を取りに行くとて、お種は起つたので、やれ嬉しや、と縛の繩でも解かれた想で、

「僕はどうも窮屈で可かん。困る、僕は困る。」

と柳之助は泣付くやうに言つた。

「何が困るのだ。」

「困るなあ。」　と顔ばかり顰めて、言張ねてゐる。

「何がさ。」

「妻君が居つちや困る！」

と一生懸命に思切つて。

「それほど困るなら引退げるけれど、然う君のやうに、人さへ見りや毛嫌をするのも困るじやないか。何故那様に可厭なのだらう？」

「何故と云つて理由は無けれど、僕の性質なのだから。」

「性質だつたつて、蛇や蛙ぢやなし、同し人間を、然う否がるとは何云ふものだらう。他の者とは違つて、私の家内だ、私の家内だけは切て格別の御詮議に預りたいね。然うでないと、種々不都合な事があるからね。ちと所好になる修業を爲てくれたまへ。然う君のやうに一國でも通らないよ。君は不吃不好だから困る、まあ吃つて見てさ、それで可けなかつたら、遠慮なく吐出してもらはうぢやないか。何も内のお種を女房に持つてくれと言ふぢやなし、高が親交てもらへば可いのだ。可厭にした所が、苦い丸薬を嚥むやうなものさ。その〳〵ねの辛抱の出來ないことはあるまい。」

恁して緋々責付けられるのも辛いが、今にお種が昇つて來はせぬかと、柳之助は氣が氣でない、窄袴の衣兜に手を入れたり、盃を把つたり、手巾を掴むだり、卷莨の箱を潰したりして、急立つ心を萎してゐる。

「然し、如何あつても可厭だと云ふなら、爲方が無い。」

「可厭ぢやない、決して可厭でない！」

「可厭でなければ、御酌ぐらゐに出てゐたつて可さうなものぢやないか。」

「けれども實際僕は窮屈でな。」

「その窮屈が解らないよ。」

此時階子を踏む音がする。柳之助は悚然として、又硬くなる。

「妻君の前で今の事を言つちや困るよ。」

と忙しく呟いて、手の遣端がなさに、空の盃を取つたが、口へは持つて行かれず、置所も無し、持餘して葉山へ差す。

お種は手料理の茶碗蒸を能代塗の通盆に載せて、入つて來て、其處に座るか座らぬに、葉山は吃々笑ひながら、

「おい、嚏は出なかつた。」

柳之助は小くなつて膳の上を突々廻してゐたが、之を聞くと竊しく颯然と起上る。葉山は益可笑がる。お種は中間に介まつて、何が何だか解らず。

「如何なすつたのです。」

と訊ねると、葉山は未だ笑ひながら、

「譴つたのよ。」

「何を御譴なすつて？」

「何有、お前が出てゐると窮屈で困ると言ふから、何故那樣に嫌ふのだ、と怨言を言つて弱らしてゐる所へ、お前が來たのだ。鷲見は何でもお前を引退げてもらひたいのだ、所が、乃公が毎のやうに今日は引退げない、其處へお前が來たらう、さあ極が悪かつたのだ。而して、乃公が又目の前で氣の毒な事を爆然と言ふだらうと思つて、耐らなくなつて逃出したのだ。」

「あゝ然でしたか。それぢや私は下へ行つてゐませう。私が居ると窮屈ですつて？。」

「窮屈だそうだ。」　と葉山は笑ふ。

「ぢや下へ參りますから……。」

「下へ行つたら鷲見を寄來してくれ。」

「何處へ御出なすつたのです？」

「いづれ御下屋敷だらう。」

お種は下りて茶の間へ入つた。姑く待てど、何處からも出て來ぬ。二階で手が鳴るから、早速行くと、葉山は氣の抜けた顏をして、

「如何した、如何した。」

「未だ出ていらしやらないのですよ。」

「長いね。」

「お長うございます。」

「長い！廊下から呼むで見な。」

又下りてお種は廊下から、

「鷲見さん、鷲見さん。」

一向返事がない。お種は考へて、玄關へ行つて見ると、靴が無い！急足に二階へ昇つて、

「貴方、御歸去なすつたやうですよ。」

「何歸る奴があるものか。其處に帽子があるだらう。」

果然帽子は在る。

「煙管が在るし、手巾がある、尤も是は乃公のだけれど。それに彼は茶碗蒸が所好だから、歸りはしない。」

「それでも、貴方、靴が在りませんもの。」

「靴が無い！靴だから歩いて行つた、と云ふ洒落でもなからう。」

坐を起つて葉山も捜索に下りたが、家の内には何處にも居らぬと極つたので、

「それぢや歸つたかな。兜を委いて遁げるとは卑怯な奴だ。臺所の者に聞いて見な。」

お種は婢に訊ねたが、一向知らぬと言ふ。餘り出意表なので葉山も呆氣に奪られて、椽側に突立てゐる。

「貴方、お歸去なすつたのですよ。」

「どうも然だらう。姿が見えなくて靴が無いのだから、まづ確だ。」

「變な方ですね。」

「餘程變さ。」

恁る所に、裏口から保といふ男の子を負つて、豐々肥々した十七ばかりの傅が、後手に買物の包を挙げて、

小聲で童謡を唱ひながら入つて來るのを、お種は誰かと臺所に出て見ると、

「あの唯今驚見さんに其處でお目に懸りました。」

「おや、然かい。」

「内へ行つたら宜しくと有仰いました。」

「まあ、然かい。」

之を聞付けて葉山も出て來る。

「何だ、宜しくと言つた？宜しくも無いものだ。」

傅は捷くも驚見に就いて事有りげと見て、一廉忠義の氣で、

「あの、お帽子も冠らずに蹤躡行らつしやいました。」

（四）の一

お類に死なれてからの所帶は、火の無い火鉢のやうに、柳之助には堪へられぬ侘しいものになつた。おのれの家に居るよりは、外に居る方が、氣が霽々として、幾分か浮世の頼あるやうに覺える。好い朝日和に墓詣

をした往復と、葉山の二階座敷で酒を飲むだのとで、其を經驗したに就けて、外は何處も明くて陽氣なのに、内は陰氣で暗いと云ふ事を悟つたのである。

閉籠つて居るよりは、出るが勝だ、と考へた矢先へ、學校から人が來て、出勤を促されたので、出て見やうと云ふ氣になつて、明日からでも、と受けて還したのは、葉山の座敷を逃出した翌日の午後である。

其日になつて見ると、鼻の頭が挽るやうな風が颯々吹いて、衣類を着更るのも可厭な、洋服は格別寒い日和であるので、忽ち氣が挫けて、九時頃まで炬燵に入つて、遲々と竦むでゐたのである。

毎ならば、お類が早速昇つて來て、「さあ、貴方」と憤れッたさうな聲をして、窄袴を持つて傍から逐立てるやうに爲るのだと考へると、「さあ、貴方」と云ふ聲が遽に耳に附いて、聲に就く前に珍しく、所惡であつた圓髷に結つて、却つて可愛らしく若復つた笑顔が、隱顯と目に見える。

那麼顔であつた、這麼風をしたと憶出すほど、憶出す事が多くなつて、懷慕が胸一杯になる。幾許懷しくても、もう逢はれぬ、逢はれぬほど彌々懷しい。實に此懷慕は柳之助の身にも世にも換へられぬのである。彼は月給を富の其の月暮で、十圓の餘裕も無い、が、若金力で自由になるものならば、如何なる艱難をしてな

りとも、それだけの金額を積むで、再びお類を此世に活したいと念ふ。吁、死は君王の貴きにさへ詔はぬ！

定業は終に移すべからず。人の死んだのは紙のめらくと焚へて了つたのと同じ事で、呀といふ間にもう回復がならぬ。お類は赤土に埋まつて、恁してゐる間に漸々朽つてゆくのであると思へば、無情さも情無し、氣も亂れるばかりに失望が劇くなる。

這麼可厭な、寒い日に學校へ出て、五時間も勤めて、それで何になるのだ。類さんが生きるではなし、何を思出に働くのだ！

「呀、滿ちん、滿ちん！」

と張合が拔けて、そのまゝ委靡と仆れて了ふ。

仆れて仰向になつて、大きな目を開いて、考へるのは、お類の事ばかり。旋ては悲くなつて、胸が逼つて、涙が流れて、拭かずにゐれば氣味惡く冷々と頰を傳はる、拭けば後からくと出る。氣が閉ぢて、謂ふに謂はれぬ苦惱を覺えるので、其の淺に無理酒を引被つて、睡る。

睡飽れば、座敷を運動して、其も直に飽れば、椽に出て、空を眺めて太息を吐く。是が柳之助の日課であつ

で、其次日も、又次の日も、此爲體で過したのである。

酒の無理と、炬燵を離れぬのと、寢てばかりゐるのとで、胃と腦とを害して、追懷の悲哀の外に柳之助は一種の氣鬱を發して、益おもしろく無い心地になつて、病衰けた顏をして忡々としてゐるので、老婢は一方ならず心配した。何とか氣の引立つやうに、と始終念ひながら、其間に主從の隔と云ふものがあるので、左右に思ふやうに行かぬ。せめて自分が姨でゞもあるなら、那も恁も言ひたい、爲せたい事はあるが、傭人の身であつて見れば、立入り過ぎた事もならず、遠勃思ふばかりで、從來染々話などを爲たこともないのに、急に傍へ行つて心易く世話をするのも異なものと、差控へ勝にしてゐる。柳之助も話などを爲るのは疎しさうに顏を合すれば、

「寂しいなあ、元。」

とは能く言ふが、其外には何も言はぬ。他を見ると、沈思の邪冤になると云ふやうな樣子をして、如何にも取付端が無いから、元も用が有つて二階に昇つても、其が濟みさへすれば直に下りて了ふ。後は上に一人、下に一人、折々がたりみしりと云ふ音が二階で爲れば、下では偶に咳嗽をする聲の外に、人氣は無くて、外

には每日元氣好く風が吹く。

傍い〳〵と悶へながらも、過せば過される日で、明れで三七日の朝、柳之助は餘所行のモーニングコートを着て、太い籐のステッキを提げて、瞳瞳と墓詣に出た。

道の氷は硝子を踏毀したやうに、兩側の屋根の霜は的皪と輝いて、習との風の有るでも無いに、寒氣は意地惡く骨身に浸みて、眩い日光も纔に色ばかりで、些の熱も無いが、爽々した霜日和に町は自から景氣付いて、蕎麥屋の門に干してある杉箸の山も、藥舖の軒に並ぶ金看板の炫燿も、現金掛直なしの日除を洩れる友禪メリンスの掛切も、何と無く榮々しく氣を有つてゐる。

目は種々の物を見るのと、耳は雜多の音を聞かされるのとで、うか〳〵と思が紛らされるのに、新しい空氣には裹まれ、華かな日光を浴びて、賑しい往來の中を行くので、柳之助も我を忘れて歩行が果取る。

此町通を二町ほど來ると、唯有る角に一軒の花屋がある。店の外に葬禮の贈花が四對立派に仕上つて、內には四人掛で殘る一對を精々と拵へてゐる。

お類は花を活けたので、此店が買付であつたから、柳之助は今日の手向の花も此で買つて行かうと爲たので

あるが、之を見ると有繋に不快を感じて入るも可厭になつて、五六歩行過ぎたのである。此先の横町には未だ一軒大きなのが在るが、此が好いと云つて、類さんは贔屓であつたから、此で買つた方が佛は喜ぶであらうと、思惟して、竟に直と入る。

狹い土間に四人も仕事をしてゐるのであるから、足も容れられぬ。閾の上に靴の頭を踏懸けて、

「おい、花を與れんか。」

と内を一目眴したが、並むである花溜には屑のやうな物ばかりで、何も無い。主は椿の枝をぱちりと剪むで、

「今日は如何うも御氣毒樣で。」

と此方も向かず仕事に掛つてゐる。

「花は無いのか。」

「へい、今日は……」　と益取合はぬ。

「其處に在るぢやないか。」

柳之助は土間に轉してある莚の南天をステッキで指せば、

「是は御註文で、」

「少し賣つてくれ。」

「どうも然は參りません。此先の横町に花屋がございますから。」

「我家ぢや始終お前の所で買つとるのだよ。」

「へい、どうも毎度難有うございます。」

「其南天を二枝と、水仙を少許賣つてくれ。」

「是はお上げ申す譯には參りません、此花に用ふのですから。」

煩いと云ふ氣色で、主は拵へてゐる花の陰へ廻つて顔を見せぬやうにして了ふ。

「賣れんのか。」　と柳之助も佛然とする。

「へい。」　とばかりで、後はぢやきり〳〵と鋏の音ばかり。丁稚や手傳は連に柳之助の顔を見て、惡く默つてゐる。

柳之助は主の隙してゐる顔を搜出しては睨付けて、姑く動きもせねば物も言はずに店の内を眴して、又主を

睨付けて、ふいと此を出ると、忽ち悪口でも言つたらしい語が聞えた。

柳之助は益憤懣して、跣るやうに足疾に急いで、横町の花屋へ行くと、其處は倍も店が大きくて、世辭が好くて、代物も山のやうにある。思ふまゝの南天と、水仙と、椿もあつたから椿も買つて、寒菊もあつたから寒菊も買つて、前の口惜紛れに阮と買つて、それで胸の霽れたは可かつたが、片手に餘るほど有るのに、南天の實が悪く揺々して、急ぐと落ちさうで、歩き難いこと夥しい。平生腕車を好かぬ健脚の柳之助も、二三町行くと大きに持扱つて、已むを得ず、乗らうと決した。

車夫は寄つて來て、谷中までの直を言ふと、不論不當であつたから、柳之助は其三分の二に直切れば、もう三錢遣つてくれ、と六七間も跟いて來るのを、其で乗らうか、乗るまいか、と生返事をしながら遇つてゐる側へ、一臺の腕車が駈けて來て、叱飛ばすやうに聲を懸けた。

見ると、若夫婦の合乗。仕入の外套を着て、遊獵帽を横冠にして、濁黒い顔に眉と髭の歴々と濃い、眼光のぎよろりとした男が、大圓髷に結つて、水色縮緬の羽織の衣紋が抽けて、半分肩を出して、眞白に拙く塗つた、赭面の橙腴理の毒々しく太つた細君に幅をされて、危さうに推付けられながら、其肩頭へ手を廻して

ゐるのが、劬つてゐるとよりは、取着いてゐると見える恰好で、細君は悪澄に澄してゐるのに、夫は獨欣々として話をしかけてゐるのである。

慌てゝ避ける機に、柳之助は手に持つ南天の枝頭を否と云ふほど其車の輻に擦られて、はつと思ふ間に、最も大きい二朶は引斷られて轍の迹に滾つた。車は委細管はず一間ばかり行過ぎる。

「おい、待て！」　と柳之助は覺えず呼止めた。

車夫は歩を緩めて首を捻向けると、車の上の二人も一樣に顔を揃へて見返る。其三つの面を柳之助は一つ睨むで、

「失敬ぢやないか。」

「何が失敬だい。」

と車夫は憎々しく言返して、なほも對手になる氣か、足を住めたのである。

柳之助は一時赫と急立つたが、車夫風情と爭ふとは、我ながら餘に仂ない、と思飜して口を噤むだが、道に落ちてゐる南天の朶を見れば、有繋に口惜くも情無くもある。

「間抜めい！」

と言捨てゝ車夫は大急に横町へ曲つて了つた跡に、無念を怺へて柳之助は茫然立つてゐたが、旋て落された二朶を拾つて、外套の衣兜に入れた。

直を付けた車夫は此時又勸めるのを、

「要らん。」　と言つたのが、其氣でも無かつたが、極めて慳貪に、前の車夫を極付けるやうな調子であつたので、

「要らなきや止せ！」　と同し調子で車夫も返した。

柳之助はステッキを揮回して、大胯に此を立退いたが、途上考へれば考へるほど、折角の花を疵物にされたのが無念で〳〵堪へられぬのである。

車夫風情と爭ふのは如何にも仂ない。仂ないには違無いが、尋常の花ではない、佛に供へる花を這麼にして置きながら、一言の謝罪を爲ぬのみか、間抜と言つた！彼頑桁を此ステッキで撲つて〳〵撲曲げてくれなかつたのが遺憾だ、と今になつて見ると、爭はなかつたのも殘念で。車夫の無禮に亞いでは乘つてゐた奴等

の無禮！彼等から一言の挨拶は有つても可然のである。

第一、彼夫婦は如何であらう、醜態極る！類樣が見たら何と言ふだらう。我家の裏に居る巡査が、何處へ行くのか、折々艶飾して夫婦連で出るのを、類さんは見ては、始終可厭だ、可厭だと言つて居たが、其樣子は今の奴等に能く似とる。

人も有らうに那麼奴等の車に、類樣に供へる花を體無しに爲れては、實に恥辱だ。我が忍んでも、類樣の性質として、那樣汚れた物は見向もせん――那樣物は又持つて行かれもせん、と拾つた二朶を地に投付けて、持つてゐる束の中から南天の枝は引抽いて棄てゝ了ふと、遊むでゐた三人の女の兒が我勝に駈寄つて、

「小父さん、これ要らないの？」

と聲を懸けるのは、祖母樣の禰で乳兒を背負つた年長のお葭盆。その間に慈姑の把柄に赤い切を懸けた六歲約のは、枝付のを擔いで、

「やあ、南天だい、南天だい。」

と獨先に駈けて行く。他の二人も喜ばしさうに殘らず拾つて行くのを、柳之助は我を忘れて見てゐた。

又後から車が飛して來る。今度は聲を懸けなかつたけれども、柳之　の方から聞着けて、顔を振向けると、前の車は、藤鼠の頭巾を冠つた所は高島田らしい、金縁の眼鏡を懸けて、白茶地に疎い飛形のショールを着た娘を載せて、後の車は、圓髷に結つた、四十五六の氣禀とした、口喧しさうな、豐腴の、赤光に光つた、其母親と見える。鼠ぽい毛絲の機械織のショールを絡つて、車も稍古りたのに乘つてゐる。

「おや！」　と後の車から聲を懸けて、止れと命じながら五六間曳れて行くのを、

「やあ！」　と柳之助も帽を取つて、足早に追ひかける。

藤鼠の頭巾は遙に行延びたのを、後の車夫がおい〳〵呼むだので、漸く止つて、今引返さうとする時、柳之助は後の車の側に立つて挨拶を始めた。

「好い所でお目に掛りました。」　と車から言へば、

「何地へ？」　と柳之助は訊ねる。

「お宅へね、上らうと思ひまして。」

「あゝ、然でしたか。」

「お島も御墓詣がしたいと言ひますから、連れまして。」

「はあ、其は。それぢやもう墓詣はなさいましたか。」

「いゝえ、御一所にと思ひましてね、家から直に參りましたよ。」

前の車も引返して來ると、お島は頭巾を取つてゐる。色の白い、髪の薄い、目鼻立の發揮として賑かな、姉のお類よりは容色勝との噂であるが、小軀で痩過ぎた所は、何と無く霜朽てゐる。

シオールを後へ取ると、小豆色の縮緬の羽織に御召縮緬の裏裏の二枚襲、空色の紅入友禪の襟を懸けて、海老茶に瓦盡の糸錦の丸帶。玉入の繊い指環を穿めて、髪の飾は、本甲蒔繪の政子形の櫛に、モール細工の前挿、後は金被の透彫の玉に松葉形の鼈甲脚、金被の管根掛をして、結立ではあるが、髪の薄い所爲か、髷の座が悪くて、どうやら島田を假りて載せたやうに見える。笑顔をすると、齒の黑いのが一寸見えて、片靨が入つて、透徹るやうな聲で、物言の人懷しげな、孰かと云へば羞含まぬ質であるが、途中の不意の所爲か、物も言はずに、重くるしく會釋したばかり。柳之助も同じく默然で、極を悪さうに挨拶をした。

「これから墓詣に行かうと思つたですけれども、歸りませう。」

「おや、なるほど大相にお花を。」

「まだ南天の好いのがあつたです。」

と口惜しさうに言つたが、其を如何したとも母は訊ねなかつた。

「それぢや折角御出掛のところを何ですけれど、お墓詣は明日でも御一所に。」

「はあ、今日は止します。止した方が可いです。私は後から參りますから、貴方は御先へ行つて下さい。」

「貴方お車は？」　と母親は訊ねる。

「私は車は所惡ですから。」

「それぢや、失禮ですがお先へ參ります。その御花は持つて參りませう。」

「あゝ、然ですか。」　と母親へ渡さうとすると。

「あの、私が持つて參りませう。」

とお島が車を寄せるので、柳之助は其方へ渡すと、例の笑顔して受取る。二臺の車は再び軛を正して一散に走出す、迹から柳之助は片手を袴袴の衣兜に入れて、ステッキを敵手に蹣跚と歩いて行く。

（四）の二

此日來老婢は鬱々して、病人の枕頭にでも附いてゐるやうに、心配やら陰氣やらで精を疲らしてゐる折から、思懸けぬ今日の來客には、雲霧も一時に霽れて御日樣を拜むやうな心地がして、華美な縮緬の文色に薄暗い座敷も急に明くなつて、聞いてさへ元氣附く、母親の冴々とした高調子、元は何か無しに飛立つばかり嬉しくて、物も手に付かず、ちやほやと待しながら、座敷を出たり入つたりする毎に、

「好くまあ入らつしやいました。」　と幾度言つたか知れぬ。

お島母子は八疊の間の殆中央に四邊を拂つて端然と置物のやうに並むで、手爐は出たが、茶の出ぬ内は、極が付かぬと云ふ趣でゐる。

「お前さん單身で然ぞお困りでせう。私もね、旦那が那云ふ樣子だつたから、如何して御在かと思つて、其ばかりが氣になつて、一寸來たいと思つてゐると、此間から内の家翁が風を引いて、久しく寢たものですからね、手放されなくて。」

と母親は莨を吃ひながら、隣の茶の間の隅に茶碗の音をさせてゐる老婢に話しかける。

「おや、其は如何も。それでも、もう全然御快しうおらつしやいますか。」

と其邊を啓散して何か搜してゐると、お島が入つて來て、

「つまらない物ですが、」　と最中の折を出す。

「おや、まあ如何も！」　と推戴いて、

「奥樣お土産を、どうも難有う存じます。」

旋て茶を調へて持つて出ると、

「手の無い所を、もうお管ひなさるな、お客樣ぢやないのだから勝手に何しますから。」

「いゝえ、もうお管ひ申す所ぢやございません。奥樣が御物故遊ばしてから、眞にお宅は全で闇でございます。私は此通老衰れて役には立ちませず、旦那樣は毎日蔣いでばつかりゐらしやる、もう〳〵、貴方、陰氣で〳〵、ちと御保養でも遊ばしませんと、御病氣が出ませうでございますよ。」

「困つたものですね。學校の方へは毎日……。」

「いゝえ、此間學校からお人でございましたけれども、其後未だ一度も御出掛が無いのでございますよ。而して唯毎日蔣ぎ通して在つしやるのでございますから。」

「困つたものですね。」

と考へながら吸殼を擊くと、莨入の傍に飛んだのを、お島が見付けて始末をするも知らずに、母親は熟と考へてゐたが、

「私が都合が出來ると、些と來てゐて世話をして上げたいのだけれど、内も無人でね……。」

「然やうでございませうとも。」

話の途切れる折から、門の外に靴音がする。

「おや、お歸りだ。」

と母親は居住を正す、老婢は起つ、後からお島も出迎に起つたが、格子の啓く音に興に逃込むで來て、口を掩へて吃々笑ふ、

「何んだね！」

と母親が可恐い顏をする時、玄關で男の聲、

「あゝ、別にお變りも有りませんか。」

聞くと母親は呆氣に奪られた。お島は小さな聲で、

「戸籍調よ。」

「おや、然かい。」

（五）の一

柳之助も歸つて來て見ると、元が一人で子然としてゐる平生よりは、内に歸つたらしい心地がする。

彼が此姻家の母親に對する感情は、固より多少の遠慮や隔の無いではないが、自分の可愛がつた類樣を可愛がつて、間接に自分までも始終世話になるので、左も右も餘所々々しくは思はれぬ。今後の所帶の始末に就いても、半分は葉山の意見、半分は此人の了簡も聞かねばならぬ位には考へてゐる。

其は單に感情の上から、柳之助が然うまでに考へたのであるが、事實は最一層然うなければならぬ理になつてゐるので。例へば、家政上經驗の無いお類の手には餘る事が毎々あつた。その都度母親を呼立てゝ、力を藉りる事もあれば、相談を懸ける事もあり、陰ながら其保護を受けてゐたのである。獨り何時でも呑氣な柳

之助は、米の値も知なければ、膳の魚の名を聞くでも無く、月々お類に扶持を宛行つて、日々に其又宛行扶持を受けて、所帶向の事は一向御坊樣であつたから、お類もお坊樣は敵手にせずに、母親ばかりを頼にして、萬般賄つてゐたのであるが、那樣事も柳之助は悉しく知らずにゐたのである。

内證に恁云ふ關係があつたのであるから、驚見に歸いだ娘なれば、既に歴とした一家の主婦である、赤い切掛けた島田の内とは違ふものを、母親は猶且内に居る娘が親類へ泊にでも行つたやうな氣で、昔に變らぬ愛情を有つてゐた爲に、折々お島から怨言を云はれて苦笑をした事さへある。

故に其關係から謂はうなら、驚見は桃瀬（お類の生家の姓）の別家と云ふ狀で、會計上の關係こそ無かつたが、其他の一切は、春は延餅の厚さから、夏は浴衣の見立、夜寒に風を引かせ申すな、炭は廉いのがあるから買つて置いてあげた迄、事があれば、「阿母さん、阿母さん！」であつた。憚も無く煩く面倒を見させられるで、子は可愛い、母親はいつまでもお類を子供のやうに思つて、其子供に世話される柳之助は、子では無い他人では無い、則ち婿といふ一種の可愛い所のある、有繋に便に思はるゝ人、其人は、無邪氣一方の、お坊樣が成人して配の生へたばかりのであるのが、却つて恁云ふ地位に居ては最愛がられて、「小才な浮露の

よりは、藝さへあれば男は彼の方が可いのさ。」と母親は常に言つて、漆は剝げるが、生地は剝げぬ、いつも柳之助の同じなのを、第一の取柄にしてゐる。

實意で訴へれば必ず實意で受けてくれる、信に人の親らしい、と夙て柳之助は此母親を信じてゐた所へ、お類の病中の世話から、續いてその亡後の始末まで、身一つに引受けて、而も自分と同じやうに悲むで、同じやうに泣いたのを見てからは、いと〻頼しく思ふ人の、今日來たのは、何にも換難く心嬉しいのである。

嬉しくは思ひながら、口頭に出しては言得ぬのも、母親一人ならば未だしもなれど、お島と云ふ例の他人が傍に居るので、氣屈さうに柳之助は墨々してゐる。母親は前から話の内も浸々柳之助の顔を視てゐたが、

「何處ぞ御不快のですか。」と竟に訊ねた。

私もさう思つてゐたと言ひたさうな顔で、脇正面からお島も眤と目を着けてゐる。

「いゝや、別に……。」

「然うですか、大變お痩せなすつたよ。」

氣遣しさうな目をして母親は益眺める。

「お痩せなすつてねえ。」とお島まで言出した。

「毎日どうも不愉快で……可けません！」

と言ふのを待構へてゐたやうに、母親は、

「その所爲ですよ。」と一も二も無く言へば、果然言中てられた風情で、柳之助は返す言も無い。

「而して内にばかり御在なさるのは可うございませんよ。未だ御出勤をなさらないさうですけれど、外へ出ると氣が紛れて、却つて好いものですから、お可厭でもね、無理に御出勤はなさいましよ。又餘り長く休むで御在では不可のでせう。」

「何有、それは病氣屈をして置いたですから。」

「だつて、病氣でもないのに病氣屈をして遊んで居ては、酷いぢやありませんか。」

お島は一寸笑ふ。

「皆行るですよ。」と言ひながら眞面目の柳之助が可笑いとて、お島は又一寸笑ふ。母親も生眞面目、

「他は他ですはね。身體の爲にも良うございますから、奮發して出て御覽なさいまし。」

「それは出やうと思ふです……。」

「思ふばかりぢや可けませんね。」

外に所在も無いので、お島は又笑ふ。

「思ふですけれど、朝になつて、行かうとすると可厭になつて……。」

「それぢや何にも成りませんね。」

「如何か爲やうは有りませんかな、毎日寂しくて、寂しくて、實に居ても起つても在られんですがね。」

「元とも其話をして居たのですがね、それは今迄居たものが急に居なくなつたのですから、然うでせうとも。」

「實際然うです。」　と俯き勝の顔を柳之助は屹と振擧げる。

「私が内の方が手が放されると、當分の内でも來て居て上げたいのですけれど、何分にも……。」

「それは好いですな！來て居て下さい。可いでせう、好いですがね。」

乘地になつて柳之助は頻に膝の前むを覺えず、爲に母親は膝頭の痛いほどぐい〳〵手爐を推付けられながら、心靜に思案をしてゐる。

「お内の方は如何かなるでせう。」

「如何もねえ。」　と母親はお島と見合ふ。

「然うねえ。」　とお島も瞬すばかり。

「何とか考へませうけれど……。」

暫く姿の見えなかつた元が突然出て來て、

「さあ御掃除が出來ましたから、何卒御二階へ。」

柳之助は先づ案内に起つ。母親とお島は續いて椽に出ると、柳之助のコートの襟が歪みなりに折れてゐるのを、お島が見着けて、

「あの、襟が。」

と心着けると、一寸正したのが、猶可笑しく歪むだので、お島は寄つて、整然と正して、次に肩の雲脂をば持つてゐる絹の手巾で二つ三つ拂へば、媚かしい香が鼻の頭へぱつと立つ、柳之助は忽ち思出して、階子を踏むさへ氣の無さうに、づしりぱたり、づしりぱたり。

「何にしろ、恁して家を有つて御在なのに、世話をしてあげる人が無くては、信に不都合ですねえ。」と、其ばかりを母親は切に苦にする。

「不都合ですとも！然し、唯不都合だけなら我慢は出來るですけれど、寂しくて、寂しくて、内に居られんですな。始終類の事ばかり胸に浮むで、考へれば考へるほど氣が蒸蘊して來て、奈何したら可からうと思ふです。今日なども恁やつて貴方が來て居られると、何と無く類が今に昇つて來るやうな心地がするですね——死んだとは想はれんです。」

故と他を見てゐる母親の目には零れさうに涙が一杯になつてゐる。柳之助は怀情無く前から滴々と落してゐるので。お島は未だ然ほどでもないが、他の泣くのを見てもゐられず、愁然と俯いて、どうやら身に浸みる氣色。

「病中は非常に貴方が世話をして下すつた、私の心配も非常でした。吁、然し死んで了つたです！死んでくれては實に困るです。私は這麼困つた事は無いです。種々未だ用が有るですのに……もう一遍逢ひたいですな。」

と破れたやうに柳之助は泣出す。

「もう〳〵其話は舍措ませう。貴方も諦めて下さい、よう、過ぎた事は爲方がありませんから。何でも氣を引立てゝ、身體が大事ですよ。つまらない事を考へて病ひでもすると可けません。」

まだ〳〵泣きたいのを怀へて、母親は涙を拂つて見せる。

「類の事を考へてゐながらも、今日のやうに貴方がたが居られゝば、未だ幾分か心強いです。唯一人で考へ出す時は、實に其は耐らんですね。」

「ですから單獨は可けません。」

又母親は單獨で置かぬ工夫を案じてゐる。

「貴方に當分泊つて居つてもらふ譯には行かんですか。」

「それが、ね……。」

「然うすると非常に好都合ですけれど。」

「それでは、ね……。」

とやう〳〵母親が言出すと、柳之助は勢好く話の方に顔を向ける。

「如何にか都合をして何しますから、明日はまあ御墓詣をして、明後日から學校の方へ御出なさいますか。」

「出ませう！」　と柳之助は一層勢付く。

「お出なさる？なら左も右も都合をして、……。」

「來とつて下さるか。」

「えゝ、可うございます。」

「これは難有い！」

まづは愁の眉も展びて、菓子が出る、旋て午餉の膳が出る。是から日の暮れるまで唯坐つてゐるのも退屈、幸ひ天氣は快し、珍しく然ほどは風も起たぬから、明朝と云はず、今から墓詣をしては、と急に話が着いて、一時といふ頃、三臺の車を聯ねて、谷中へ走らせたのである。

上野邊の一寸した所で晩の支度をして、點燈頃に歸つて來たが、その夜は久しぶりで二階の灯も下の灯も嘸かに、臺所も靜に絲き、闇の木戸の開閉も聞えて。それが一時鎭ると物の響は幽しい琴の音となつて、糸の調が絶えれば話聲がして、話聲が歇めば乂爪音が姑く續いて、十時前まで閑かに歡樂を盡す氣勢がした。

（五）の二

翌日柳之助は途に出勤したのである、すると直に母親は、お島は新聞を用意して、是から冬籠をする氣で、炬燵に火を入れてゐる。

「可けませんよ、それ所ぢやない、さあ〳〵用が有るのだ。」

と突如に急立てられて、迅雷耳を掩ふに遑あらず、お島は火箸を持つたまゝ、

「何？」　と長く引張つて、其間瞬も爲ず母親の顔を視る。

「掃除するのだよ。」　母親の急くほど、

「何處の？」　とお島は猶落着く、落着く譯ではない、餘程吃驚したのである。

「大掃除をして、此二階を奇麗にするのだから。」

「此二階の掃除？」

何だかお島には全然理が釋らぬ。

「何故、阿母さん。」　と依然急かずに訊ねると、母親は益落着きかねて、

「何故でも可いから、早く支度をおしな。」

お島は悔しさうに折角入れた火を堺けて、憤れたさうに立起つて、怨めしさうに母親を見たのである。掃除を爲ろなら爲もせうが、始の約束が、御墓詣に來たので、お客に來たので、泊に來たので、何の爲に好い衣頻を着て、髪を結つて、御土産を持つて來たのであらう、如何考へても、他の家の掃除をしに來たのではない！

親の言ふ事ではあるが、お島は不服であつた、が不服とは言得ぬから、

「この寒いのにねえ。」　とばかりて、母親が傍で精々と身支度するのを棒立に立つて拜見してゐる。母親はぐいと一つ下緊を緊めて、

「さあ、よう、寒いことがあるものかね、阿母さんさへ恁云ふ勢だ。」

「好い勢ね。おゝ、寒い！」　と袖を重ねて身を竦める。

「早くお爲なね。」　と少し睨まれて、漸くお島は友禪縮緬と黒繻子の晝夜帶を解始めると、母親が、

「寐衣を持つて來て、その上へお端折り。」

故と彼方を向いてお島は返事も爲ずに、出來るだけ其だけ遲々してゐる。其間に母親は支度をして了つて、忙しげに下りて行くと、迹はお島の獨舞臺。最初の所作は、其處に解いて置いてある帶揚を故々取つて、放付けて見る。それから、くるくると帶を解いて、又放付けて見たが、是は根から郤含なかつたのである。

「此寒いのに、他の家へ來て掃除なんぞを爲なくても可いのに！」

「お島や、お島！」　と階子の口から母親が喚ぶ。

「何？」

「下へ來てお着替へ。」

餘り捂いたら呵られやう、と有繋に其も可恐に、お島は帶と帶揚を抱へて、旋て下りる。

程無く三人繋つて推寄せたりと云ふ勢で昇つて來たが、いづれも効々しい襷懸の手拭冠、箒に拂塵、バケツトに雑巾、塵取等の得物を面々用意して、先月棚を始めて、座敷中の道具を順繰に椽へ運出して、煤掃ほど

の掃除を始めたのである。

四邊に出ておるお類の筐のやうなものは盡く取片附けて、從來老婢の手の屆かなかつた不潔をば刮去るやうに綺麗にして、天井裏も拂へば、疊も拭く、散かして在つた道具を秩序好く据直して、障子の硝子を磨いて、次に火鉢の灰も篩つて、午まで係つて三人とも委靡して、お島は在合ふ椅子に倚れて奄々いつておれば、母親は平坦と坐つて息繼の莨を吃しながら、相對して少時は語も無かつたが、一杯に射入る日影に座敷は輝くやうで、劃然と隅々も際立つて、列ぶものは列むで、納る物は納つたので、廣々としたのを、

「ねえ、お島、見違へるやうになつたぢやないか。」

と樂しさうに母親は眴す。

「此座敷こそ仕合だけれど、お客は災難だわ。」

午後には下も略と掃除をして、一通片付いた所へ、柳之助は精々と歸つて來て、何も知らずに内に入ると、

間違へて他の家へ飛込むだか、と疑はれるほど綺麗になつておるので、

「誰か今日來るのか。」　と偶然元に訊ねると、訊ねられた方が却つて希有な顏をして、

「何でございます。」

「客でもあるのか、大相綺麗になつたぢやないか。」

之を聞くと元は思はず笑つたのである。

「面白い事を有仰います！貴方が旦那樣でおらつしやりながら、旦那樣の御存じの無い御客來が有るものでございますか。」

「然だなあ。」　と又茶の間を覗いて、

「やあ、綺麗になつた、如何したのだ？」

「まあ、一寸御二階へいらつして御覽じまし。」

と獨り喜むでおる老婢に逐揚げられて、柳之助は煙に捲かれながら昇つて見れば、實に二階の綺麗になつたことは、住荒した我家の俤は無くて、別けて驚かれたのは、始終陰々として一種の氣の鬱つておたのが、廓然と晴れて隅々まで、眩いほど明くなつたのである。而して不思議なのは、二人の居らぬのである。摧乎と座敷の中央に座つて、四邊を珍しさうに眴しておると、元が昇つて來る。

「お客様は如何した？」

「今し方御風呂へ御出になりました。」

「綺麗になつたな！如何したのだ。」

元は始めて大掃除の始末を明して、御客様の骨折の疎ならぬ趣を陳べる。柳之助は至極滿足して、然れば此母親に當分居てもらつたならば、幾許慰められるであらう、と益懷しくなるに就けて、昨日あたりから、必ずしも忘れるではないが、幾分か紛れるかして、此日頃犇りと胸に盈ちてゐた愁も次第に蒸發して、其量を減じて行くやうに覺ゆるのである。

もう歸るか、もう歸るか、と待つ間を獨兀然としてゐると、一旦蒸發したものが忽ち集合して、又胸が苦しく塞がる。

這麼に家を綺麗にした所を頼さんに見せて、喜ぶ所が見たい。此家には限らぬ、甚麼物が有つても、甚麼事を爲ても、自分一人が喜ぶだけでは、一向張合は無い。頼さんに喜むでもらふのが自分の一種の喜である。

愁い事がある、頼さんが傍から慰めてくれる！樂みな事がある、頼さんが一所に喜むでくれる！であるから

何を爲る効もあつたのだ。今では其張合を失つて了つた。吁、寂しい、心細い！渺々たる太洋に唯獨泛むでゐるやうなものだ。世間に人は多いけれど、其は涙のやうなもので、決して頼にはならぬ。頼になる人は死で了つたのだ。

情無い、情無い！生きてゐたらばと思ふと、身も世もあられぬほど戀しくなつて、コートの内衣兜から急に紙包の寫眞を出して、づらりと四枚疊の上に並べて、片手を支いて、眤と眺めてゐたが、蹌て束髪の一枚を取擧げて、生けるが如く接吻をすると、涙がぽつたりと寫眞の横顔を霑した。手早く手巾を出して、物と拭いて、次は島田のを取つて、視てゐる最中、二人の歸つた物音に、慌てゝ掻集めて、紙に引裹むで、衣兜に入れて、手巾を遺れて立起る。直に二人は昇つて來て、柳之助の顔を見ると、泣いた目は未だ濡れてゐる、母親は何とも言はぬがお島は頼に見る。拭かうにも手巾は無し、連に瞬きをしながら、鼻聲で掃除の禮を述べる。

獨りで居れば憶出すが、母親の前では例の紛れて、此日も然ほどは味氣無いでもなく暮して、夜となる。夕飯には母親の注意で一銚子付けて、食後には茶を點れて、一時お島の琴の調があつて、元も呼ばれて、左も

右も人數であるから、それだけ賑に十時頃まで雜談をして、三人は二階に寢る。元の方便品は殊勝ながら、都合に因りて母親が陰に差止めたのである。

朝になると、寒いのに母親が効々しく先に立つて、お島を敵手に食事から、衣類から、時間の注意までして、出勤せねばならぬやうに仕向けるので、柳之助は義理にも出掛ける。

お類に成代つて氣を着けるのが母親で、動くのがお島で、此二人が寄つて、お類の居た時のやうに柳之助の世話を爲るのであるが、その行屆く點から謂はゞ、世慣れぬお類が、人形に衣類を着せるやうな世帶の持方とは差つて一家の爲にも、一身の爲にも、彼此柳之助に取つては、數倍の利益はあるのである。

母親の善く爲てくれる事も、お島の善く働いてくれる事も、柳之助は有繋に解らぬではなかつた。或事に就いては用意と謂ひ、懇切と謂ひ、母たる人は母だけに到底類樣などは企及も無い、葉山が曾て「年寄も世帶道具の一つなり」と云ふことを言つて、自分の經濟の不取締を責めた事も今更思中る、ではあるが、爰に一件其等には換へられぬ大缺點があつて、謂ふに謂はれぬ不足を感じる。それは懇切に於て、用意に於て、秋毫申分は無いやうなものゝ、又全く無いでもないと云ふのは、總ての仕事が機械的である。其實決して

那樣事實ではないのであるが、左右柳之助には然う感じられる。此機械的——其大缺點が柳之助の最も胸に徹へて、益類さんの忘れられぬ所以である。

母親を始として、お島も元も寄つて聚つて、下にも置かぬやうにして待す。お類は殆ど放出して置いて、現在給仕に付いてゐながら、自分の氣儘に手を塞げてゐる時には、「おい、飯！」と言ふのを、「貴方、手があるぢやありませんか。」と見向もせぬ。それほどならば始から老婢を付けて置いたが可さゝうなものを、其は柳之助が不承知で、言はれて見れば如何にも手があるのであるから、其手を役つて杓子を持てば、「あれ、然う下から掘つちや可けないわ。」と小突れる。

非機械的も亦甚矣が、柳之助の身に取つては、是が至極滿足なので、或者の深切よりは或者の邪慳が好いと云ふ其片意地を慰めるには、千萬の或者の深切も、到底如何とも爲ることは稱はぬので。

然し、其が深切であつて見れば、柳之助も喜ばぬではない。唯他の或者の邪慳に比べては、不足に思ふ所もあるが、決して其をば深切の到らぬ故とは考へぬ。母親をも懷しいものに思ふ、が其裏に例の不足があるので、彼の心は安じない、獨で居れば憶出す、憶出せば耐らぬほど懇しくなる。如何したらば此の不足が無く

なるか、と云ふ事に就いては、柳之助は全く考へなかつた、頼さんさへ、来つたならば、と始終思ふ外には。而して頼さんの外には此不足を充すものは断じて無いと信ずるほど、追慕の念は彌已まぬのである。

獨り母親が其を考へたのである。葉山も陰に心掛けてはゐるが、母親の方が差迫つて考へてゐる。其事に就いてか、外に用事があつてか、此日柳之助が出ると間も無く、母親はお島を遣して單身で出掛けた。それを送つて二人は奥へ入りながら、

「お嬢様、お一人でお寂しうございませう。」

「姉様が居ると好いのですけれど。」

「然やうでございますとも。折角御泊にお在あそばしても、奥様が居らつしやいませんではお樂がございませんねえ。今日は半休でございますから、直に旦那様も御歸來になります。」

「兄様ぢや困るわ。」

「御姉様の代に御世話をなすつて上げて下さいまし。何を致しても私では御意に入らないのでございますから。」

「私も困るわ。」

（五）の三

柳之助は歸つて來る、食事を濟す、飄然と二階へ昇る。續いて元は勝手へ退つて片付物をする。半時間ばかり經つて、其所を仕舞ふと、茶の間に出て來て、まづ火鉢に取付く。二階は闃寂としてゐる。

大相靜だ。お二人とも睨合で、然ぞ窮つて御在なのだらう、と元は勤篤に見舞に行つて見れば、柳之助が惘然と火鉢に靠れて、傍の机に厚い西洋本の畫の入つたのが披いてあるばかりで、お島の影も見えぬ。

「おや、旦那様、お嬢様は？」

「知らんよ。」　と柳之助は澄してゐる。

「おや、おや、御二階ぢやないのでございますか。」

「然だ。阿母さんは何時頃歸つて來られるのだ。」

「私は一向存じませんで、それはお嬢様が。おや、まあ何地へ行らつしやいましたらう。」

と元は倉皇下りて、

「お嬢様！」　と呼んで見ると、小座敷の内で返事をする。

「あれ、まあ此方に在らしつたのでございますか、私はお二階だとばかり存じましたのに。」

と扉を啓ければ、窓の好い日向で新聞を見てゐるのである。

「貴方、お二階へ行らしつてゐて下さいましよ。」

「何して在らつしやるの？」　と振向く拍子に炳然と眼鏡が殿し〳〵光る。噫、島田に眼鏡！折角のお嬢様も體無しになる、と元は熟思ふ。彼の解つた阿母様が如何間違つて這麼眞似を爲せるのであらう、と最一つ熟思ひながら。

「又何だか碎いでゐらつしやいますから。」

「然ですか。」　とお島は起上つて、一寸身扉をしてから出て行く。二階の障子を啓けると、

「兄様！」　と聲を懸けたが、柳之助は其を聞くと、甚麼ものであつたか、異に胸が騷ぐやうな心地がした。

彼の「兄様！」と呼ぶのは今に始めたのでは無い、お類の存生中折々遊びに來た時分からの「兄様！」で、

又改めては一昨日からの「兄様！」である。けれども柳之助の耳には、今日の「兄様！」は例のとは違つて、別の意味でもあるやうに聞えたのである。

その所爲か、入つて來たのを見向いたばかりで、柳之助は返事が不圖出なかつた。例よりは羞しさうに入つて來て、火鉢を一寸離れて、投出されたと云つた風に坐つて、

「遊びに參りましたよ。」

魂ての樣子が何と無く變つてゐるので、柳之助も調子が合はなくて、

「あら、然ですか。」　と變に稜のある應答をして、幅つたいやうにしてゐるので、お島は間が拔けて、少しばかり忸怩ついたが、

「お茶でも點れませうか。」

と火鉢の傍へ躙寄れば、柳之助は迷惑さうに、靠れてゐた身を退けて、

「はあ。」　と机の方へ向直る。

見ると、火は大方白くなつてゐるので、お島は炭を繼ぎ始めたが、餘り顏と顏との近いのが眩いやうで、柳

之助は益迷身になる。お島は割に憶した樣子も無く、小取廻に其邊の始末をして、湯の沸くのを待つてゐる。

机に向いて、書見を爲るでもないに、柳之助は何を一言云ふでもなければ、此方を向かうでもない。實はお島も話が無いので、鐵瓶の胴を拏りながら、

「晩方には阿母樣は歸ります。」

「あゝ、然ですか。」　と一寸此方を向いたかと思ふと、直に彼方を向いて了ふ。

「御歸になつたら、能く氣を着けてあげろ、と然う申して參りましたけれど、私には何だか一向氣が着きませんから……。」

と例の片靨でお島は微笑む。

「いや、別に用も無いですから。」

「御用が有りましたら、御遠慮無く。」

「可いです。」

話は又此で斷れて了つたが、湯は未だ沸きさうにもせぬので、お島は氣にして炭を直してゐると、

「茶は私が點れるですから、島さんは下へ行つても可いです。」

「あら、何せ用は無いのですから、私が致しますよ。兄樣は御勉强なさるなら、爲すつて下さいまし。今直に沸きます。」

それでもとは推して言はれぬので、柳之助は已むを得ず書見を始めたが、氣が侵して讀むではゐられぬ、如何かしてお島を逐拂はう、と其ばかりを考へる。

お島の方では逐拂はれる人とは夢にも知らぬから、一廉引承けた氣で勤めてゐるのであるが、自分も亦多少面白づくで、彼此世話をして見たい氣味の無きにしもあらざる態で。內に居て阿爺樣の腰を按つて睡氣催すのとは、同じ面倒を見るのでも、大分氣持が違ふ。

若し柳之助が尋常であつて、此くらゐに口數を寡く、此くらゐに冷遇をした事なら、お島は艴然として起つに違無い。けれども、柳之助の素氣無いことは、豫て心得てゐる。其口數の寡いのも、其冷遇なのも今日に限つた事ではない、と十分に呑込むでゐるから、恁云ふ人物だと覺悟をして、格別氣にも懸けぬのに、想はざりきー柳之助は難有迷惑で、如何か早く始末を付けたい、と實は勃々してゐるので。

「あゝチン〳〵いつて來ましたよ。」

とお島は鐵瓶に觸つて見る。

何か言はれる度に柳之助は冷汗が出るかと思ふほど可厭で可厭でならぬ。其を怀へる爲に兩手で頭を支へて見たくもない本を眺と視てゐる。その樣子をお島は見付けて、窃と顏を覗けば、眉を皺めて、息を屏めてゞもゐるやうに見えるので、

「兄樣、如何か爲すつて？」　と人懶こい調子で訊ねる。

その「兄樣！」が骨身に浸みて、柳之助は耐へられぬほど可厭であつた。物を言つてくれなければ可いに、と浸々思ふのに、連に何か言ふ。其上に「兄樣！」は我慢がしかねる。

「いゝや。別に……。」　と言ひながら、起つより早く傴々と座敷を出て、下りは下りたが、行所も無いから、庭へ出る、嚴しく寒い。寒いけれど出たものであるから、足の向くまゝに、地尻の杉垣と物置の都とで衽形に劃られた物干場の方へ廻つて見ると、隈笹の所斑に生へた日陰に、長い霜柱の蟲々と立つてゐるのが癪に障つて、三足ばかり踏付けて、颼と來る風に吹捲られながら、樣側に還つて來れば、お島

が丁と其處に待つてゐて、

「本當に如何なすつて？」

柳之助は進退谷つて、

「寒いですよ、二階へお出なさい。」

「貴方も入らつしやいな。」

愈弱つたが、免るゝ路も無い、

「行くです。」

「さあ。」

此困厄に就けても柳之助は母親の歸來が待たれた。お島は又、母親が傍で、睨まれるのは餘り香しくない、實は何でも遣つてのけたい氣が勝つてゐるので、それには煙たいものゝ無い方が勝手である。

從來度々お島は遊びにも來たが、柳之助と對坐は今日が初發なので、姉が居なければ母親が居て、毎も自分の出る幕は無かつたから、萬事控目に控目にとしてゐたのである。

元來母親の敎育の方針は、何所までも女子は溫和に品好く、と云ふのであるから、娘に向つての小言は、其躾ばかりであつた。姉のお類も隨分世話を燒かせたが、母親の望む所迄は行かぬ間に、柳之助に緣付いたかと思ふと直に今度の始末となつた。お島は又姉より一倍世話を燒かせる、則ち母親の敎育の方針には姉より多く其性質が悖つてゐるのであるが、母親はそれでもお類を躾けた時のやうに、焦燥と氣骨は折らぬので、目も離されぬやうにしてゐながら、こつそりと遠退いては眺めてゐる氣味がある。畢竟それは、お島が何でも遣つて退けやうと云ふ氣だけに如才無い所があつて、其點に於いては、我子ながらと思ふほど出來すのが、母親は何より嬉くて、何程の事を爲得るか、それが見たさに不知綱を弛める事もあるのである。

姉のお類も決して遲鈍の方ではなかつた。なるほど躾ける目から見たら、足はぬ所も數有つたらうけれど、母親が案じたほどの意氣地無では無かつたのである。然し、その十八で爲た所作をばお島は十五で爲て見せた。賢い代には間違ふと往々と出過ぎる。其を出過ぎぬやうに、而して賢い所は何所までも賢いやうに、と母親は始終笞を執つてゐるのであるが、何かに就けて此才氣が穗に露はれるから、自から溫和に品好くといふ母親の注文には合ひかねた。けれども親の慾は、能く氣が着いて、拔目の無いが上に、溫和に品好くといふのであるから、お島の身にしては極めての難題である。右の通賢いから、母親の前では愁ひ働振をして謎られうよりは、樂な溫和の方が勝と極めてゐたから、それで丁度好い加減に如才無くて、十に七までは母親の氣に稱つてゐた。因で親の前のお島と、人中へ出てのお島とは、大分調子が變るのである。

柳之助は始めて其調子に出會つたので、唯呆れるばかり。細君の類さんさへ、然うまでは爲てくれなかつた事を、この人は立入つて爲てくれさうなので、何と無く氣味惡く思はれる。お島の方では又、變人とは聞いてゐたが、浸々傍にゐるのは今日が初度であるが、なるほど變人に感心して、彼の姉樣が能く此人に辛抱が出來た、と緣と云ふものゝ不思議と驚くばかり。

柳之助は如何ともお島を逐拂ひかねて、爲う事無しの一寸遁に、其最嫌ひのものゝ一つである浴になりと行て來うと思立つた、借したものを督責るやうにして勸めたが、毎も渋黑い頸をして、傍へ寄ると芬と膩臭いのには類さんも弱らせられた、やう〳〵諫めて一週間に一度とした、其さへ傍から突々かれなければ容易に出て行かぬ人が、今日は自分から浴にとは、變だと元は思つた。

其日の薄暮に母親は還つて來たのである。柳之助は盲龜に浮木の歡喜であつたが、例の素氣無のことである

から、然ほど顔色にも言語にも顯はれぬ、唯火鉢の前面に坐らせて、何を恁と話を爲やうでもないが、内心は切に嬉いので。怨靈は仍其所に姿を顯してゐても、此難有い護符のある爲に、寄らうにも寄られず、立疎になつて怨めしげに見てゐる、それでも有繋に氣丈夫であるやうな想。その護符の母親が還つて來ると與に、怨靈のお島の樣子は脫然と變つて、是ならば傍に居られても未だ〳〵辛抱の出來るほど、遽に溫雅になつて殆ど別人のやうに端然としてゐる。如何にも端然としてゐるは可いが、母親が居ると居ないとでは、是程違ふかと思へば、何の故に母親が居れば溫和にしてゐて、居なくなると忽ち馴々しくするのであるか、柳之助は甚麼事にもお島の了簡が解めぬのである。實に柳之助の怪む如く、お島は急に溫和になつて、母親の傍が離れられぬやうに内端にしてゐる。それをば柳之助は不思議さうに、且は氣味が好さゝうに、折々見遣つては母親の話を聽いてゐた。

其内に母親は少し改つて、

「それからねえ……。」　と言出したが、餘り言ひたくはない事らしい樣子で、

「お茶を一つおくれな。」　と故とお島の方を向いて、何と言つたものであらう、とそのまゝ考へる體であつたが、旋て此方を向くと、

「内へ歸つて、今日話をして見たのですよ。」

何の話やら一寸解らなかつたので、柳之助は胡亂に、

「はあ。」　と先づ應へると、

「あの話、私が當分此方に來てゐる話ね、……。」

それで好く解つて、

「はあ、はあ、はあ。」

「話をしました所が、殿君の言ひますには、未だ如何も加減が爽快しないのに、私が居なくては信に不都合だ。何ならば恁しては如何だ、お島はどうせ遊んで居るのだから、私の代に當分お島を置いて、お世話を爲てあげたが可からう、ッてねえ。」

衝跳したのは柳之助、お島は別條も無く聞いてゐる。

「私と違つてお島ならば、若いものゝ事ではあるしゝますから、お嬶代りにもなるし……。」